

---

# my moon

白亜迦舞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

my moon

### 【Zコード】

Z5019D

### 【作者名】

白亜迦舞

### 【あらすじ】

「夢」、それは世界の嬰児、欠片にして影。「現」に呑まれぬために夢世界は互いに争い、喰らい合っていた。ある時、「現」の世界から一人の少年が夢同士の戦場に迷い込む。夢同士が争うという儚い戦場で彼は何を思うのか。少年の葛藤と、共に暮らす女性たちとの交流を描く和風トーキングベッドが語られはじめる。

## 0・1 「夢の欠片」

そこに炎があつた。灼熱が肉を焼いていた。

そこに風があつた。風は刃となり舞う。

そこに水があつた。傷を浄め屍を押し流す。

そこに光があつた。幻が未来を見せていた。

そこに闇があつた。深いところで何もしていない。

「助けて」

呆然と呟く女の声。

「…………！ こなくていい。私達は、私達の手で何とかできるんだから」

弱氣から強氣。意志を取り戻した声が聞く者の同情をはねのけた。

「戦うのが怖いの。傷つくことが怖い。傷つけることが怖い」  
映像イメージが伝わってきた。それは屍の転がる田畠。実りを得る場所を、

死が汚していた。

「私の恐怖を消して。私達の家を守れるように。そのためなら、  
なにをしてもいいから。…………私を好きにしても良いから。この  
カラダも口々口も好きにして良いから！」

少女の声が聞こえなくなつた。

今いるのは闇の中。黒い風、黒い虚空。何も見えない。

何も見えない。しかし、存在を感じる。

下 重力を感じる方向 に大地がある。この身からずいぶん離れている。

この身は花びら。もしくは一枚の地図。ひらりひらりと空中に舞いながら、少しずつ大地に引き寄せられていく。

この身のような花びらは周囲にもあった。

向こうで、一枚の花びらがぶつかつた。

すべては闇の中。見えない中で、一方の花びらの消失を感じた。

私達は、夢。

夢はいつか覚める。現実という大地に落ちて解ける雪の一片のよ  
うに。

私達は、世界。

現ではない、夢の世界は互いに喰らいあつていた。少しでも口と

いつ夢が長引くようになつた。

どうして生きている?  
どうしてここにある?

ここにいていいですか? 理由はないけれど。  
無が怖いから。

## 0・2 「夜のとびら」

見上げる夜空は死のようだと思つ。

都会の星の見えない夜空はただ真つ黒に塗りつぶされていて、その深さはわからない。

星の輝きのない夜は、虚ろ。こんな果てない虚空を、人は「死」と呼ぶのではないのだろうか。

前にも後ろにも進めないような虚ろ。絶望、そして死。

僕が死のことを考えているのに意味はない。

意味がないので、僕は就寝の前に散歩に出ることにした。家を出る時、父が気のない声で、氣をつけろよ、と言つた。母の言葉は無い。なぜなら僕の家に母親はないから。

外履きを履いたところで飼い猫の千代は僕を追つて出てきた。彼女は散歩ができる猫だ。それも綱なしで。主観的な言い方をするならば、彼女は僕の良く懷いている。散歩をする時はだいたいいつもくるし、そとでは一定の距離を保ち僕から離れない。

外に出る。初夏の夜は涼しい。頭上には、星の見えない炭のダムみたいな夜空がある。炭と言えば焼死体か。……また、死について考えてしまつた。他に考へることはないのだろうか。

あ、「ずれ」なんてどうだろう。

血口採点にして四点くらい明るい議題を思考の中心に据えて、僕は進む方向を街灯のなさそうな方向に決めて歩き出した。

そう、僕はそれでいた。世間とか社会とかそういうものから。まあ、それは若者らしい自然な悩みなのだろう。世の中は、僕がそれでいようとずれてなかろうと構わず進むし。

でも、例えば僕が周りに人とは違う特異な力を持っていたとした  
ら、どうだろう。僕には物に「動いてもらいつ」ことができる。「動  
かす」のではなく「動いてもらつ」のだ。つまり、いいかえれば、  
僕は物にお願いを聞いてもらいつことができるのだ。

が、それはずれとはちょっと違う。僕の小学校の頃のクラスメイ  
トには心で話せる女子がいた。彼女は周囲によくなじんでいた。今  
はどうしていることだろう。

### 中二病。

ちなみに僕は現在高校二年生だ。中学校時代、対して問題を起こ  
すこともなく、成績は高いところで安定し、推薦入学によってつつ  
がなく僕は高校に上がった。

僕は社会的には今のところ問題ない人間だと思つ。

### 母親がいない。

母は中学一年の頃に車に轢かれて死んだ。父は悲しんでいるそぶ  
りを表に出さなかつた。僕はそれから間もなくしてチヨに出会つた。  
あの年は、悲しくて嬉しかつた。

これも、ずれていることには関係ない。

しかし、こうなると僕がずれているといつ理由がない。理由が  
。

理由がない。

そう、理由がない。

僕が世界とずれているのには理由がない。ただ、何となくずれて  
いるのだった。

ずれているのが普通だ、僕は。

そして異常だ

僕はこの世界で生まれた。だから、この世界で生きていくことには  
何も問題はない。不満もない。

もし、何処か違う世界から招かれることがあるとしたら、僕

はどうしよう。

新しい議題を見付けた。

しかし、ふと現実に帰つて周りを見ると、そこが僕の目指していた場所、街灯のない星の見える場所であることに僕は気付いた。いや。

ここは街灯がないのではなくて、周りの電灯がすべて故障しているのだ。

この場所に立ち籠める闇は、僕の知る「闇」よりも少し深い。闇の中心には小さな公園があった。頭上には星空、僕の望んだ。そして、花びら。花びらが舞っていた。ずっと高く、遠い天空に、いくつも。

飛んでいる鳥を見るようなものだ。

しかし、視界の中で十ミリほどの大きさがあると言つことは、実際は旅客機ほどの大きさがあるのでどうか、あの花びらは。

地上に目を戻す。

目の前の公園は柵に囲まれていて、門が設けられていた。アーチ型の門は夜闇の中ではぱっくりと口を開けていた。門自体はたいしたものではない。横から入れる。ベンキがはげている。ただ地面に突き刺されたアーチの、向こう側とこちら側の闇に違いなどありはない。

でも、それは門だつた。二つの界を分けてつなぐ門。僕がここをくぐれば、違う世界へと僕は運ばれるだろう。確信する。さて、どうしようか。

この門をぐぐるのに理由がいるだろうか。

僕のしてきたことすべてに理由があつたわけではない。でも、どちらかといえば、理由のある行為が多かつた気がする。

考えながら、少し待つてみる。何か起きないだろうかと。すると、花びらが、例の大きな花びらが一枚空から降りてきた。

本当に大きいな。

だから、僕は門をくぐることにした。あれを確かめるために、この世界を旅立つことにした。

ちょっと待て。

この世界を去るとして、それなら僕は何のためにここまでこの世界で生きてきたんだ？

少し考えて結論する。ああなんだ、僕は理由もなく生きてたんだ。でも、戻つてくるかも知れない。そうしたら、僕のこの世界での生活にも理由があったことになる、違うだろ？

確かめに行こう、色々な事を。それが、いま僕が歩き出す理由。

十六年生きた世界から出た時、僕がまず入った世界は眠りの世界だった。

## 0・2 「夜のとなり」（後書き）

ところがではじまりました、白痴遊舞初の長編小説。はつきり言って最後まで書ききれるか不安です。努力はしますけど。

十五禁ですが、ベットシーンを細々と書くつもりは一切ありません。「そういうことがあつた」という表現だけに留まります。

「残酷な描写が」というのも、まあ、私程度の表現能力じゃ大したことないと思います。

ただし、この物語はダークファンタジーのようなので、明るくて清らかな物語をお求めの方には、希望に添えないと思います。

感想をお待ちしております。

では、最後までお付き合い願います。

## 1・1 「大根畠と戦場」

目が覚めた時僕の寝床となっていたのは大根畠だった。からだに、力強い土のにおいと青々とした大根のにおいがしみついていた。

目の上にかかつて いた葉をどけ身を起こす。突き抜けるように青い空。

真夏には、まだ遠いはずなんだけれど。

奇妙に思いつつ、立ち上がりそして足元を見た。

僕は、中学一年の時以来目にしていないものを見た。

人の死体。

のどとそこから下に、鋭利な何かで斬られた傷がいくつも付いていた。四年前、棺に入っていた母の亡骸にはなかつたものだ。

僕は死体の横で寝ていたんだ。

胃にむかつきを感じた。

このまま大根の間に吐こうかどうか考えた。だが、その思考は三秒ほどで打ち切られた。

ぐしゃり、と背後で大根が踏みつけられる音がして、振り返るとそこには一本足で歩く毛むくじやらの化け物がいた。

歪な三ツ目が僕を憎しみを込めて見ていた。

とつさに走り出した。駆け引きも何もなく。

三ツ目の化け物が追つてくる。全力で走る僕に少しづつ間を詰めてきた。四歩前に僕がいた場所に、いま奴がいる。……ああ、いつのまにか、三歩前の場所にいるよ。

背中越しに息吹を感じた。血のにおいに満ちた、必殺の息吹。さ

して鋭くなさそなあの口蓋で、僕の肉を咀嚼したいのだろうが、奴は。

痛いだろうな。

僕は想像する。自分の肉体が少しづつ噛み千切られる痛みの中で、自分という意識が、死という名の無の海に沈んで消えていくことを。そして僕は戦慄した。僕は恐怖した。気が狂いそうな程強い恐怖が僕を駆り立てる。

苦し紛れに見上げた空。あの空はあんなにも汚れないのに。

そう、この空は未だ見たことがないほど清浄で澄み渡っていた。都会の、ビル侵された空とは異とされる、何一つ邪魔物のない自由な空<sup>よど</sup>瀬みのない空がここにはある――！

つまづいた。

死は獲物の動きが止まつたことを知り、その足をゆるめる。少しでも狩の時間を長引かせるために。

化け物の足が、僕の足を踏みつけた。

痛い

コワイ。

\*

「 炎よ！」

\*

恐怖ではち切れそうになつた頭蓋骨の上を熱がなめていった。

化け物の足がから僕の足が自由になつた。動物的な単純思考で草むらを這いすり、化け物から距離を取る。それから、身を転がして化け物を見た。化け物は 。

そこには、炎に包まれた、人間、がいた。

「ぐああああああああああおおおお！」

頭を抱え、地面を転げ回り悶える一人の人間。その光景はまるで映画のように、僕は現実味を感じられなかつた。

だが、肉の焼けるにおいを鼻にした時、僕は反射的に嘔吐してい

た。

ひとしきり吐いて、それでもまだ胃が痙攣しているのを感じた。吐き気はおさまらない。だが、僕は一度目を反らした光景に、再び目を向けてしまう。

しかし、そこにはもう生きて悶え苦しむ人間はいなかつた。そこには、バーベキューの燃えかすのような残骸と焦げた大根の葉しかなかつた。

立ち上がるうと思つた。

その時、初めて僕の側に誰かが立つてゐることに気が付いた。

気が付いて、身がすくんだ。

けれど、その「誰か」はただ静かに傍に立つてゐるだけだった。もし、「誰か」が僕を狩るためにここにいるのならば、僕はとっくに死んでいるだろう。

だから、僕はおそるおそるだが傍に立つ者を見上げた。

そこにいたのは赫い髪の女性。

珊瑚色の双眸が僕を見下ろしていた。

## 1・2 「赫い少女との出会い」

僕を見下ろす珊瑚色の双眸。そこに込められるのは、警戒。先程のような殺氣は感じないが、敵意があるのは否めないことだつた。僕と目を合わせ続けていても、そのままでは彼女が結んだ口を開く様子はなかつた。こちらの出方を最大の警戒で窺つてゐる。だが、僕の方から思い切つて話しかけてみるしかない。

「あ、あの……、もしかして、さつき助けてくれました」

あの人間をあなたが焼いたんですか？　どうやってやつたのですか？

そんなことまできかない、当たり前のことがだが。

「何処から来たの？」

尋問がはじまつた。高圧的な彼女の態度に、僕は大人しく服従し彼女が問うままに答える。

「…………から」僕の住所だ。

「…………名前は？」

名前？

何故だらう。思い出せない。

答えられない。黙していると身に危険が及ぶと判断したので、あとが、えつと、とか適当に呟いて間をつなぎながら、僕は自分の名前を必死に思い出そうとした。しかし、だめだ、思い出せない。

『ツミ』？

あれ、僕つてそんな名前だつたつけ？

時間切れになつてしまつた。ふん、と頭上から鼻で嗤う声が聞こえた。

「どうやら、『新入り』のようね。……こんな時に「新入り？」彼女は何を言つてゐるんだ。

彼女の腰に当たっていた右手が持ち上げられた。次の瞬間、僕の目と鼻の先には火があった。

「ひつ！」

反射的に火から身を退き、そのために両手を後ろについた。火から距離を置いて気付いたことがあった。火は女性のまっすぐ伸ばして揃えられた人差し指と中指の先で燃えていた。彼女の指を焦がすことなく。

「質問に答えなさい」

従順に、はい、と答える。

「私と戦うつもり、ある？」

「い、いいえ！」

「嘘、ね」

火が眼球をなめるくらいに近づく。

「う、嘘じゃありません！」

「証拠は？」

「あ、ありませんけど……」

火が消えた。

ほつとしたのも束の間、目の前から消えた彼女の右手の代わりに、左足が僕の方に出されていた。

「もし、私と対立する気がないのなら、靴を舐めて証し立てなさい」

抵抗感でとつさに返答できなかつた。そんな僕に、彼女はおそれていた通りの残酷な宣告を下す。

「さもなければ、焼き殺すわ」

選択の余地はない。僕は彼女の足の上に身体を傾けた。

スニーカーを履いた彼女の足。少し泥に汚れている。それを両手で包み、顔を寄せ、なめる。

土の味がした。

顔を離してみると、スニーカーには僕の唾液がべつとつと付いていた。

頭上から女性の満足そうな声が降りてきた。

「いいでしょ。立ちなさい

立ち上ると、彼女の背丈が僕とだいたい同じ物であることがわかつた。同じ高さで見る彼女の顔は、すっと通る整った鼻梁につややかな唇、白い肌、そして何より印象的なのは虹彩が珊瑚のように朱いつり上がった目。

「どこかで休みたいでしょ？」

彼女の問う口調は、僕を完全に見下したそれだった。

「い、いいえ。お気遣いなく。あなたの『ご自由になさって下さい。わたしはあなたの後ろについていきますから』

僕は彼女に服従することを拒絶はしない。さきほどの炎から推測するに、彼女は僕の命の恩人であるうし、逆らつても得るところは何もなさそだからである。それに、僕は彼女を美しいと感じた。美しい女性の下なら僕は嫌わない。

が、彼女はそれも一笑に付した。

「別にへりくだらなくて結構よ。敬語も必要なし。それと、私は疲れたからどのみち家に帰る。言つておくけど、ここいらに『私達の家以外に住める場所はないわよ』

「そうですか、なら」

「敬語はいらない！」

「ごめん。君についていくよ」

彼女は不愉快そうに顔をしかめる。また火を突きつけられるかとひやりとしたが

「私の名前は アカ 。これからはそう呼びなさい」  
火はなかつた。

「赤？」

「意味はないわ。あるいは、いくつも意味がある、と言つことかもね」

アカが僕の方へ軽く手を差し出す。天に向けられた掌に火が起る。

「例えば、炎の『赫』。あんたにむかついたら、これで燃やしてあげる」

「け、結構です」

彼女との微笑ましい関係を結ぶ第一歩として、僕はここで苦笑をしてみた。我ながら引きつった笑いだった。

「あんたのことはなんて呼んだらいいかしら？」

冷たい視線で僕の苦笑を見やつた後、こう尋ねてきた。

僕は少し考えて、答える。

「 ツミ と呼んで」

これは先程、脈絡もなく頭に沸いた音。結局、これが本当に自分の名前なような気がしてならなかつた。

アカはわずかにひるんだような表情を見せた。次の刹那には元の不機嫌な表情に戻つたが。

それ以上彼女は何も言わず、僕に背中を見せ歩き始めた。

背後から彼女の全身を見た。長襦袢の上に梅紫の着物、更にその上に狩衣という古めかしい服装。そのわりに、足にはスニーカーを履いているのだから妙なものだ。

だが、僕はアカの言ったことからすると、これから一生、少なくともしばらくの間だけでも、彼女のほのめかした同居人たちと寝起きを共にすることになるのだろう。

### 1・3 「天戸の弔」

大根畠が芋畠になつたところで、僕とアカは再び化け物に遭遇した。

今度の奴は毛むくじやらではなく、紅い毛のない肌、頭部に一本の角、鬼の姿そのものだった。

鬼は僕たちを見付けて猛然と走り寄ってきた。

僕は怯えてアカの背後に隠れてしまう。

アカは僕を見てはいない。まっすぐに鬼を凝視し、やおら右手を高く掲げる。人差し指と中指を揃えて伸ばした手の形、剣印と呼ばれるらしいその手で自分の目の前の地面を斬るように横に振る。

「……退け」

小規模な炎の壁がアカの目の前に立つ。そこには燃える物などない、あるのは芋の花だけである。

炎の壁に阻まれた鬼が立ち往生する。その間に、彼女は肩に持つて行つた右手に炎の玉を創り出す。

「焼き尽くせ！」

紅い鬼の身体が赫い炎に包まれる。そして悲鳴が上がる。

「きやあああああああ！」

甲高い女の悲鳴だつた。絹を裂くような声に炎は揺らぐが消えはしない。

それはまさしく『地獄変』のよう。

においと光景に吐き気を催したが、僕は吐かなかつた。我慢したからだが、我慢できる自分の冷静さはいつたい何なのだろうと不思議に思つた。しかし、その理由を考えるほどには冷静ではなかつた。アカは自分の焚き火を無感動に眺めているだけだつた。

悲鳴が途絶え、人間の炭ができあがった後は、アカはそれをまたいでさつさと歩き出した。僕は焼死体を迂回しつつ彼女の後を追う。

「質問しても良いかな？」

「歩きながらで良いなら、どうぞ」彼女は振り返らずに答えた。

「どうやって火を熾しているの？」

「それが私の能力だからよ。私が望めば、そこに燃えるものがなくとも火は熾る」

足を速めて彼女の横に並ぶ。僕を見もしない彼女の横顔は、血の氣を少し欠いて少し青ざめていた。

「顔青いよ。大丈夫？」

「大したことじゃないわ」素つ氣なく答えられた。

「私の呼ぶ火は、燃やすものがない時私の『氣』を燃やして存続する。だから、少し疲れただけよ」

僕はもう一つ質問することにした。

「さつきのやつ、最初は鬼だったのに、アカが燃やしたら人になつたよね？ あれはどういうことなの？」

「あいつらは違う『夢』から来ているからよ。夢に住む者は、違う夢に移動すると変質してしまう。もし、自分たちの存在で侵入した世界を塗り替えることができたら、あいつら侵入者は元に戻れる」アカは当たり前のようにこんなことを言うが、僕にはさっぱり何のことだかわからない。

「まぼろし？」

「夢は世界の欠片、現の夢。有限の小世界。……ああ、めんどくさい。あとはササヤキにでも聞きなさい」

「彼らは人間なの？ 君は人間と戦っているの？」

「そうよ。あいつらは人間。そして、私はその人間を燐寸棒にする人殺し。 私達は、生き残るための戦争をしているのよ」

いつたい何ための戦争なのか、僕はわからなかつた。しかし、血と鉄のにおいのするその言葉に僕は身震いした。

今までこちらを見向きもしなかつた彼女が、卒然と赫い瞳でこ

ちらを見た。その口は底意地の悪そうな嘲笑を浮かべて。

「ツミ、あんたにもきっと私の火のような力があるわ。そして、あんたは私達と同じ世界の住人。この意味がわかる？　あんたも、これからその身が果てるまで私のような人殺しとして生きていくのよ。この世界の、屍で築かれた土台を崩さないためにね」

\*

それからしばらく無言の時が過ぎ、そうしている内に僕らの前に一軒の日本家屋が見えてきた。

塀はないが、黒い整った萱葺き屋根に、崩れたところのない土壁。貴祿のある立派な家だった。

堅い木の戸がからからと小気味よい音を立てて開かれた。よく手入れされていいるようだ。僕はこの敷居をまたいだものかと考えたが、「入りなさいよ。　ようこそ私達の家『天戸の宅』へ。あんたはこれから死ぬまでここで住むのよ」

やはり、僕はここで一生住むようだ。

そう言うわけで、僕は氣兼ねなく戸をくぐり、三和土で運動靴を脱いで家に上がる。薄暗い家の、木の床は少しひんやりして足の裏に心地よい。少し、疲弊していた気分が和らぐのを感じた。火のない囲炉裏の前に座るように促される。僕が座ると、アカは九十度ずれた場所に胡座をかけて座った。

そして、彼女はそれ以上喋ることも動くことも止めてしまった。

静寂。かすかに虫の音が、ちりちりと聞こえる。

心休まる時ではある。日本人の心というか、こういう家にいると

とても心和むものを感じる。しかし、さすがにここまで来る道すがら似合つたことを考えれば、このまま空氣に流されてのほほんとできるほど僕は図太くない。アカは仏頂面で座っているし。

「あの……」控えめに呼びかけてみた。

「黙つて座つてなさい。直にササヤキとキズオトが帰つてくるから」またしても、彼女はこちらを向かず言うことだけ言つてくる。僕は食い下がつてみる。

「えつと……」

「お茶？ 家事一般は、竈の火付けと風呂焚き以外はササヤキの領分なの。私が台所に行つても散らかしてしまっだけ。だから、我慢しなさい」

何か、違う。

そんな僕の苦笑を余所に、彼女は囲炉裏の顔を近づけ、ふ、と息を吹きかけた。すると、そこに小さな火が熾きた。

為す術を失つた僕は、それを見ながら名前しか知らぬ誰かを待つことにした。

## カラカラカラ

涼しげな戸の開く音が、待ち人の間に虫に食われたようにぼやけた僕の意識に響き、覚醒させる。七割方眠っていた心が、四割ほど覚醒に近づく。

そして、残りの四割は

「はじめまして、ツミー あたし、キズオトだよ ようしくね  
突然の衝撃に一撃にして覚醒させられた。  
衝撃の実体は一人の少女だった。まだ幼い。

少女に飛び込みの抱擁を受けて、僕は支えきれずに後ろに転倒した。蜂蜜色の長い髪が僕の顔を覆う。

「いたい」

「あ、ごめんツミ。大丈夫？」

なんとか、と答えつつ少女を身体の上から降ろし起き上がる。

首を回して周囲の状況を確かめる、目の前に囲炉裏、僕のすぐ左に先程の空色の瞳の少女（キズオトと言っていた）。そして、前方左にいやつくアカ。そして、囲炉裏を挟んだ戸口側に青い短い髪の背が高い女性が立っていた。

女性は僕の視線に気付き、にこと微笑んだ。

「キズオトが粗相をしてごめんなさいね？ 私はササヤキ。よろしくね」

「あ、はい。こちらこそ」

ササヤキ（囁き？）と名乗る女性は僕やアカより一回りほど年上のようだ、落ち着いた空気が彼女の周りにはあった。月白の生地に魚の文様が入った留袖を身に纏っている。その上から、透ける生地の打掛けを着ている。

キズオトの方は、僕より一回り幼い、多分十歳行くか行かないかぐらいの歳だと思われる。やたらぶかぶかの唐草模様の袴を着ている。開いた襟口から、茶色の小袖が見えていた。

「アカ、お茶……そのまえに、お湯くらい沸かしておいてくれなかつたの？」

ササヤキさんがア力を嗜めるように言つ。ソリ言つに言つ。

「台所に行きたくなかったから……」

「もう、しようがない子ね。お手伝いなさい」

妙に歯切れの悪いアカだつた。さすがの彼女も、ササヤキさんには逆らえないようだつた。母親というか姉というか、ササヤキさんは本当に大人の女性らしい雰囲気を持っている。

僕はキズオトと一人になつた。彼女が空色の目をくりくりさせな

がら話しかけてきた。

「ねえ、ツミはやつぱり『現』から来たの？」

「『現』……」

良い機会なので、僕は彼女に気になっていた幾つかのことなどを教えてもらつことにした。

「キズオト。僕には君たちの言つ『現』や『夢』というのがわからない。一体それは何なの？ アカは戦争をしていると言つていたけど、もしかして君やササヤキさんも戦つているの？」

そうだよと彼女は無邪気に答える。

「えっとね、まず『現』と『夢』の違うところを教えるね。ツミのいた世界つてとっても広かつたでしょ？ それはね、『現』神様がちゃんと創つた世界だからだよ。『夢』はね、『現』の欠片みたいな世界。『夢』の世界は狭いの。歩いて半日くらいで端まで行ける」

「世界に端があるの？」

「うん、崖がすとーんとあって、そつから先は何もないの。

「それでね、『夢』はいくつもあって、それが時々ぶつかり合つた。ぶつかつた『夢』同士は戦争をしなくちゃいけない。勝つたほうは存在し続け、負けたほうは消滅する」

そんな……信じられない。

「僕は……、こんな世界で暮らさないといけないのか」

「うん。……それでね、もし、ツミが戦う力を持つていたら、私たちと一緒に戦争してもらつの」

なんてことだ。

キズオトが、こんな幼い少女もまた平氣で『戦争』と口にする。

あまりの事実に、無意識に笑い出してさえしまつ。

「……そうか、わかつたよキズオト。ありがとう、教えてくれて。

ところで、君はどうして初め会つたときから僕の名前を知つていたんだ？」

問われた彼女は何故か誇らしそうに胸を張つて、笑つた。

「それはね、あたしに風を使う力があるからだよ。この世界の中で起きていることは、風が全部教えてくれるの」

「それはすごいな」

便利そうな力だが、いくら狭い世界とはいっても起きていることが全部わかるのは、ただうるさいだけのような気もする。僕の思考とは別に、キズオトがいたずらっぽく笑いながら身を寄せてきた。なかなか、表情豊かな子だ。

「ねえねえ、シミ。アカのこと、どう思つ?」

「へ?」

ちょっと予想外の質問だつた。

「わからないよ、まだ会つたばかりだし。……ちょっと戸難しい」というか強気な人だとは思つたけど

うんうん、と何故か然り顔でうなずく彼女。

「アカはね、恥ずかしがり屋さんだから。シミがこの世界の事を聞いても詳しく教えてくれなかつたのも、そういうことだから、許してあげてね?」

「えつと……、恥ずかしがり屋? 何で僕の前でそんな……」

「もう、シミは鈍いの? アカはね、シミの事を……」

「キズオト」

まるで氷のような声だった。もしかして、彼女は炎だけではなく氷も操るのではないのだろうか?

「余計なこと新入りに吹き込んだら、もろとも焼くわよ」

「あ、はは。わかつたよ、アカ。今日はこれくらいにしておくね

「今日は?」

「アカ、キズオト、ご飯ですよ」

ササヤキさんが湯気の立つ四つのお椀を、大きなお盆に載せて持つてきた。が、渡された中身を見て一言。

少ない。

「食べて、休んだらすぐ戦いに出るからね。あんまり沢山は食べちゃ駄目なの」

「……僕も行くんですね」

「当たり前じゃない。男でしょ。せいぜい頑張りなさいよ」

僕にとつて酷なことを、アカはさらりと言つてくれる。あんまり素つ気なく言つてくれたせいか、拒絶する氣も起きなかつた。

というより、何故だろう。先程キズオトに戦への参加を告げられた時は嫌だと思ったが、こうしてみんなと座つているとあまり抵抗感が沸いてこない。

手にしたお椀の中身。蕎麦と高野豆腐が醤油スープで煮られたあつさりした汁物。あたたかい。

ここにいること自体は嫌じゃない。むしろ、嬉しい。強気なアカ、優しいササヤキさん、無邪気なキズオト。まだ合つたばかりなのに、三人を家族のように親しく感じる。ここにいたい、ここにいるためなら多少の代償だつて惜しくはない、そんなふうにさえ思える。僕には父親がいた。母が死んでから、彼は人との接し方を忘れ、ひたすら無関心に僕と会話するだけだった。僕は家の外でも中でも人に心を許すことはできなくなつた。僕の心に通じる唯一の生きた事物は、飼い猫だけだった。

そういうえば、僕の飼つてた猫の名前は何と言つんだっけ。

また、思い出せない。

大切だつたはずなのに。自分の名前よりも。

大切だつたはずなのに。

「ツミー、ほんやりして、どうかしたの？」  
ササヤキさんが気遣わしげに僕を見ていた。

「具合が悪いなら、来なくても良いわよ？」

「あ、いいえ。心配いりません。……ちょっと、眠つても良いですか？」

「ええ、お休みなさい」

空にしたお椀を返し、出してもらひた座布団に頭を載せて僕は瞼を降ろす。

未知の世界での初めての眠りは、ありふれた浅いものだった。  
置みがやわらかかった。

### 1・3 「天戸の弔」（後書き）

書くのが追いつきません。なかなかはかどらない……。

ところで、ここで先に宣言しておきます。

『ツミはへたれではありません』

美少女ゲームのとかの男主人公ってへたれで何でこんな奴が……、  
て言うのがありますよね。私はああいうのが嫌いなので、ツミ君には  
はこれから頑張つてもらつつもりです。こう期待、です。

## 1・4 「初陣」

敵は九割方倒され、残存戦力は天戸の宅の北に集まっているらしい。ただし、敵の侵攻は、ササヤキさんが張つたという『流水の結界』に阻止されている。後は四人で（実戦力は三人だが）一網打尽にして終わりらしい。

家を出る前に、僕はササヤキさんから和服を一式もらつた。一張羅だと言つ。

「どうして、こんなものが？」

「なんとなく、日頃手が空いた時に服を作り溜めているのよ。誰のためというわけではなく、ね。ほら、大きさも良いでしょ。お呪いをかけてあるから、今のあなたの服よりも戦いの上で安全なのよ」

と言われるままに、なんと僕は下着まで一気に脱がされ、ふんどし、亀甲模様のシャツ、一番上に青い牡丹模様の描かれた着物を着せられた。

「どう？……動きづらいかしら？」

十七年間着てきた洋服と違い、和服はだぶだぶして、足はすうすうしている。しかし、

「いいえ。なんだか、うまく言葉にできませんけど、良じ感じです。身体になじみます」

この服を着ているとわかる、これが布を織るところからして人の手で作られたということが。それ故の不思議な安心感があり、僕はこれをくれたササヤキさんへの感謝で胸が一杯になった。

「ふん、良い仕立てじゃない」とアカ。

「ありがとう」

「勘違いするんじゃないわよ！ 私は、ササヤキの作った着物をほめているのよ！」

顔を真っ赤にしてアカが叫ぶ。その横では、キズオトが妙に楽しそうににやけていた。

件の『戦場』は天戸の宅から北へ三十分ほど歩いたところにあった。

そこは何の変哲もない平原。ただ一つ、幅の広い川が土手を作らずに不自然に流れていることを除いては。

時は宵の入り。月の昇りはじめた空。異形の者達が川を渡ろうと、手を前に伸ばしながら水をかき分けていた。

「あれが私の『流水の結界』。この『鹿屋の原』の神と、近くに流れている『ハ衢川』の神にお願いして、普段川じゃないところを川にしているの。この世界に属さない者達 この世界にとつて

邪と見なされる者は あれを渡ることができないの」

以上、ササヤキさんの説明だった。僕にはちょっとわかりづらっこころうがあつたが、逐一質問しようとはしなかつた。

ばさり、と横でキズオトが唐草模様の袴を脱いだ。その下に、燕の描かれた着物を身に着けていた。

キズオトは一人僕たちの前を歩き出す。その後にアカが続き、僕は彼女らに駆け寄ろうとするとササヤキさんに服の裾を掴まれてそれを止められた。

「二人に任せないさい。あつという間に片付けてくれるから」キズオトとアカが敵軍の三十メートル手前で立ち止まつた。僕らはそれより更に二十メートル離れている。

風が背後から吹いてきた。暖かくも、涼しくもない風。

キズオトの蜂蜜色の長い髪がふわふわと風に舞い始めた。

川の上に、赤い華が咲いた。

断続的に微かな切斷音が聞こえ、その度に化け物の身体から血しぶきが上がっていく。

風がだんだん強くなる。それに比例して、化け物が死んでいく間隔が短くなる。

死んだ化け物　　人間の姿に戻った者達　　は、屍も生き血も、すべて川に流されていく。

「な、何が起きているんですか？」

ふきすさむ風の中、少しずつ前進をはじめたササヤキさんに問う。「風の刃よ。キズオトは、風を操り、知覚できる範囲すべての敵と同時に戦うことができるの」

知覚できる範囲。それがどの程度広いのかはわからないが、見ている限り半径五十メートルはある。

「キズオトは私達三人の中で一番強いの。だから、私達は彼女のことを『風神楽の巫女』と呼んでいるのよ」

やがて、渡河していた敵が一掃された。血も屍も、すべて水に流れていった。

終わったのかとササヤキさんに問おうと彼女の横顔を見上げた。彼女は、口を動かし何かを呴いていた。目線は前方、川面にあるのか。まるで川に囁きかけているようだった。

そして、川の流れが途絶えた。

どうしたことが尋ねようと思つたが、アカとキズオトが前進をはじめたので、何も言わずササヤキさんと共に彼らの後を追うことにする。

新たな敵が姿を現した。脇の下から翼を生やし、逆さに飛ぶ人型だつた。それは五人いた。

豪<sup>ひい</sup>と風が吹きキズオトの髪が翻る。

五体の化け物がそれぞれ何かを避ける動作を見せた。キズオトの風の刃が飛んだのだろうか。

化け物たちがキズオトに襲いかかる。その間にアカが割り込んだ。

「ひえんしよう  
緋燕翔！」

彼女がぱっと右腕を振り上げると、それに答えるように足下から天に向かつて火花が吹き上がる。

化け物たちはそれを避けて彼女たちに近づこうとする。だが、数え切れない火の粉は避けきれるものではなく、化け物の身体の上でくすぶりはじめる。

化け物が更に彼女らに接近する。引きつけているのか？ 彼女らに焦る様子はない。

「風の龍。あたしと共に！」

キズオトの澄んだ高い声が響き渡った。

彼女らを包んでつむじ風が立ち上る。

風に煽られて化け物たちは後退を止む無しとされる。だが、その彼らをさらなる攻めの一手が襲う。

火だ。化け物たちの身体の上でくすぶつていた火種が、キズオトの風を受けて急速に勢いを増しはじめる。彼女の呼んだ風は乾燥した暖かい風だつた。

間もなくして、けたたましい断末魔と共に化け物の一人が逆さま落ちていった。

何とか火を払おうと、盲鳥<sup>めぐらがひす</sup>のように無茶苦茶に飛び回る化け物たち。二人目が火だるまになつて流星の如く草原に落ちた時、一人が僕の方へ飛んできた。

「う、うわ、こっちに来ますよ」

「大丈夫。

少し、私の活躍させてもらおうかしら」

余裕の微笑みを浮かべたササヤキさんが一步踏み出す。頭上の化け物に目を据え、また、囁くように口を動かしはじめた。

僕らを狙う化け物の周りにキラキラと光る粒が現れ始めた。にこりとササヤキさんが嗤つた時、幾つもあつた光の粒が水の槍となつて、化け物の身体をあらゆる方向から貫いた。

「ね、どうだつたかしら？」

こちらを向いた彼女の背後で、ずしゃりと音を立て、三人目の化け物が落ちた。

気が付けば、身体に火を付けられ人魂のように飛び回っていた化け物たちはすべて空から落ちていた。

夜は更け、星が輝きはじめていた。月は戦いの始まつた刻より少し高くなつていた。

「終わつたんですか……？」

僕はササヤキさんに尋ねた。しかし、彼女はわからないといった面持ちで首を振つただけだった。

「まだだよ」

乳色の長い髪を乱したままのキズオトが隣に立つていた。

「くるよ……」

僕の後ろで何か弾けた。

なんだ……？

振り返ろうとした時、アカからの一喝が飛んだ。

「ふせなさい！ あんたじや何もできないでしょ！」

肩にササヤキさんの手がかけられ、僕は引き倒されるようになじゅ

がみ込んだ。

その時僕は見た、背に大きな鳥の羽を生やした、天狗を。

「鎌鼬かまいたち！ 絆により、あたしの元に来て刃となりなさい」

風が唸る。

僕とササヤキさんはただ頭を低くして身を守るしかない。

アカは両手に火を灯し空を飛ぶ敵を待ち受けていた。

「一の飯綱いすな、行け！」

頑がんと夜空の中弾ける音がする。

天狗は杖を持っていた。生半可な攻撃は防がれてしまうようだ。

「斬ざんれ、二の飯綱いすな！」

斬ざんという音と共に悲鳴が上がる。だが俊敏に飛び回る天狗の動きは止まらない。

少しずつ、旋回しながらキズオトに近づく。

「討うて、終ついの飯綱！」

鏑矢のような高い音が夜を切り裂く。

放たれる光る風。

天狗はそれをかわした。

反撃の一刃が幼い少女を襲う！

「 キズオトお！」

「ツミ、伏せてて！」

「火雷撃！」

アカの放った炎の稻妻にひるんでせいで、天狗の斬撃は浅く留まる。

天狗は上空に退避する。

ササヤキさんが膝を折って座り込んだキズオトに駆け寄る。僕もその後を追つた。

ササヤキさんの肩越しに覗き込んだキズオトは、左肩から着物を赤く染めていた。田を開じて、浅い呼吸をしている。

「ササヤキさん、キズオトはどうなんですか？」

彼女は冷静な声で答える。

「すぐ手当てすれば問題ないわ。それは私に任せて。でも、これ以上キズオトを戦わせるのは無理。私も退かないと行けないの。アカ、どうしたらいいかしら？」

アカは僕らの頭上に炎を舞わせ、上空からの攻撃を牽制している。自分の炎から田を反らす、感情のこもらない声でササヤキさんの問いに答える。

「帰りなさいよ。後は任せと頂戴」

「ツミ、アカをお願いしても良いかしり」

ササヤキさんの田にこもるのは、憂い。僕は幾ばくかの恐怖を抱えながらも、できるだけ彼女を安心させられるように自信いっぽいを装つて答えた。

「任せて下さい。できる限りのことをしますから、ササヤキさんはキズオトを治してやつて下さい」

弱々しく微笑む彼女。

首を落として何とか囁くと、彼女の姿はキズオト」と水に包まれた。

そして、水の塊が崩れた後には誰の姿もなかつた。

「水遁よ。水に隠れて遁げる術よ」

そう説明してくれたアカの横顔は、心なしか怖れの色をおびていた。

## 1・4 「初陣」（後書き）

なんだか、だんだん文が雑になつてきていろいろな気がします。

今回はちょっと、使つたネタについて解説します。

まず「流水の結界」。流れる水が魔物を祓うというのはガース・ニクスの『古王国記シリーズ』からアイディアをもらいました。このファンタジー小説は、私の中ではトップクラスの面白でした。

「脇の下から翼」は中国の古い物語でたまに出でてくる超人の形です。『封神演義』の雷震子もこんな感じでした。

## 1・5 「炎の田覚め」

火炎の繭の中で、僕はアカの謝辞を聞いた。

「わるかつたわね、つきあわせてしまつて。ササヤキに早く帰つてもらうためには、私が大人しく話を聞くしかなかつたから……」

彼女の言わんとするところがわからない。僕がその真意を尋ねると、今まで強気な顔しか見せなかつた彼女からは予想だにできない、自分の耳を疑いたくなるような告白を彼女はした。

「私は、本当はあまり強くない。キズオトに比べれば、私は彼女の足元にも及ばない。私では、あいつを倒せないわ」

「嘘」

「本当よ。残念なことにな。ただ一つ方法があるとすれば、この身を焚き代にして、あいつと差し違えることね。……だから、逃げなさい」

僕を見た珊瑚色の双眸は、弱気な光しか宿していない。

何故、僕は問う。

「どうしてそんなに弱気なの？ らしくない。もつと自分の力を信じなよ。アカにだつて、キズオトくらいの力、あるはずだよ」

「 それが怖いのよ！」 突然、彼女が叫んだ。

僕らを包む炎の繭が揺らめいた。その隙間から、天狗が諦めるごとなく僕らを攻撃しようとしているのが見えた。

「私には炎を自在に操る自信がないの。もし、私がキズオトくらいの戦果をだそうすれば、何もかもまとめて焼き尽くしてしまいますで……、それが怖いのよ

だいたい、と彼女は口を腫いの形に歪めて言つ。

「あんた、半日の内にすっかり頭がいかれたんじゃないの？ キズオトがあんなに殺しまくつているのを見て、あんたは何も思わな

かつたの？ 私はいやよ、キズオトみたいな殺人機械に 火炎放射器に成り下がるのはごめんよ！」

うせなさいよ。

僕の三方に炎の壁が立ち上る。開いている一方は、すなわちアカから遠ざかる方向。

何も、僕にはできないのか。僕にも、彼女らみたいな力はないのか！

炎を避け、描けだした夜の原野。そこに 。

月。

\*

少年が走り去つてから五分が経つた。天狗は未だにアカを攻撃できぬでいた。

理由は簡単。赫い髪の女性を囮のように、炎の柱が高くそびえ立つてゐるからだ。

アカは炎の柱の間で、恐怖と戦うよつに唇を噛みしめていた。寒くはない、むしろ暑いくらいの炎の狭間で、彼女はひたすら身を震わせていた。

突如、炎の柱が消えた。

アカは驚愕した。身体を振るわせていたことも忘れ、空を仰ぎ見る彼女。

天狗もまた吃驚した。だが、すぐさま自制を取り戻し、アカへ襲いかかる。

しかし、彼の翼を貫くものがあった。  
光の矢。夜空に溶け入る黒い翼を、真っ白な光り輝く矢が射抜いていた。

天狗が絶叫した。

ようやく我に返ることのできたアカは、天狗には目をやらず、矢の飛んできた方向に目をみやる。

そこに立つのは、月光を背にする一人の少年。

ツミ。

そう、僕だ。

僕ではない、僕。<sup>うつ</sup>現から来た無知で無力な少年ではない、新しい僕。

ツミは力に目覚めた。それは月光を自在に操り形となす力。例えれば左手に持つ弓<sup>ゆんで</sup>のように。右手を構えれば現れる矢<sup>めて</sup>のように。

満月のように弓弦を引き絞る。狙うは天狗の無傷な方の翼。必死に狙いをかわそうとする浅はかな鳥に、ツミは矢を放つ。  
月光の矢はあやまたず天狗の羽を射抜いた。

断末魔のような痛々しい叫びを上げながら、天狗は地に落ちた。

「ツミ……、あんたその髪……」

啞然と僕を見つめるアカ。

彼女の言う通り、僕の髪の色は元の黒から月白に色をえていた。  
力に目覚めたからだ。

ツミはゆっくりとした歩調でアカに近寄つていぐ。

そして彼女の唇に自分の唇を重ねた。

唇を奪われたことに田をむく彼女。だが、その間にも、ツミの舌はアカの滑らかな前歯をすり抜け、彼女の舌を絡め取つていぐ。

「何するのよ！」

アカは僕を突き飛ばし、校内の液体を吐き捨てる。草むらに落ちは、彼女の唾液。そして僕の唾液。

「君を助けてあげる。君の恐怖を消してあげる」

静かな声で、ツミが言つ。アカの甘い唾液の残る口で。

「悦楽を。快樂を。君の心を酔わせ、君の恐怖を消し、封じられた炎を解き放つてあげる」

はつと息を呑み、身を強ばらせる彼女。だが、やがて彼女はおずおずと尋ねる。

「本当に、炎を使えるようにしてくれれるの？　本当に、私を……解放してくれるの？」

「解放しよ。ランプを割るように。君の心のガラスを打ち毀し、その中に閉じこめられた火を、炎へ！」

そして間を置かず口づけ。今度は拒絕はされないが、彼女の瞳にはいまだ戸惑いと怖れが残る。

「怖いの？」

ツミが囁くようにたずねる。アカはびくりと肩を震わす。

大丈夫、ツミはアカの言葉を待たずに話しかける。

「僕はここにいるよ。君を傷つけるものすべてからまもつてあげる。君が壊れそうなら抱きしめていてあげる。だから、もう何もこわがらないで」

のぞきこんだアカの瞳に宿るのは、僕の顔、そして月。

月光に煌めいた彼女の目からとまどいが消えた。

「ん……、ツミ…………」

二人はむさぼり合うように接吻する。繋がった口内で舌が絡まり合い、唾液が混じり合う。

握り合う両手。その一方をツミがそっとほどく。そして、その手はゆるやかに彼女の下腹部へと降りていく。狩衣の前垂れをめぐり、赤い着物の裾をぐぐり、長襦袢の上から彼女の恥部に触れる。襦袢の下は汗にしめつていた。

触られたことを感じてか、彼女が口づけをしたまま呻く。

天狗が彼女の背後から忍び寄っていた。翼を使えなくなつた天狗は、忍び足でこちらに寄つてくる。

ツミが空いているもう片方の手を天狗にかざす。手のひらから衝撃が放たれる。

天狗は両足を折られた。だが、命を落とすことはなかつた。

ツミは故意に天狗の命を奪わなかつたのだ。冷静な瞳のまま、アカとの口づけを続ける。

しばらくして、ツミの方から唇を放した。一人の唾つばきが口と口の間に糸のように引かれて月光に煌めいた。

「さあ、君の秘めた激情を見せて。赫然と燃える、君の真実の炎を僕に見せて」

火照りはじめている彼女の耳に囁く。

「大丈夫。君の炎は僕らをまもるための炎。愛するものを暖め、敵を灰燼とかす守護の炎。決して僕らを傷つけることはない。だから、さあ！」

そう言つや、ツミは赫の恥部に当てていた指を一息に中へと突き入れた。

あ、とアカのからだが反応する。半開きになつた唇から、一つの

言葉が引き出されるように紡がれた。

「紅帝炎舞！」

真紅の火炎が僕らを中心立ち上る。巨大な蓮花のように燃え上がりた紅炎は太陽の如く光を放つ。

眩い光と灼熱の中で、天狗は自分の身体が末端から溶けていくのを感じていた。熱せられたバターのように身体が崩れていく。それは痛みも恐怖も伴わない、緩やかな死だつた。  
そして、彼の消滅と共に、一つの夢が覚めた。

天狗を倒した後、僕らはまっすぐ家に帰った。

家ではササヤキさんが、ご飯を作りお風呂も沸かして待っていた。だが、疲れていたので、申し訳ないことにそれを辞退し、軽く食事を口にしてから眠りたいと彼女に伝えた。

案内された部屋は四畳半の畳み部屋。真ん中に布団だけが敷かれた他には何もなく、塵一つすらない殺風景な部屋だった。障子越しに月光が差し込んでいた。

僕の力の源。

やわらかい布団に頭から潜り込み、僕は目を閉じた。  
静かな夜。聞こえるのは、草木が夜風にささめく音。それと、僕の鼓動。

今日は色々な事があつたな。

身体は疲れていて、石のように重く感じられる。  
けれど、頭と心は言いつよいのない高まりを覚え続けていた。

眠れない。

高ぶり続ける精神を鎮めるために、僕は縁側からそつと夜の散歩に出た。

家を東に、沈み行く月を背にして歩く。

控えめな月光の下、星達は空を埋めつくして輝いている。これまで、街の中によどんだ夜空を見続けた僕にとって、この空は眩しいほどだった。

川に行き着いた。水辺には水芭蕉<sup>セレスタイト</sup>が真珠のように月光に照らされている。川面もまた、天青石のように燐めている。

水音が聞こえる。

下流に少し歩くと、そこに赫い髪を背中に垂らした裸身の女性がいた。

アカだ。

腰までを水にひたし、彼女は丹念に身体を洗つてゐる。水に濡れた肌が、蒼く清廉な輝きを放つてゐる。

僕はその姿の美しさに一瞬の間意識を奪われた。そして、我に返ると、すぐにその場を立ち去ろうと思つた。

だが、踵を返したその時、僕は下半身の硬直と共に一つの感情を覚えた。

欲しい。

無言のまま彼女の方へと近よる。

がさりと踏んだ草が音を立てた。アカがこちらを向く。

彼女はこちらに背を向け身を隠そうとする。しかし、無駄だ。十分な近さまで距離を詰めていた僕は、一足飛びに彼女に肉薄しその手首を取つた。

「 放しなさいよ。」

ややうわざつた彼女の声が水面を打つ。

彼女は明らかに僕を拒んでいた。だから、僕は『力』を使うことにした。

月光を操る力。光を物質化するという面とは異なる、違う一面。『魅了』。夜空に浮かぶ月が人目を惹かずには入られないように、僕もまた人の心を惹きつけることができる。

彼女の心の殻をイメージし、頭の中でそれを剥がす。そして、彼女の中にもある僕が持つ欲望と同じ物、肉欲を呼び起こす。

「やめて　彼女がか細く言つた。

「あんたの力はわかつたから。これ以上私をかき回さないで。私を、ほつておいて」

それが彼女の精一杯の抵抗。

素直じゃないなあ。

このまま魅了の力だけで彼女をものにするのも良いけれど、僕はそれよりある一つの言葉を使うことにした。

「アカ、約束だよ」

びくりと彼女が震える。そらしていた目を僕に向ける。

「ねえ、どうして？ あれは夢ゆめだったのよ。私は誰にも聞かせてない。あんたにも聞かせてない。なのに、どうして……」

熱っぽく訴える彼女は一層僕の欲望を高める。

だが、僕は極力泰然を装つて彼女に囁きかける。

「そう、君は誰にも言えなかつた。でも、君は確かに誰かを求めていたんだよ」

手首を握るのを止め、細い腰に手を回した。

「アカ、僕は君を助けてあげたよね。だから、次は君の番。僕のお願いを聞いてくれるかな……？」

抗うことを見つめた彼女の背中を撫でていく。くびれた腰の上あたりを触った時、う、と彼女が呻いた。

「ここ、どうかしたの？」

「……さっきの炎で、火傷つぼくなつたの」

そうか、それでお風呂に入らず水浴びをしていたのか。僕はその部分を更に撫でた。その度に、彼女は反応した。

アカが僕の名を呼んだ。

「……優しくして。……私、処女じゃないけど、男の人としたこと……あまり、ないから……」

男の人と。では、女人とはあるのか？

確かめてみたかったが、とりあえずそれは放置し、  
僕は彼女の眞紅の唇に自分の唇を重ねた。

月が沈むまで僕らは交わり続けた。

## 1・5 「炎の皿覚」（後書き）

「一つに分けようかな、と思つたのですが、結局まとめて出しました。

炎使いといつと『ファイアスター』のシャーリーンを思い出します。あれを読んでいた時はかなりシャーリーンに萌えました。「チャーリー」という呼び方はあまり好きじゃないです。

とりあえず第一幕が終わり、間幕 第二幕に移りたいと思います。しかしテストが前にあるので少しスペースが落ちると予想されます。見守って下さい。

そう言えば、このレイアウトって見づらいですか？ 感想お待ちしております。

## 闇幕 「猫人」

ボクは猫。

名前はまだない わけではない。

ボクの名前はチヨ。

今はもう猫じゃない。

ボクにはご主人様がいた。

迷子の子猫だったボクを拾つて、四年間ずっと一緒にいてくれた  
ご主人様。

月の夜に、琥珀色の瞳に哀しみを湛えていたご主人様。  
今はもうボクの傍にはいない。

闇の中に、ご主人様は歩いていつてしまつた。

いつも、ご主人様が夜の散歩に出る時、ご主人様はこことを空ろ  
にして世界のこともボクのことも忘れてしまつたみたいに歩く。だ  
からこそ、ボクはご主人様の側を離れないようにしていた。本当に  
ご主人様がどこかに行つてしまわないように。ボクはいつもここに  
いるよ、て心で話しかけながら。

でも、実際その時が来ると、ボクは何もできなかつた。

ボクは何もできなかつた。

絶望したボクの視界を闇の帳じはくが覆つた。  
そして、ボクは意識を失つた。

\*  
目が覚めた時、ボクは身体は人間のものになつてしまつていた。  
ご主人様みたいな「人間」の身体。でも、頭の上には猫の耳があり、お尻にしつぽがある。背骨の上にだけ毛皮が残つていた。  
けど、それ以外には毛がない。人間の着るような服もなく、無毛の肌を風に当てているのは寒かつた。

座つていてもしようがないので、ボクは新しい一本の足で立ち上がり、歩き出すことにした。肉球のない足で土を踏んだ。  
小さくなつた鼻は余り使えない。それでも、微かな人のにおいをかぎつけそちらに向かつた。

変な感じ。

人間の身体は心にはなじまないけど、とりあえず動かすことはできる。

そこで、ボクは大変なことに気が付いた。「ご主人様の名前が思い出せないのだ。

どうして？ どうして！？

大切だつたはずなのに。自分の名前よりも。

大切だつたはずなのに。

悩みながらも歩いていたら、ぼろぼろの家を見付けた。家を全方向から見ると、本当にあちこちが壊れていて、薺薺きの屋根はちょっと言葉にしがたいひどさだった。

なんとか、戸がその形を保っている。ボクは、ぎしぎしと鳴る口を思い切り開いた。

薄闇の向こうに誰か立っている。

闇にうかびあがる鮮やかな赤い袴と白い小袖。余り背は高くない。髪も白かった。

「あなたの名前を教えて下さい」その人の声は笛の音みたいに高く綺麗だった。

「ボクの名前は チヨ」

「ようこそ、チヨさん。あなたをお待ちしておりました。ここは『あまとのやな天戸の窓』、私達の家、そしてあなたの『ご主人様』が住んでいた家」

そしてボクも物語に加わる。

## 間幕 「猫人」（後書き）

幕間劇です。まあ、伏線ですね。

先はまだ長そうです。どんどん書かないとなつて感じです。

チヨの一人称をどうしようか悩みました。あんまり女の子が「僕」と名乗るのは好きじゃありません。「俺」とかも嫌です。小説くらい、女の子は女の子らしく話してほしいものです。  
て、この文じやチヨが女の子かわかりませんね。

では第二幕でお会いしましょう。来週末くらいには掲載します。

## 2・1 「隠れていた巫女

僕が『天戸の宅』に来てから十四回太陽が昇った。月は欠けて朔を迎える、いまは三日円を通り越し上弦の手前にある。

季節は夏。日を追うごとに少しずつ暑さを増していく。

僕は一週間の時間を、三人の女性が嘗む自給自足の生活を学びいざそれの一環を担えるようになるために費やした。

ある日はアカと畑に行き農作業。

ある日はキズオトと北東の森へ行き狩の練習。

ある日はササヤキさんと家に残つて家事を教わった。

この世界は狭いらしいが、動植物はいる。僕らはそれを取つて日々の糧とする。（キズオトが言つには、彼らにとって『夢』は一続きの世界らしい。）

しかし、人間はいない。もし、家の外で人のような物にあつたらそれは敵である。だから僕らは自活する必要があるのだ。

そして、自活以上に『自衛』の技術も学ばなければならない。要するに人殺しの技術、それと心得だ。

僕はこれまでに一人殺めた。

殺したことは、怖くも悲しくもなかつた。理由は良くわからない。しかし、推察するに、僕は生きるために彼らを殺したのだから、こわがつても悲しんでも仕方ない、だから何も感じないのである。そう思つ。

何はどうあれ、当面の間は覚えなければならぬことが山積している。

気が付いたら一年くらいはすぐ経っているかも知れない。

\*

今日はササヤキさんと家事練習だ。

家事の練習は朝食をつくるからはじまる。後の一人より早く、僕は日の出ちょうどに起こされる。

竈の火にはアカの火が使われている。そのためどんな天候でも消えることなく熾火の状態を保っているが、使えるように火勢を強くするには手間がかかる。生みの親の影響だらうか？ 心から丁寧に薪をくべ、想いを込めて竹筒で吹いてもいつかな強く燃えようとはしない。

ササヤキさんはまくやるらしい。

さすがの長姉役だ。

こうして竈をのぞきこんで小さな火のこ機嫌を取つてると、アカが起きてくる。

朝焼けの中、赫い髪を炎のように染めた彼女は、さも満足そうにこちらを見下ろしてくる。ざまあみろ、そんな感じで。

やれやれ。

因みにここで言つておくと、初めてここに来た日の夜以来彼女と肌を合わせることはなかつた。特に僕から彼女を求めなかつたからだが、彼女の方も僕のことを固く警戒していて、とてもじゃないが下手なことは言える雰囲気でもなかつた。

しかし、そんな彼女も僕のことを全く嫌つてゐるわけではないと思う。あくまでも主觀的な見解だが。僕がササヤキさんやキズオトと行動していると背後から憎氣めいたものを感じるし、そんな日の夕餉ではいつもよりまして機嫌が悪くなる。あくまでも主觀的な見解だが、繰り返すけど。

まあ、ゆづくつ仲良くなればいい。

僕はアカのことが好きだ。

「じゃあ、ツミ。いつてきまーす」

「ああ、いつてらっしゃい、キズオト

キズオトが元気よく戸口から駆け出て行く。今日も彼女は身体よ  
りずっと大きい唐草模様の袴を着ている。髪も長く、あれで身動き  
は軽やかなのだから、不思議。

次いでのそのそとアカが出て行く。彼女は金糸で刺繡のされた朱  
い狩衣を着ている。

「アカ、いつてらっしゃい」

フンと鼻を鳴らして出て行く彼女。あの姿に、可愛らしさを見い  
だしてしまった僕はおかしいだろうか。

それはそうと、一人を見送った後は台所のササヤキさんの元に赴  
き、本日の指示を仰いだ。

「ちよつと待つてね」と彼女。いつも、こつしてみていると思う  
けれど、彼女は本当に良くできた女性だ。かいがいしく働く彼女の  
立ち姿は堂に入ったもので、僕は思わずうつとりと見とれてしまう。  
やがて、彼女から桶<sup>バケツ</sup>・雑巾・ろぼうき・ちり取り、掃除四点セッ  
トを受け取った。今日のはじめの任務は掃除らしい。

「何処をやりますか?」僕は尋ねた。

すると彼女は奇妙な答えをする。

「あ、あのね、ツミ。私はこれから部屋でアカの服のお裁縫をし  
なくちゃ行けないの。それでね、あなたにはその間、この家で一番  
気になること炉をそうして欲しいの」

先日の戦いの後、アカは服を一着焦がして駄目にしていた。確かに  
に新しい物が必要だろう。

しかし……。

「気になるところ? 何ですか、それは」

「えっと、例えば、あなたがこの家でまだ入ったことのない場所  
とか」

「はあ？」

「じゃ、じゃあ、私はこれで」

奇妙な微笑みを顔に貼り付けたまま、ササヤキさんは逃げるよう  
に部屋へ入つて行つてしまつた。

訳がわからない。彼女は僕に何をさせたいのだ？

『天戸の宅』と名の付けられたこの家には様々な人智を越えた物  
が入り込んでいるから、迂闊に歩き回るな。僕はこの家に来て二日  
目にそう言われた。

だが、このまま立ちつくしていても仕方ない。

僕はとりあえず、居間から北西にある物置部屋に行くことにした。

とりあえず来た物置部屋は、お札の張られた小箱、注連縄の巻か  
れた壺、人型の木の板が付いた着物だの、妖氣むんむんの物がそち  
こちに陳列されていた。

触らない方がいい、よね。

それは僕の身につけた月の力が教えるのか、それともただ単に一  
般人としての常識が拒絶するのかは判らないが、とにかく僕はわざ  
かに埃を採集してすぐにそこから出た。

しかし、どうしたものやら。

物置部屋を出て正面にも襖障子がある。この障子の前で、僕の脳  
裏で声が告げる。

この奥には目の見えない蛭子がいるのよ。

アカが言ったのだ。半信半疑だつたけど、明けられたところを見  
たことのない戸を開くのはとても不気味なものだ。何も悪い予感は  
ないのだが。

もうう。

だいたい、ササヤキさんのあの言動は何だったんだ。あれでは、  
僕にここに入れと言つているようにしか取れないだろう。

えい、ままよ。

思い切つて襖障子を横に引く。その軽い手応えは、いつも誰かが開け閉めしていないと存在しえない物だつた。

襖障子の向こうには、また襖障子があつた。その間の空間は、床・壁・天井・すべて漆塗りにされた異様な空間だつた。

しかしここまで来ては、もう退くことはできない。いや、できるけどね。

もう一枚の襖障子を開いた。

障子を開いた先の部屋は、昼間だというのに太陽の光が無く、灯火の明かりだけがあつた。

部屋にいたのは蛭子はいなかつた。床に横座りになつて、緋袴に白衣、巫女装束の少女だつた。

「よつやく、お会いできましたね。ツミさん

彼女は構える様子無く、自然に僕に話しかけてきた。

「僕を知つているの？」

「ええ、一ヶ月ほど前から」

謎めいた発言。神秘的な微笑を浮かべる彼女。天色の双眸が僕を見上げている。注意深くその目をのぞきこむと、彼女の目はどこか虚ろであるで僕に焦点が合つていないようで妙だつた。

「ツミ殿。お座り下さい」

部屋の奥から声がかかつた。部屋の隅、灯火の影に隠れるよつこ、黒い割烹着を身につけた女性が立つていた。

黒い割烹着の女性と巫女装束の少女、並べてみると、とても対照的だつた。髪の色は黒と白。声は低と高。

少女に示された座布団に正座する。「楽にしてくださいませ」と言わされたので胡座を組んだ。

「まずは自己紹介を致しましょう。私の名前はサキ。光を操り、未来を覗く『先視』の能力を持っています。そして彼女は」

「私の名はネガイ。サキ様ともども、どうかお見知りおきくださいませ」

「彼女は闇の加護を得ていますの。あまり人には見せませんけど」  
サキにネガイ。奇妙な名前にも少しなれてきたようだ。  
僕は早速彼女にあれこれ聞いてみることにする。

「サキ。どうして君たちは今まで僕に会ってくれなかつたの?  
こんな隠れん坊みたいな事をして。そして、何故今になつてササヤ  
キさんに妙なことを言わせて僕をここに来させたの?」

「こじりと彼女は微笑する。その視線は、やはり僕の目に合わせら  
れているようで、合つていない。

「ちょっととしたいたずら心、と申しては怒つてしまわれますか?」

「い……いや、別に……」

「ツミさんは優しい方ですね」

容姿は少女のそれだったが、彼女は僕よりずっと年上なのかも知  
れない。大人びた彼女の雰囲気、媚態に、僕は調子を狂わされはじ  
めていた。

「ツミさん。それよりも、もつとお互い基本的なことからお話し  
しませんこと?」

「き、基本的なこと?」

「そう。例えば スリーサイズとか

ええ、と僕は思わず頓狂な声を出してしまつ。すると彼女は鈴が  
転がるように愛らしく笑つた。

「かわいらしいお方ですわ、ツミさんは。とても若い男性らしい、  
きつとあなたは澄んだ目をされているのでしょうかね」

田、と聞いて、僕は『基本的な質問』を一つ思ついた。

何も言わず、唐突に彼女の眼球を突くぐらじ近くに人差し指を突きつける。

「君は田が見えていないのかい？」

「ええ。この田はうすぼんやりした明暗しか捕らえられませんの」そう言つて、彼女は突きだした僕の手を握つた。

「でも、周りの風の動きや気配でだいたいわかるものですよ。あなたが私にこうして手を伸ばしたこと。あなたが膝から手を放した瞬間からわかつていましたの」

白くやわらかな彼女の手は、僕の手を綿のよつこことおしげに包み込んだ。

手先から伝わる心地よさに動搖しながら質問する「サ、サキの歳を聞いても良いかな？」

ふふ、と彼女は笑う。

「だいたい八十五くらいです」

「八十五　？」からかわれているのか？

しかし、彼女を見ている限りそう言つわけでもなさそうだ。わざとらしく表情を改めたりもしない、微笑のまま話し続ける。

「ツミさん、一つ教えて差し上げます。この夢(おとぎのゆめ)の中で、人は歳をとりませんの。この家に住む人は皆、外からやつてきた歳のまま時を経ています」

「外から来た？ もしかして、キズオトみたいな小さい子も？」

「ええ、そのとおりですわ。キズオトちゃんは、数えて六十くらいでしょうか？」

「あんな子供が六十歳。どうなつているんだ、ijiは。」

「一番若いのは、ついこの間来たツミさんが十六くらいだとして、次に来るのはアカ、彼女は一十七歳ですね」

へえ、アカが一番目なんだな。

そこで僕は少し思考に引きずられ、意識を奪われた。すると、その虚を突くようにサキが握り続けていた僕の手を引き、僕は前めりの姿勢になる。

目の前に、サキの唇があつた。

口内に下を入れる深い接吻。それも性的な欲望を顯わにした、むさぼるような口づけだった。

「何を！」

「『機嫌を損ねてしましましたか？』

全く悪びれる様子がなかつた。それどころか、ずいと身を寄せ、白い小袖をはだけはじめた。

「七十六・五十六・七十九です。ツミミセミ」

「え？」混乱して彼女の言つていることをとつとつに判断できない。

「わたくし私ここに来る前の記憶がないのです。ここでは女性しか居ませんから、男の方を見るのは初めてなんです。ですから、あなたに凄く興味がありますの。あなたは違うのですか？ 私のこと、嫌いですか？」

「ちょ、ちょっと待つて！」

後ずさつて襖障子の近くまで来る。背中が付くと予想し身構えるが、バンと襖は何者かに開かれ、僕はバランスを崩して後ろ向きに転んだ。

仰向けになり上方を見上げる視界には、アカの姿があつた。

彼女は全身に怒りの炎を纏わせていた。

これはまだ比喩の段階であつたけど。

僕は人生の末期を覚悟した。

## 2・1 「隠れていた巫女」（後書き）

予定より早く投稿できました。ちゃんと勉強もしますよ。

間幕に引き続き、サキの登場です。第一幕はサキとネガイが主題になっています。なかなかサキの神秘さをアピールするのが難しいです。

『蛭子』は本当は位の高い神様です。ちょっとした妖怪扱いしていますが。

## 2・2 「愛欲と依頼」

その夜、囲炉裏を囲んで僕はサキとネガイさんに関する詳しい説明をしてもらつた。その話はただ単に彼女らの役割だけに留まらず、僕がここに来る前の彼女らの歴史にも及ぶものだつた。

かいづまんで述べる。

まず一つ、サキは先視の能力を使い、敵の襲来の時期と位置を予見することを専らとしていること。彼女は決して前線には立たない。ネガイさんはそんなサキのそばに始終いるので、彼女もまた表だって敵を迎撃することはない。

二つ、彼女らは独自の制約に則り滅多に部屋から出てこない。食事はササヤキさんが作つて部屋に運ぶ。衣類の洗濯は彼女らの居住域にある専用の洗い場でやる。身体は真夜中に裏口から川に出て行って淨める。廁も専用のを持つているらしい。

この仕組みはキズオトの後に来たササヤキさんが決めさせられたらしい。この仕組みのために、あまとのやね天戸の宅の中には二つの居住域が存在することになった。

「要するに引きこもりよ！」

アカは大層このことが気にくわぬようだつた。ササヤキさんが話をしている間、珊瑚色の双眸からはパチパチと火花が飛び散り続けていた。

でも、僕もアカに賛成だ。

これでは、何故同じ家に住んでいるのかわからない。  
そう皆の前で発言すると、各々の返答が得られた。

「そうよねえ。昔は私もそう言って気がするわ。でもね、これが彼女たちのお願いだつたから……。私は何も言わることにしたの」「サキは、先視の能力は纖細だから、それにお日様の光が苦手だ

から、て言つてた。　あたしは、仕方ないと思つた。サキの先視  
は本当に正確だし、狂つたらあたし達この世界を守れないもん」

「　アカは？」

妥協の旨を各自の言葉で言つた一人に対し、アカは眉間に深くし  
わを寄せたまま何も言わない。

そこで、彼女に先んじて僕は自分の意見を言つことにした。

「僕は今の状況に納得できない。サキとネガイさんも、みんなと  
行動を共にするべきだよ。部屋にこもらせてないで。　そう、君も  
思うんだよね？」アカ

同意という形で彼女の言葉を促す。だが、アカはこれを鼻先で笑  
い飛ばした。

「私は別に何も思わない。あんな土竜娘、出てこなくてむしろせ  
いせいよ」

それに、と追い打ち「そもそも、私があんたと同じ事を思つわけ  
無いじゃない。　ツリ、あんたは、同じ家に住んでいるからあの  
子が気になるんじゃなくて、あの子の色香に惚れたから一緒に生活  
したいんでしょ？」

「アカ、何を言つて　」「酷いこと言わないで、アカ！」

「天邪鬼」  
あまのじやく

アカの顔が見る間に朱に染まつていった。

そして彼女は無言のまま、足音だけ踏みならして床に就いてしまつた。

\* \*

次の日は何事もなく過ぎた。

今日は畠仕事の日だつた。いつも以上に言葉のないアカの後ろについて畠に行き、水をやり草を抜いて回つた。

眩しい太陽の下で思つ。

今、サキとネガイさんは何をしているのだろう。

その夜は上弦の半月だつた。

夜ごとに満ちていく月を見て思つ。月の満ちと共に、自分の中で何かが高まつていく、と。

力と、欲望。

思案に耽りながら部屋に入らうとしていると、誰かに横から呼びかけられた。

暗がりの中、背の高さからササヤキさんかなと思ひきや、それはネガイさんだつた。

闇の中に、低い彼女の声がしつとつと響く

「サキ様がお呼びです。どうかお越しくださいませ」

再び訪れたサキの部屋。昨日と違つといふが一つあつた。

窓が開いている。

小さな木の窓が開かれ、そこから半分の月が見えている。  
そして、サキがその月を見ている。

「よくお訪ねくださいましたね。ありがとうございます、シリヤ  
ン」

小鳥のような声が、可愛らしく科をつくつて感謝の意を告げる。  
僕は促されるままにサキの前の座布団に座る。  
何を言つべきか判じかねたので、黙したまま彼女の言葉を待つた。  
「昨日の続きをしませんか？」

至極何気ない口調だった。しかし、その中に含まれる意味は単純  
なものではない。

「いや、でも、僕がサキと、その……するのって……」

「私が先視の能を持つことは」 しどりもどりの僕の言を遮つて  
彼女は話す、「昨日お話ししましたね」

「う、うそ……」

「先視は、目の見える方が物を見るのとは違います。私は常に自  
然と未来を観てゐるわけではないのです。精神じいゆをある状態にするこ  
とで、はじめて未来を垣間見ることができるのです」

「ある状態　？」

この時、はじめて部屋に甘いにおいの香が焚かれていたことに気が  
付いた。蠱惑的なにおい。これが、麝香じしゅなのかな？  
下半身の男性の部分が疼きはじめるのを感じた。

「そう、恍惚。過度の快楽による、私。」 言つてゐる意味が  
わかりますね？」

わかる。凄くわかる。

でも、僕はそれを拒みたかった。多少の性欲はあるつと、僕は獸けだもの  
ではない。

しかし、窓の外の半月が、強引にでも僕の欲望をさらけださうと

していた。否応なく、僕に突きつけている。

服を脱ぎ、彼女は全身の肌を露わにした。灯火が消えたが、蒼い月光がサキの裸体を明らかに、なまめかしく照らし出していた。

「いつもはネガイが相手をしてくれますが、今夜はあなたがいます。<sup>わたくし</sup>私はあなたのカラダが欲しい。あなたはどうですの？」

「僕は」　「僕はまだ躊躇っていた。

「もしかして、アカに<sup>みゆき</sup>操を立てていらっしゃるのですか？」

そう言いながら、彼女の唇は既に僕の胸板の上にあつた。

アカは怒るだろうな。

彼女の誘惑と自分の肉欲に白旗を挙げ、僕はサキの望みのままにすることにした。

彼女を身体の上に乗せたまま、褲を解く。そこであることに気が付いた。

「ネガイさんが見ているね」

ふふ、と触れあつた身体を伝つ笑い声。

「あなたがお許しくださるのない、三人で楽しみましょう？」

「　お手柔らかにね」

月光はまだこの部屋にあつた。  
一時間ほど戯れていたはずなのに、狭い窓口から円の姿が消えな  
い。

「あなたをお招きするための、ちょっとした呪いですわ。光の流れを屈折させて、月の光が常にあの窓にはいるようにしているので

す

身を月明かりの下に横たえながらサキが答える。

上気して早く浮き沈みする彼女の胸。小振りで、山と言つよつは丘を思わせるそこに白っぽい物がこびりついてゐる。身体を休ませながら、時折その白い液体を指ですくつて口に運ぶ仕草は、いまだおさまりきらない肉欲を刺激する。

「これから、少し大切なことをお話しします」ふいに醒めた声でサキが言った。

「次の満月が昇る時、異なる夢への扉が開きます。場所は『<sup>まほろ</sup>よ  
り南、迦具土の莫<sup>まほろ</sup>』に入つてすぐの地点。シミさんには、ネガイ  
と一緒に扉を越えてもらいます

え、でもそんなことしたり……。

「問題ありません。シミさんには、すべての世界に不变に存在する  
月の化身。夢を越えても変質することはありません」

チキ、と背後で音がした。振り返ると、闇から浮かび上がるよう  
にネガイさんが立っていた。

彼女は僕の前に座り、これを、と一振りの打刀を取り出した。

「天乃常立<sup>あめのところ立ち</sup>と言います。これからはあなたの物です。けれど  
も、次の戦いの時まで抜かないでください」

手に取った刀はずしりと重い。異様な気配はないが、手にしてい  
ると何となくそこの見えない井戸<sup>いのど</sup>をのぞきこんでいるような気分が  
した。

強力な封印がかけられているんだ。

「シミさんは、戦つことはお好きですか?」

純粹な質問だった。僕を見る虚ろな瞳には、答えに対する希望も期待もない。

だから、思つままに答える。

「みんなをまもるために、戦うことを厭うことはない。でも、それは決して戦うことが好きだという事とは違う。誰も傷つかないのが一番だよ」

すると、彼女はちょっとだけ嫉妬したような表情を見せた。

「あなたはアカと同じことを仰いますよね。でも、今夜は私と一緒にいてくださいまし」

そして、彼女は頬が触れあうほどに顔を寄せてくる。

「あなたは、性交することはお好きですか？」

「好きだね」

闇の中で笑う声。

「御存知ですか？男女を陰と陽のどちらかに分けるとしたら、陰は女性で、陽は男性なのですよ。でも私は光の使い手。常に光を、陽の気を求めています。ですから、あなたとこうしていることは、本当に私にとって至福なのです」

## 2・2 「愛欲と依頼」（後書き）

「つみき談話」の時から使っていた下書き用大学ノートを使い切りました。大学ノートって意外とページ数無いんだなあと思いました。

第一幕は全四話で行きます。あと一話ですね。2008/2/20  
くらいには2・3ができると思います。

## 2・3 「天乃常立」

世の中には、怒ると一・二日その対象を無視し続ける人がいる。アカは、しかしその様な人間ではなかつた。僕がサキの部屋で夜を過ごした日の後、僕に対するアカの態度は常に殺氣を帯びたものとなり、事あるごとに言葉汚く罵られるようになつた。

昨日は畠の用水路に蹴り落とされたりもした。事故を装つて。

多分、彼女に謝るべきなのだろう。

サキとアカに二股かけるようなことになつてしまつた事を、開き直るつもりはない。身につけた月の力のおかげで、時折来る反動的な肉欲を言い訳にする気もない。

けれど、今は駄目だ。いまアカに謝つても、彼女に笑い飛ばされるのが落ちだ。

だから、僕は機を見ることにした

例えば次の満月の夜なんてどうだろ？

\*

そんなこんなで月は満ち、円かな形となつて昇る夜がやつてきた。僕とアカ、ネガイさんの三人は今天戸の宅から真南に一時間ほど歩いたある地点に来ている。そこは、やや乾きめの土に礫が散らばる縁無き場所。『迦具土の墓』<sup>かくづち</sup>と呼ばれるこの荒原は、要するに狭い世界にある超局所的な砂漠だ。天戸の宅の周りには色々不可思議な場所がある。

夕刻、三人の影は乾いた大地に長く伸びる。僕らは立ちつくし、待つている。こことは違う『夢』<sup>まぼろし</sup>へ通じる扉が開く時を。

待つ時間はそんなに長くなかった。やがて日が沈みきると、残光の空の一点が歪み、異形の者達が現れ始めた。

数はおよそ二十。僕が初めて戦つた世界もそうだったが、どうしてあんなに数が多いのだろう。僕らは六人しかいないというのに。

「アカ、君をひと」「心配無用」

彼女の身を案じて掛けようとした言葉は、彼女自身によつて打ち切られた。赫い髪をなびかせながら、僕には目もくれず敵軍に向かつて歩き出す。

「ネガイさん、本当に大丈夫なんですか？」

僕らは今夜、サキが立てた作戦に沿つて動いている。僕がいなかつた今までそういうしてきたりしいが。

作戦とはこうだ。

- ・夢同士の侵略は、される側する側に分けられて、普通変えられない。

- ・天乃常立 を使ってその流れを変える。

・あり得ないはずのこちらの侵入によつて、敵方の統制は大きく乱される。侵略の勢いは弱まるのでアカ一人で食い止め、僕とネガイさんは勢いのままに向こうの世界を滅ぼす。

まあ、言つてしまえばこれだけの簡単な作戦である。それだけに僕は不安。

「それは杞憂です、ツミ殿。サキ様の作戦は破られることはあり得ません」

揺るぎないネガイさんの横顔。それを見上げて、僕は一つ大切なことを思い出した。

この人も、心配している人がいるんだ。  
だから、僕もできることをしよう。そう思つて口をつぐみ、東の空を見た。

朱い山の端から、金色の月が顔を覗かせている。

それを確認し、僕は己の中にある力を解放した。

「月よ、我が力よ！ 夜の王たる力、我が手にある古き刃を従える力となれ！」

**天乃常立**。それは神話に置いて天と地がつくれられる前に生まれ、姿を隠した神の名。神話など、現においては寝物語トーキングベットにもならないほど価値のないものだが、ここ夢まぼろしにあつては力になる。

七日前にこの刀を渡された時には、既に一部の封印が解除されていた。鞘に施された封印をすり抜け力が滲み出てくる。生半可な心構えでこの刀を抜いてはいけないと、僕は感じ続けていた。

故に、月の力を持つてこの刀を抑えつける。

そして、柄に右手をかけ一息に引き抜く。

瑠璃色の空にかざした刃、その色は純白。一点のくもりのない刃を微かに霧が包んでいる。

とりあえず暴れる様子のない刀を念頭に留め置きながら、僕はアカの方を見た。

彼女は炎の海に立つ。

出会つてからこれまでの間に、彼女は見違えるほどに強くなつた。炎への恐怖を克服しつつある彼女は、かつてより比較にならないほど大きな炎操るようになり、それはまるで真紅の花園をつくる如しだつた。そんな彼女の姿を、僕は美しいと言つほかに言葉を知らない。

「アカ殿。そろそろ道を開けてください」

ネガイさんの声は決して張り上げられたものではない。しかし、

その声は爆ぜる田の音を無視して低く彼女の耳に届く。

赫い花園が渦巻きはじめる。やがてそれは巨大な一つの薔となり

、  
「蓮花紅陣！」

花開く瞬間は刹那。

ア力を中心にして灼熱の爆風が広がり敵を蹴散らす。

僕はときの声を上げ空の歪み、僕らの夢を齎かす夢へ通じる、扉へと向かつて走り出した。

「開け時空の扉。神の名を持つ刃を持って、我らは侵攻する！」一閃。

切り裂くのは空。

重ねられた写真が破かれて覗くように姿を現した見知らぬ景色にて、僕は躊躇わずに身を投じた。

\*

降り立つたのは皆ばかり転がる荒れ地の中。瑠璃色の空、半分の月、頭上の眺めは何処も変わらないのだが。

十メートルほど離れたところに今通ったばかりの、扉、があつた。それを囲むようにして何十人もの、人間、が密集して立っている。彼らは順々に扉へ入ろうとしているらしい。多くは扉を仰ぎ見てこちらに気付いた様子がないが、間もなくしてちらほらとこちらに視線が集まりはじめる。

そして異口同音に叫ぶ。

「あいつらは誰だ？」

「あいつら扉から出てきたよな？」 「あの扉は私達が入るためにものじゃないの？」 「扉が壊れたのか？」 「否、扉は同胞を送り続いている」 「化け物でもない……」 「もしかして、我々の新たな仲間ではないのか」 「ばかな、二人同時に来ることなんてあるはずがないじゃろう！」

どよめきも僕の知っている通り、人間くさい。戸惑う彼らは僕らを敵として認識しきれないようだ。しかし、僕は静かに刀を彼らに向かつて構える。

ねえ、サキ。向こうの夢の人達と戦うのは止められないの？ 無理ですわ。残念なことでしょうけど。接触した夢は、長時間そのままだと一つもろとも壊れてしまいます。

悲しいことだと思った。しかし、僕は最後には、戦うことを、彼らを一人残さず滅亡させることを選んだ。何故なら、僕が死にたくないからであり、みんなをまもりたいからだ。そう思つ上で、悲しむことが何より罪深いと思う。

だから、僕は迷いを込めず彼らに宣戦する。

「僕の名前はツミといいます。彼女の名前はネガイです。僕らは違う夢から、あなた達が今侵している夢から来ました。ですから皆さん、僕と戦ってください。お互ひの世界をまもるために。僕とあなた達は、……敵同士です！」

彼らの顔に走る驚愕の色。やがてそれは憎悪となる。剣や斧を持った戦士達が押し寄せてくる。

「ネガイさん、僕の後ろに」

刀を振りかぶり、虚空に向かつて振り下ろす。この動作から生まれるのは、衝撃。白い波が物理的なエネルギーとなり、閃光と轟音を伴つて押し寄せる人の波とぶつかる。

爆碎。

まるで紙吹雪のようだ。「人間」が、四肢を裂かれながら軽々と吹き散らされていく。

悲鳴が上がる。それは白い波が消えてから、思い出したかのように叫ばれる。しかも、それは断末魔ではなく、巻き込まれなかつた無傷の者達が上げる恐怖と嘆きの叫びだつた。

「化け物、化け物！」

まさに蜘蛛の子を散らすように人々は逃げていく。

「逃がさないでください」耳元で、ネガイさんが低く囁いた。

「うん、わかってる」

僕は天乃常立あめのところたちを天にかざし叫んだ。

「月よ！ 愚かなる敗走者どもに狂氣と蛮勇を与えよ。宴を開かん！ 者共、此処へ集え！」

逃げる足音が止み、こちらへ向かう足音になる。

まずは左前に三人。

「せい！」放つた白い衝撃が三人を挽肉にかえる。

次に右、そして左、今度は後ろ、上！

次々と身体を回して敵を迎撃つ。僕の望んだとおり狂氣の光を瞳に宿した者達は、脆く枯れ葉のように散つていく。

と、敵との間に遮る影がある。

「ネガイさん！」

「失礼しました……」

彼女の姿は速やかに月陰に溶けて無くなる。しかし、その時には敵は間近に迫つており、僕が振った刀は直に彼らの身体に食い込む。しまつた、と思つた時には力が炸裂していた。その人間は影も残さず塵となる。

「……なんて事を！」

自責、だが心を乱したこの瞬間に新たな事態が僕を襲う。月の光、夜の闇を退けて天乃常立<sup>あめのとこたち</sup>が眼も眩む光を放射しはじめる。力が堰を切つたように迸りはじめた。

「天乃常立、我が元に屈せよ。何時は我が手にある。鎮まれ

！」

僕を中心に、刀から放射される波動で、岩や土や空、すべてが焼き消えていく。

消しゴムに白くされていくような空間の中での、僕は慌てて刀を鞘に收めようと試みる。

だが、入らない。

「くそ、従え、天乃常立！」

頭上から月の姿が消えた。この目に映るのは、純白の空、純白の大地、純白の……絶望。

「あなたの『願い』は何ですか？」

耳ではなく、心に直接問い合わせの言葉が届いた。

「僕の願いは、アカやサキ、キズオトにササヤキさん、それにネガイさん、みんなをまることです！」

「あなたの命は如何にしますか？」

死を覚悟しているのか、という問い。

「みんなをまるために、必要なら死んでもいい。でも、そう簡単には死ねない。今は、帰つてやらなきゃいけないことがあるんだ！」

すべてが消滅していく白い景色の中で、黒い闇を従えたネガイさんの姿を僕は見いだした。彼女はゆっくりと、よどみない歩みでこちらに来る。

「九（吸）式封印術。猛き力、深く暗い闇に落ちよ」

白い刀身が闇に飲み込まれていき、暴走していた天乃常立の波動は鎮められていく。

真っ白だった風景が徐々に黒い闇に塗り替えられ、僕はその中に落ちていった。

\*

遠のいていた意識が、次第に現実へ引き戻されていく。僕は一切の光のない闇の中に浮かんでいる。目に見えない右手の中に、鞘に入つた天乃常立あめのとこたちがある。

「ネガイさん？ そこにいますか？」 僕ら、帰らないと

問い合わせは虚空に消える。答えは心に響く。

「ツミ殿。それが願いならば、ご自身の力で成就なされませ。私は闇、私は影。私はあなたを守護することはできても、あなたを先導することはできません」

僕の力。

静かに、胸の中にイメージを紡ぎ出す。

「月よ、此処に。円かな月、闇に輝け」

銀色の望月、夜空に浮かぶ鏡のような月に、愛しいアカの姿が映ることをイメージする。

そう、彼女の元へ。

彼女が、待つてくれている。

## 2・3 「天乃常立」（後書き）

補足。

『天之常立神』は別天神ことあまつかみと呼ばれる特殊な神様です。イザナギ・イザナミよりも早く生まれ、天地創造にかかわらずに姿を隠した神。この名を使ったのにはちゃんと意味があります。後の展開で明らかにしたいです。

このほか、天戸の宅の周りの地名にはそれぞれ神様の名前の一部を使っています。

例えば今回出てきた『迦具土の莫』。知っている方もいらっしゃるかも知れませんが、イザナミの命と引き替えに生まれた火の神様です。樹なつみの漫画『ハ雲立つ』とか、『舞 - H·iME』とかに出てきますよね。

それと、ちょくちょく話に出てくる、家の東に流れる『八衢の川』。  
ヤチマタヒコとは、岐ちまたの神様。サルタヒコと同じ神でもある、らしいです。

まあ、受け売りですよ。

## 2・4 「家族の形」

元の夢まぼろしへ帰つた時、満月はまだ南中していなかつた。しかし、出て行つた時よりは大分時間が経つた。今は、多分十時くらいだらう。帰つた地点は、出て行つた地点と同じようだつた。足下の大地には見慣れて礫が転がつてゐる。

そして、すぐ近くにアカが立つてゐた。こちらを見ていた。

「 ただいま」

「 ふん、遅いわよ」

にこやかに話しかけると、彼女は無感動に素つ氣なく返事した。

「 キズオトが、早く帰つて来い、てしきりに行つてきて、うるさかつたわ。さつさと帰つて練るわよ」

ここにキズオトの姿はない。風を操る彼女の能力で、声だけをア力に送り続けていたのだろう。

だが、僕はキズオトを更に待たせてしまつ申し出をアカにする。

「 アカ、少し君と二人だけで話をしたいんだけど、いいかな?」

途端にいぶかしげな表情になる彼女。

「 何? ネガイが居ると話せないわけ? どうせ、この夢まぼろしにいる限りキズオトが聞き耳立てているわよ」

うん、と僕は肯んずる。

「まあ、色々言いたいことはあるうけど、とにかく僕は、形だけでも君と一人だけで話をしたいんだ。ネガイさん、そう言つ訳なのでサキに帰つていてください。すぐ帰りますから」

ネガイさんは無言で首を縦に振り、闇に姿をくらました。遁行だらうつか。

「 で、話つて何よ

珊瑚色の双眸が、険のある光を宿して僕を見ている。  
だけど、僕はひるまず、ゆっくりと話す。

「アカに、ある物を壊して欲しいんだ」

「ある物?」

「そう。居間とサキさんの部屋とを仕切っている壁を壊して欲しい」

はあ? と彼女は顔を嗤いと疑問の入り交じった表情に変える。  
「家を壊せつていうの? あんた、頭がどうかしたんじゃないの?  
?」

「大丈夫、僕の頭は正常だ。それで、壊すのは今帰つたらすぐ壊して欲しいんだ」

「嫌だって言つたら?」

交渉される側の優位を意識した発言。だが、僕も真っ向から交渉しているわけではない。  
話を、変える。

「アカは、サキのことが本当に嫌いなの?」

わずかな空白があつた。

それから、彼女は強情に口元を歪ませて言った。

「ええ、嫌いよ。あんなもぐら娘」

「嘘だね」

僕は断言する。たじろぐ彼女に、僕は更に言つ。

「素直になり名よ、アカ。君は決して誰かを嫌いきれる人じやない。本当は、君はサキと分け隔て無く接したいと思っているんだろう?」

「知つたふうに言わないで!」

烈火の如く彼女はまくし立てる。

「私とあの子との関係は、かれこれ十年、はじめ合つた時から変わらないのよ。こまさら、何が変わるというのよ」

そして、一息。今度は一転して声の温度を下げて言う。

「あんたは誰のためにそれを言つているのよ。私のため? 笑わせないでよ。そんなにあの子が気になるのなら、あの子の部屋にあんたも一緒になつて引きこもればいいじゃない

「「「めん」

腰を曲げ、背中を傾ける。頭頂を彼女の眼前に曝し、僕は謝罪の意を身体で示す。

「僕は君を裏切つてしまつた。君を傷つけてしまつた。サキと一夜を過ごしたこと、理由がない訳じやないけど、僕は君に何も言い訳をしない。僕はただ君に謝りたい。そして許しを乞い、その上で頼みを聞いて欲しいんだ」

ひたすら囁々しい話だと、僕は自己分析した。頭を下げたまま、僕は彼女の声を待つた。

「別に、私は傷ついたじゃないわよ。あんたのことなんて、何とも思つてない。あんたが何しようと、私には何の関係もないんだから。……いつまで頭下げてんのよ」

「君が許してくれるまで」

しばし時が硬直したまま流れた。

月下の荒野に吹く風が僕らの間を走り去つていく。  
そして、ぽつつと呟くアカが言つ。

「私はサキのことが嫌い。あの子を好きなあんたも嫌い。でも…  
…、あんた達は私のこと、どう思つてるの？」

弱々しい、風に吹かれて飛んでいたそのうな弱気な問いかけだつた。  
でも、答えを必要不可欠としている。僕は頭を下げ続けたまま、も  
てる限りの誠実を込めて答えた。

「サキは君のことをしてるよ。君に嫌われていることを知つ  
て、少なからず心じを痛めても、ね」

「……あんたは？」焦れたように彼女は問つ。

「僕はアカのことが好きだよ。これまで、生まれてきてから出会  
つたすべての人の中で、一番、アカが好きだ」

「嘘！」

彼女があらん限りの声で放つた言葉は、静かな荒原に木霊するく  
らい、想いの込められた物だつた。

僕は彼女の糾弾を前にしても何も言わなかつた。

「ねえ、どうして頭を下げたままなのよ。目を見なくちや放せな  
いでしょ。　まず、顔を見せなさい。そもそもなれば許さないわ」  
顔を上げると、すぐそこに赫い双眸があつた。心の奥底まで射抜  
くような強いまなざしが、僕に向けられていた。

「……あんたは、私のことどう思つてているの？」彼女が再度問つ。

「僕は君のことが世界で一番好きだ。君が僕を嫌つっていたとして  
も、憎んでいたとさえしても、この気持ちは変わらない。僕は愛し

い君のために生きていく

じつと、彼女と見つめ合つた。

俄に彼女は足を踏み出した。その方向は僕らの家だ。

「アカ……」

赫い後ろ髪をなびかせる背中に追いすがり呼びかける。

「あなたの頼みはわかつたわよ。やつてあげる、ぶち抜いてくれるわあんな壁」

そして、しばらく歩いてから、不意に彼女は振り返る。

「私のことが好きなら、サキとはもつ一度と寝ないで。それが約束できるのなら、あなたのこと、許してあげてもいいわよ」

「うん、約束するよ」

でも、実際難しいかも。

そんな僕の胸中を見抜いたように、彼女は付け加えて言った。

「言つておくけど、サキは眞田の淫魔よ。にわか俄色狂いのあなたが果たして堪えきれるのかしらね」

「アカ……、その言い方はあんまりだよ。…………君つて口が悪い……」

て、こんな事言つたら不味いだろ。

しかし、彼女はふんと鼻を鳴らしただけで、何も言わずまた歩き出した。

「明日の夜、十六夜が昇つたら……私の部屋に来て……もいいわよ

\*

家に帰るとまずキズオトが、長い時間おあずけされていた犬のように飛びついてきて、その後ろから優しい声で「おかえりなさい」とササヤキさんが出迎えてくれた。

居間にはいると、夕食のための膳は既に用意されていて、あとは囲炉裏に掛けられた肉じゃがとみそ汁を待つだけの状態だった。アカが両手に火を灯して件の壁の前に立った。僕は約束の履行の時が来たことを悟り、床に並んだ四つの膳と肉じゃがの鍋を安全な場所まで移動させ、自分もアカからそこそこに離れた場所に立った。キズオトはやはり僕らの話を聞いていたのか、そそくさと台所まで避難。ササヤキさんが独り、何事かと立ちつくしているので、手招きして僕の近くに来てもらつ。

「恋花紅塵！」

操作された局部的な爆発が、破片を飛び散らさずに壁に大きな穴を開けた。衝撃と爆音はそれなりの物だつたけど。

「アカ！ なんて事を」「待つて下さいササヤキさん

！」

予告無しの事態にササヤキさんがヒステリックに怒鳴り出さうとする。僕は彼女の手を取り声を掛けそれを制した。

「どうこう事なの！？ ツバ。ちゃんと説明して頂戴」

いつも穏やかなササヤキさんが怒りのあまり顔色を変えてしまつている。慣れない状況に思わず気を動転させてしまい、僕は口を無為に開閉してみた。

「落ち着いて下さい、ササヤキさん」

サキの声だった。彼女の一聲で、僕がなだめそこなつたササヤキさんが肩から力を抜いた。

すらりと居間の襖が開かれ、そこから飄々とした面持ちの彼女が現れた。彼女は膳を手にし、後ろに控えるネガイさんも同じく膳を手に持っている。

「「めんなさいね、皆さん。私は、このことが起る」と先視していました」

本当ですか。

本当に声が出なくなつた。身じろぎをすることも忘れてしまつた。立ちつくす僕の眼前で、落ち着いた態度のサキとネガイさんが当然のようなくぼ爐裏の周りに自分たちの膳を配置しはじめる。

しばしして、アカのことを思い出した。はつとして振り返つた時には、アカは爆発する直前だつた。

「サキ！ やっぱりあんたのこと嫌いだわ！ これまで頑なにみんなで暮らすことを拒み続けてきたくせに、今の私がやること阻みもしないで……。ふざけるんじゃないわよ！ 何考えているのか、言つてみなさいよ！」

「ア、アカ、落ち着いて……」

「そうですね。疲れている時に機を乱すのはよくありませんよ」  
すつとサキが僕の横に現れた。彼女は僕の腕に自分の身体を巻き付けてからアカに話しかける。

「だって、他ならぬツミさんのお望みですもの。聞かないわけにはいかないでしよう?」

「当たり前みたいに言つんじゃないわよ! その手を放しなさい!」

「あら、何故ですか?」彼女はとぼけた口調で言つ。「アカはツミさんのことを好いていらっしゃるのですか?」

「そんなこと、あた」

言いかけて、止める。本当にアカは素直じゃない。  
僕はサキの腕から自分で抜け出した。アカのために。

「ツミさん」

「ごめんね、サキ。僕はアカの物だから、そう決めたから。たとえ、アカが僕のことを好きじゃなくても、ね」  
顔を真っ赤に染めるアカ。対してサキは、可愛らしく頬を膨らました。

「まあ、うりやましいこと。でも、負けませんわよ。 ねえ、  
ツミさん。一週間に一度は私の部屋に来て下さいますよね?」  
な、何を言つているんだ彼女は。

「あら……、では、二週間に一度ですね」

「サキ、黙りなさい! 焼くわよ!」

ガンガン、と固い物を叩く音がした。僕らのささやかな痴話げんかに痺れを切らし、ササヤキさんがおたまと鍋ぶたを打ち鳴らしあじめたのだ。

「ほら、もういいでしょ? いい加減ご飯にするわよ。それとも、三人とも入らないのかしら?」

「僕は要りますよ!」「わ、私もよ

「では、シリアさんは私の物と言ひに」と、「ふざけるんじゃな  
いわよ！」

「シリア、一緒に食べよ」

肉じゃがは馬鈴薯の豊かな味が良く生かされていてとてもおいしかった。ご飯も、みそ汁も、蕪の漬け物も、みんなおいしい。

囲炉裏を囲んで、みんなと夕食を共にする。ネガイさんとササヤキさんが今後の料理当番について話し合っている。囲炉裏の向こう側で、アカとサキが賑やかに公論を交わしている。となりでは、キズオトが澆刺とした口調で、これまで待ちぼうけを食わされていたことについて話している。

これが食卓というものだ、これが団欒<sup>だんらん</sup>といつものだ。僕はそう思った。

\*\*

満月の光は、夜なのに毎だと錯覚させるほどに眩しい。しかし、そこには慎ましさが欠かさず存在し、あまりの美しさに僕は溜息をつく。心は昂ぶりなかなか眠りの世界に入らうとしない。

そして、性的欲求。

戦うために力があるのは望みの通りなのだが、その力のために月の出の度に悶々とさせられるのも厄介な物だ。

くつきりと明かり障子を通して畳みに影を落とす月光を避け、部屋の隅に布団」と移動する。

僕の部屋もはじめの頃より物は増えた。主に物置から発掘された書物を並べてある本棚など、生の木の気配が近寄る者に不思議な安全感を与えてくれる。

頭から布団をかぶる。その中で、僕は帰り際にアカが言ったことを思い出した。

『十六夜の夜に部屋に来てもいいわよ』

焦らしているんだろうか。

そんな彼女の思惑を想像し、あまりのいじらしさに独り身悶えした。

と、明かり障子の開かれる音がする。

サキだらうか？ すると、かなりますい。

誰にしても、もう今夜は誰とも顔を合わせたくない気分だったの

で、狸寝入りしてみる。すると、思い切り蹴飛ばされた。

「うお！ アカだね。こんなことするの」

闇の中で赫い瞳を爛と輝かせ、彼女は僕を見下ろしていた。その視線は殺氣めいて鋭いが、僕にはわかる、それが彼女の強がりだと

いうことが。

僕は何も言わず彼女の言葉を待つた。すると、思った通り彼女は痺れを切らして口を開いた。

「何が言いなさいよ」

「じゃあ 綺麗な満月だよね、アカ」

ついと彼女が顔を背ける。

「だつて……明日がちゃんと晴れて、十六夜が見えるとは限

らないじゃない……」「

本当に、彼女は可愛い。

手を引いて、僕は彼女を抱き寄せた。

現うつ、と今では僕も呼ぶあの世界にいた時、僕は毎日が空ろだと思つっていた。

夢まぼろし、と僕も呼子の世界で、僕は日々命をかけて生きる理由と大好きな女性を見付けた。

僕はもうあの世界には戻らないだろう。ここが、僕の生きる世界だ。

## 2・4 「家族の形」（後書き）

シンデレは難しい、といつ以前に女心は難しい。アカの気持ちをちゃんと文章にしてあげられたのか自信がありません。

ところで、今日はこの物語の裏設定を。

この物語の主な登場人物は七人と決めてあります。これを 七宝になぞらえてみたのです。これから、七宝に対応した力をみんなが身につけていく……という展開をしたかったのですが、それは無理なので。

アカ：金 サキ：水晶

あとの五人はまた次の機会に。

## 間幕 「廃墟」

サキ、と名乗る人に招かれるまま、ボクは廃墟同然の家に上がった。

廃墟の中は、やはり廃墟だった。すぐ入ったところの囲炉裏のある居間は床も壁も穴だらけで、その隣の少し綺麗な部屋にボクは通された。この部屋はこの家にあるもう一つの居間みたいな感じで、ここにも囲炉裏があった。

ネガイ、という新しく出てきた黒い服の人気が裸だったボクに服をくれた。ネガイは少し背が高い女の人がだった。そういえば、ボクも人間の女だった。サキはボクが服を着るところをじっと見ていたけど、あの人も女なのだろうか？ 声は高くてそれっぽいけど。

服を着て、お茶を一杯（すごく熱かった）を飲むと、サキは昔話だと言つて物語りをはじめた。

それはボクのご主人様の話だった。ボクと一緒にいた頃 現にいた頃 の名前を忘れて、‘ツミ’、と名乗つていた彼はこの家で三年間暮らした、という話。でも、サキの話は、物語と言うよりは、その昔の日々を思い出すような細々とした昔話で、なかなか長い。天高く昇っていた太陽が地平線に沈んでも、サキの昔話は、ご主人様がこの世界に来てから一年も経たないところまでしか進まなかつた。

でも、退屈だった訳じゃないよ。話の中でボクが特に気になったのは、アカがどうしてサキのことを嫌いじゃないのかということだった。

「アカは、ここに来て間もない頃大きな病気をしたことがあるのです。そこで私が看病してあげたところ、いたく感謝されて、それから私達は友達になつたのです。

一・三年はその関係が続き、一時期はアカと一緒にあちこち山野

を歩き回って友好を深めました。しかし、ある冬の日に、今度は私が身体をこわしてしまい、それから一年くらい部屋を出られない日々が続きました。そして、その間にお互いの気持ちは離れていつてしまつたのです

「お互いの気持ちって、サキは病気だつたんだから仕方なかつたんじゃないの？ アカはどうして

「いいえ！ アカは悪くありません。アカは、私が病床にあっても常に傍にいてくれました。

彼女は元々自分の気持ちを素直に表に出すのが苦手でした。それでも、彼女は私のみを精一杯案じてくださり、その気持ちを何とか伝えようとしていました。しかし、私の方が上手に彼女の胸の奥の気持ちを受け止めることができず、身体の具合の悪い時にはつい彼女の裏腹な言葉を真に受けて返してしまつことがあつたのです

やつぱりボクにはアカという女人の人人が良くわからない。どうして心の中にある気持ちを反対のことをしなければいけないのだろう。そんなことをしても、誰かを、大好きな人を困らせてしまうだけじゃないのかな。

それに、彼女を好いたサキ、それにご主人様も良くわからない。人間つて、変な生き物だ。

前足を地面から離し、一本の足で歩いているせいだろうか。

\*

そして夜、ボクはかつてご主人様が使つていたといつ部屋で眠る。机や本棚の置かれた質素な感じのするこの部屋は、廃墟と化した家の中で妙に綺麗だった。時が止まっている、とサキは言つていた。身体を横たえ、目を閉じて耳を澄ます。聞こえる音は本当に幽かな物だ。サキが言つていた、ここはもう死んでしまつた世界なのだ

と。野は荒れ、森は枯れ、水の流れは途絶えた。くすんだ空に、月の光は寂しい。

いま、この世界にいるのはサキとネガイ、そしてボクしかいない。二人は今までこの誰もいなくなつた世界でどうやって暮らしていたのだろうか。命の乏しいこの世界で生きてきたせいか、さつきの夕食でも一人はほんの少しあかべなかつた。生きるための力といつものが感じられない。

と、そこまで考えて用を足したくなつた。

『トイレに行かなきゃ』と、飼い猫らしい考えがボクの頭に浮かぶ。

廁はこの部屋を出て、廊下を右に歩いた突き当たりにあつた。済ませて出てきた時、右手にある襖障子の向こうが昼間サキと話した部屋だと気付く。サキは一日の大半をこの部屋で過ごしているらしい。

あれ？ ネガイは？

ああ、二人一緒と言つていたつけ。

何故か急に一人が枕を並べて寝ているところを見たくなつて、ボクはそおっと襖を開けて中を覗いた。

そして、見てしまつた光景にボクは激しく後悔した。

身体を重ね足を絡め合い、互いに悶えるように身体を上下に揺らす男と女の姿。下で闇色の髪を乱している女人の人がネガイさんだつた。彼女に覆い被さる白い髪の男の人は サキだつた。

あの人は男だつたんだ。

その事実は、ボクを恐怖させた。襖に遮られていた嬌声に追われ

るよつにして、ボクはその場から逃げ出す。

部屋に戻つて、ボクは布団に潜り固く目を閉じた。

身体が震える。

ただひたすら怖かつた。

そういえば、猫だつたこつもボクは交尾をしたことがなかつた。

発情期を知らず、しょつと思つたことがなかつた。

やがて、布団の上から誰かが触れるのを感じた。身を竦めるボク  
に、その人は優しい声音で言った。

「<sup>わたし</sup>私と契りを交わしてくださいませ」

## 間幕 「廃墟」（後書き）

今日の裏設定。

チヨ 琥珀 ネガイ 黒真珠

真珠といつのは、宝石と違いはじめから、珠、なので、<sup>まいじゅ</sup>真の珠、と呼ぶらしいです。

このあと予定では、第三幕（キズオトの挿話） 間幕 第四幕（サヤキの挿話） ..... と進みます。

第五幕からは話が核心的な部分に入つて、ストーリーがどんどん進みます。あまり日常系な挿話を入れられません。ですので、『もつとみんなの日常生活が知りたい』と思う奇特なお方は是非御一報ください。頑張つて何か加えてみますので。

### 3・1 「狩りと語り」

西風が茶色の木の葉を吹き散らす季節がやつてきた。

秋、黄金色になつた稻畑をアカと共に刈り終わつた後、僕はキズオトと一緒に森を訪れる。

ここは 千五百の森 という。ずいぶん変わつた名だ。

赤や黄、紅や山吹、様々に色づいた木々の中には実を結ぶ物もあり、そうでなくともやわらかく降り積もつた枯れ葉の間からキノコが顔を覗かせている。

食べられるもの、食べられないもの。時に拾つては火を通してまみ食いをしていれば話の種はぬきない。

秋は、一年という循環に生きる命が最後に輝く季節。  
だからこんなにも美しく楽しい。

「どう、ツミ? 新しい候補は見つかつた?」

「あー、うん。北北西に百二十メートルくらいにいるやつ、どうかな」

僕らは狩に来ている。ただ、僕らの手には矢も罫もない。使うのは、自分たちの特殊能力だけだ。

狩の手順を述べてみる。

まず、僕が月の属性である 天 の力を使い、上空から情報を集め一番良さそうな獲物を探す。僕自身は地べたを歩き目も開いてい

るが、同時に頭の中には『見ている』という情報が流れ込み、いわば二重に感覚を刺激されている状態になる。これは慣れるのに時間がいる。

次に僕が見当をつけた獲物に、キズオトしづしが小さな風の刃で傷を付ける。彼女は獲物を視認する必要はない。風を伝つて得られる感覚だけで対象に傷を付けられるのだ。

これを何体もの獲物に対して行う。しかし、狩り取るのは一体だけ。僕らが森を後にすると、こちらとの距離と、獲物の大きさと、その一つを条件に最も良いものを選んで狩る。キズオトが獲物の息をつまらせ氣絶させ、眠っている獲物に僕が近づいて傀儡にする。そうやつて獲物を家まで連れ帰るのだ。

秋の森には多くの動物が、人には越えられない、境界、を越えてやつてくる。森の恵を思うままに食し、肥えた動物は素晴らしい御馳走になる。それに加えて、僕らは冬越しの備えをする必要があるので、狩の機会は自然と増える。

以前は狩はキズオト独りでやつていた。命を奪うだけなら彼女一人で問題ないが、獲物を運ぶのは小さな彼女には難しい。僕の持つ、対象を意のままに従えるという能力を使えば、それは容易いこととなる。だから、こここのところ連日キズオトの手伝いをしている。

だが、連れて帰った獲物が屠殺されるところを見るのは、正直あまりいい気持ちがしない。僕によつて無抵抗にさせられた獲物をキズオトが窒息死させ、それをアカとネガイが解体する。その光景は僕の胸を痛ませる。せめて、己の手でやりたい物だが、何度も試みても気分が悪くなつてすぐに止めてしまう。

人を殺めても、こんなに気分は悪くならない。

それは、僕が人間を「狩つて」いるわけではないからだろうか。彼らと僕は、殺し合つて、いる。それは殺意と殺意の交換であり、

僕らの立場は互いに等しい。

しかし、狩りにはそのような相互関係はない。動物たちには殺意がない。ひたすら無垢な瞳をこちらに向けるだけの彼らを、僕は一方的に殺していくのだ。割り切るには、難しい。

「ツツミ。 できたよ。 これで何匹だっけ？」

キズオトの声。耳には届いたが、思索の海に漫る心には届かない。

「ツツミ。 聞いてるのー。」

「え、あ！ 何？ 「 ようやく反応をすることことができた。」

「だから、これで何匹に印を 」「 キズオト、足下見てー！」

「え？ まああー。」

注意は一寸遅く、木の根に足を引っかけ転んだ。

「もう……ツツミがメランコリックになってるせいだからだよー。」

「あ……いや……、それよりその髪……」

彼女が転んだ場所は運悪く水気の多いところだった。身にまとっているいつも大きな袴は多少汚れたくらいだったが、長い蜂蜜色の髪が泥染めになっていた。

「あー！ ツツミ、責任取つてよね！」

「せ、責任！」

彼女は僕の手を取つて走り出した。僕は、抵抗せずにおりおりついていく。

「あれ？ じつは……」

「いい機会だから連れて行つてあげる。 道敷の溜おとしき、この夢ゆめの

最果てに

\*

「うそ、茂る森の中にある湖とは奇妙な物だ、と僕は思う。そこだけ刈り取られたように唐突に開けた場所には、大きな大きな水溜まりがでんとある。

道敷の溜 という湖。天戸の宅 の東にあるハ衢の川 と繋がるこの滄い湖は、向こう岸を見ることができない。それは広いせいだけではなく、ぶ厚い霧が向こう側に壁のよつに立ちこめているからだ。

あれが僕らの夢の果てなのだとキズオトは言つ。

「あの向こうではね、湖はどこか別の夢にある湖と通じているの。だから魚とかは泳いで夢同士を行き来しているけど、あたし達は渡ることはできないよ。」

彼女は湖の澄んだ水で髪を濯ぎながら僕と会話する。

「あんまり実感沸かないなあ……」

「そう、かもね。…………それでシミ、さつきは何を考えていたの？」

さあ話してみなさい、と包み込むような態度で彼女は尋ねてくる。今日のキズオトはなんだか年上の女性っぽい。

まあ、実際そうなのだが。

「ああ、その……人を殺めるのと動物を殺めるのとつて違うんだな、と思って」

彼女はすぐには答へなかつた。

あたりは静けさの住居となつていた。黙つていれば、キズオトが水を掬つては髪に向かってこぼす、はしゃりぱしゃりといふ音しか

聞こえない。耳を澄ませば、幽かに枯れ葉の落ちる音も聞こえる。

ややあって、当たり前じゃない、と彼女が言った。

「自分と同じ種族を殺すか、そうじゃないかの違いがあるんだもん。ツミは、どちらの方が嫌いなの？」

僕は迷わず、「動物だね」

「自分の物を壊すのと、他人の物を壊すのと、どちらが辛いことなのかな？ きっと、ツミは後者を厭う。それを同じだよ」

それを聞いて、僕は一つ思つ。

諭すように話す彼女はどうなんだろう？

髪を洗い終わった彼女が、水を絞り落としながら湖畔から離れる。そして、僕の方へ歩いてくる。

座っている僕よりは少しだけ背の高い彼女は、僕を見下ろしながら言つ。

「こんな暗い話、あたしもうしたくない。ツミ、元気が出るよう<sup>おはなし</sup>に物語<sup>おはなし</sup>を聞かせてあげる」

僕の左側に腰を下ろして、彼女は話し始めた。

「ツミは伊邪那岐<sup>イザナギ</sup>と伊邪那美<sup>イザナミ</sup>を知つてゐる？」

「日本神話<sup>ニホンジノタガタ</sup>に出てくる天と地を創つた神様だつたつけ」

「そう、伊邪那岐<sup>イザナギ</sup>と伊邪那美<sup>イザナミ</sup>は世界、つまり現と夢の世界を創つた。世界だけではなく、その守護者たる八百万の神々もまたその二柱の神をして生まれたわ

「でもね、伊邪那岐と伊邪那美ははじめから完璧な世界を すな  
わち現を 創れたわけじゃない。夢とは、現を創る上で失敗作  
の世界なんだよ。知つてた？」

「……全然。それ以前に、本当なの、この話」

「現では虚構の物語。誰も知らない。でも、一つだけ『古事記』  
に記されている、名前を持つ夢がある

それは、 淡島。地面が雲みたいにふわふわしていく淡いから、  
そういう名前なの。

理由はわからないけど、夢は消えてもまた生まれる。だから、現  
ができる国産みが終わってから何千年経つても、夢はたくさんある。  
でもその中で、 淡島だけは昔から変わらない。どこの夢にぶつ  
かることもないけれど、確かにある」

つかみ所のない漠然とした話だと、感想を抱いた。何千年もの昔  
の話、それ以前に真偽も疑わしい話。煙に巻かれたみたいに、僕は  
何を考えることもできない。

話している時のキズオトの口調は、極めて淡々としたものだった。  
語彙は大人の使うような難しいもので、語尾だけが普段の彼女の面  
影を残して。

「ねえ、ツミは強い力が欲しい？」

今のは、いつもの彼女らしい澁渼とした物言いだった。しかし、  
その内容は、ひどく難しい。

「強い力、何のために、何をするための力なんだ？」

「僕は、今はみんなと戦うための十分な力を持っていると思うから、要らないよ」

ふうん、と彼女。満足したようでも失望したようでも、どちらか

も取れる声での相槌だった。

「もし、ツミが強い力を欲しいと思ったら、淡島を捜すといいよ。

淡島は世界そのもの、力そのものだから」

そんな時が本当に来るのだろうか。

もしその時が来たとして、僕は何を為そうとしているのだろう。

う。

\*  
「だあれかさんが、だあれかさんが、だれかさんが、みーつけた」

小道をたどりながら僕らは家に帰る。僕は後ろのに今日の獲物である中くらいの牝鹿を引き連れて歩き、キズオトは前の法で謳いながら歩いていく。彼女の歌声は真に愛らしく、鶯を僕に思わせる。

「キズオト、ちょっとといいかな？」

僕が呼びかけると、彼女は歩みを止め僕を待つた。

「なあに？ ツミ」

「その歌つて君がこの夢に来る前から知っていたのかい？」

彼女は首を横に振った。

「サキに教えてもらつたの。 そつそう、さつきの話もサキが教えてくれたんだよ」

「サキが？」

そういえば、前に天乃常立をくれた時もその由緒を教えてくれたな。

「サキは何でも知つていてるよ。不思議だよね。あたしはこの夢の中のことなら何でも知つてているけど、サキは時々だけど余所の夢のことを話すよ。現のことだつて知つてているみたい。たまに、話しながら変な‘流行語’を使うんだよ」

思い出した。初めてあつた時、彼女は僕に、スリー・サイズ<sup>（三尺寸）</sup>を教えた。考えてみればおかしな話だ。八十年近くこの夢<sup>（まほろか）</sup>にいる彼女がそんなこと知るはずがないだろうから。

「どうやって知っているんだろうね」

僕が呟くように言つと、答えが返ってきた。

「さあ……いつか『ネガイが教えてくれる』とか言つていたなあ。

そういうえば、ネガイのこともあたしたちよく知らないのよね

そこまで言つて、キズオトは背中を見せた。この会話<sup>（まじめな話）</sup>までで終わったのだ。

しかし、五歩ほど歩いてから卒然とキズオトが振り返った。

「サキで思い出したけど、最近シミはしつかりアカとの眞操<sup>（まんそう）</sup>を守つてるの?」

な、何とプライベートな質問を…

しかも

「キズオト……知つてるんでしょ?」

この夢<sup>（まほろか）</sup>の中で彼女が知り得ないことはないのだ。

先に白状すると、僕は完璧に眞操を守りきれているわけじゃない。まことに、サキの誘惑は逆らいがたいものがある。しかし、ここ最近はなんとか堪えきれるようにもなってきた。二月はサキを遠ざける事に成功し続けている。

「僕だって頑張ってるんだ」

そう言つと、キズオトは然り顔で一度頷いた。

「シミは本当にアカのことが好きなんだね」

「……まあね」

「いいなあ、とキズオトが口にぽした。

「ツミはもう誰のことも好きにならないの？」

「…………？」どうしたのキズオト。俯いたりして。元気ないの？」

いつの間にか顔を伏せてしまった彼女の頭に、僕は手を伸ばしてみた。しかし、この手はぱしりと弾かれる。

「元気なくない！　さっきまで、ツミの方は元気なかつたもん！」軽い音を立てて彼女が走り出した。見る間に距離を作っていく彼女の背に、僕は慌てて叫んだ。

「キズオト！　あんまり遠くに行かないで！　君を見失うと

豪<sup>ごう</sup>と風が吹いて、僕の瞼は意志に関係なく閉じてしまう。そして、次に光を見た時には、キズオトの小さな姿は何処にもなかつた。

「キズオト。　何処？　おおい

困ったことになつたかもしれない。このまま彼女がいないと  
「帰れない…………」

夕刻を予告する、冷たい風が吹いた。

### 3・1 「狩りと語り」（後書き）

第三幕はキズオトのエピソードです。次でお終いです。

解説……「千五百」の由来がなんだかわからなくなってしまいました、ごめんなさい。「道敷」は……確か、道返しとかと同じだと思います。

ところで、皆様はこの小説を縦横じゅうお読みでしょうか？書いている立場としてはこれは横書きで読めるようにレイアウトを組んでいます。行間をまめに空けるなど、見様見真似の工作をしています。

この間、図書館で横書きの小説を見付けました。しかもハードカバー。ちょっとビックリしましたね。

### 3・2 「風神楽の巫女」

月の力を解放、脳裏に 千五百の森 の全体図を呼び起<sup>ちこぼ</sup>こす。キズオトを捜すため。

方向さえわかつていれば一人で帰れそうなものだが、どつこいそ  
うはいかない。起伏の激しい地面、多くの木々、森の中は迷宮と化  
している。全体図を頭に入れながら歩くと、眼前がつい疎かになり  
がちなので一人じや迂闊に歩けないので。

感覚を一点に集中させず、あらゆる情報に対し意識を広げ、  
鋭敏に反応できるように構える。

そして僕はキズオトを捜して歩き出す。

まもなくして彼女の居場所の見当が付いた。  
だが、それと同時に複数の異形の存在を確認した。こちらに敵意  
を持つている。

人間じやない？

木立の間からチラチラ見える異形の姿、二本の足で歩いてはいる  
が、気配が人間と異なると感覚的に思つ。他の夢から来た人間じや  
ない、全く異質な気配。

僕は反射的に腰に差した天乃常立<sup>あめのところたち</sup>に手を掛けた。三ヶ月ほどの訓  
練で、僕はこの刀をどうにか普通の刃物として使えるくらいに抑え  
られるようになつたのだ。しかし、月夜ではない限り油断はできな  
い。

構えは居合。勝負を一瞬と限定し、暴走の危険性を限りなく低く  
するため。鯉口を切り、姿勢を低くして相手に向かい合つ。

異形がこちらに気が付いた。ぽつかりと黒い二つの皿がこちらを見  
る。

だが、次の瞬間、一迅の風が吹くと同時に異形は真っ一つになつた。

風が吹いてきた方向は、キズオトがいると僕が見当を付けた方向だつた。

己が眼だけを頼りに僕は走り出す。

進むにつれ生い茂つてゐるはずの草や枝が疎になつてくる。切り落とされているのだ、キズオトの風に。

「めえかくしおーにさん てえのなるほもうへ

森の中ばかりと丸く刈り取られた広がりの中にキズオトはいた。そこにあつたと思われる木々は、すべて一ミリメートル単位で輪切りにされて、あたりに紙吹雪のように散らばつていた。

彼女は歌う。その足下に、灰色の身体から紫の体液を流す異形の骸。

彼女を囲む異形の数は五。どれもが小さな少女一人相手に攻めあぐねている。

無理もないけどね。

僕は信頼感を込めて、鞆走留<sup>ははき</sup>が音を立てるまで刀を押し込む。

やがて、痺れを切らした一体がキズオトの背後から飛びかかった。彼女はそれを見ていない。しかし、次の一秒には異形は無惨に四つ裂きとされる。

歌うキズオトの背後で紫の血の雨が降る。

残された四体が時を同じくして動く。描かれる軌道は、キズオト

を中心とした円。異形達の走りは殊の外速く、端で見ている僕にはその姿が震んで見える。けれど

「おーへやはきたむき くうもりのガアラス」

次々と四体の攻撃が繰り出されてもなお、彼女は歌声を乱すこともなく軽々とそれをかわす。

のびやかな歌声、優雅な身こなし。それはまさしく

#### 『風神楽の巫女』

僕の脳裏に、彼女に与えられた一一つ名が自然とうかびあがる。円かに切り開かれた森は彼女の舞台。秋風が拍子を取る笛の音。異形達は彼女という舞い手を引き立てるための脇役に過ぎなかつた。

「ちいさいあき ちいさいあき ちいさいあき み一つけた」

キズオトの横を過ぎ去つた異形が上半身とか半身を分断させて、進む勢いのままに木に激突した。

はらりと彼女の袴の右袖が落ちた。

「ああー！ 驄目じゃない、ササヤキに怒られちゃう！」

ついに歌を中断した彼女。ひとしきり嘆いた後、キズオトはばさりと袴を地面にうち捨てた。

「来たれ風の竜。こいつらに痛い目見せてやるわよ」

突如降りてきた猛烈な竜巻に、異形達が無力に巻き上げられていく。

異形達はもがく。空中で、地面に向かつて手足を振る。

それを見上げて、キズオトは嘲笑つた。

「降りてきたいのお？ そう、風に逆らつんだ？」

なら、ケ

バタケ！ あの子達に空気の大切さを教えてあげなさい」

天高く、見上げる風が粒ほどに見えるくらい高く巻き上げられた異形達が、落下をはじめる。だが見ていれば、その落下速度はあり得ないほどに早いことに気付く。

空気抵抗がない?

矢のように降ってくる

地面に着く瞬間、異形達の身体がたてた音は空き缶を潰すようなもの。彼らは土にめり込み、永遠に動かなくなつた。

\*

探しに来てくれたんだ、と聞かれ、これを肯定すると彼女は心底嬉しそうに顔をほころばせた。

空は藍に染まり、枝葉の影に三日月が見える。僕らは結局大きな獲物もなく、背に負つた袋に栗や茸の類を半分くらいまで詰めて帰路に就く。

怒られそう、アカニ。

木本に空を見上げる。すると、顔の方から声がかかってきた。

「ねえ、シ//」…………シ//せどりこの女のが好きなの？」

「ええ？」

驚きと共に彼女を見下ろすと、彼女は有無を言わせぬ表情でこちらを見上げている。

僕は不承不承答える。

「放つてけない子かな……。といつても、アカに会つまで

にいる頃は別に女の子と付き合つ」とも、そうしようと考えたこと  
もなかつたけど、「

彼女は目を丸くして呟つ。「じゃあ、アカガツミの、初めて、な

の？」

「初めて、何か表にも裏にも意味がありそうな言葉だ。  
彼女は問いを重ねる。

「それで……初めてにして一田惚れのアカ以外、もつシ//は誰のことも好きにならないの？」

女性がわざわざこんな物言ひをするには意味がある、そう僕は判断する。

先程はぐれてしまつた事とも併せて、僕はキズオトの気持ちを推測した。

彼女の質問に言葉で返さず、ぐつと腰を曲げて背の低い彼女の頭の位置まで自分の顔を下げる。小さな顎をしゃくり取つて、僕は自分の唇と彼女の唇を重ねた。

一秒間。

湿つても、深くもない、親愛を示すためだけの口づけ。顔を放した時、無念そうな彼女の面持ちが目に焼き付く。

「ツミ ミツミ」

僕は彼女を遮った。

「僕は君のことが好きだよ、キズオト。でも、この想いはアカに對して想うような恋心じゃない。僕はキズオトを、家族として、妹として想っているんだよ」

絞り出すように彼女は言つ。「それは……あたしの身体が子供で、十もいかなくて生理も来ないから？ あたしを、抱くことができないと思ってるから？」

**風信**「子石の双眸に浮かぶ涙。それを見て、難しいな、と密かに胸の中では呟く。

「キズオト、よく聞いて。人は好き合っているから身体を重ねなければならないことは無い。逆に、抱き合つたところで好きになる訳じゃない。だから、君を抱かないからといって、僕が君のことが好きではないということとは違う。でも、僕はアカの物だから。僕の恋はすべてアカのためにある。僕の心の中で、一番にあるのはア力のことだ。だから僕は」

「もうこりよ」感情のこもらない声。それで、僕の言葉は遮られたり。

キズオトはぐいと腕で目を拭つた。

そして、次に顔を見せた時には、花咲くように笑つていた。

「ツミの言いたいこと、わかったよ。今は、ツミの言つ通り、ツミの妹、でいてあげる

彼女はぐるりと身を回す。

わざかな風。紅葉と共に舞う少女。

「でも、これからあたしは、ツミがあたしにも恋するように頑張る。だって、あたしはツミのことが、恋人として好きなんだから

そう、と短く答える。ひかりが苦く笑うと、あちひは屈託なく笑つた。

「帰る。歌いながら

「えっと、『ちいさい秋みつけた』？」

「そ、ツミ三番ね」

日の沈んだ、星の瞬きはじめる空の下で、僕らは声を合わせ歌いながら帰った。

櫨の葉朱くて入日色。

\*\*

キズオトは穢れを知らない。

穢れても、それを穢れと思わない。穢れの存在を知らない彼女は‘無垢’であり、無垢な彼女と共に在る新しき風が彼女を浄め続ける。

一切の穢れを寄せ付けない彼女だからこそ、血風吹く戦場にあって無類の強さを持つ。

僕は、キズオトのそんなどころが好きだ。時には、その身体を欲しいとさえ思う。

けれど、僕が欲望のままに彼女を抱けば、彼女は穢れてしまうだろ。穢れを知らない彼女といえど、この穢れを祓つことはできないと僕は思う。

僕は彼女に透明であつて欲しい。蒼天と大地を巡り続ける、色のない風のように。

だから、僕は彼女の兄であろうと思つ。

### 3・2 「風神楽の巫女」（後書き）

キズオトの七宝は翡翠です。カワセミと同じ名前を持つ石は彼女にふさわしいと思います。

第三幕はキズオト中心のヒピソードとしたかったのですが、書いた立場としては不完全な出来だったと思います。なかなか難しいです。もっと彼女の天真爛漫とか出せれば良かったのですが。

解説：今回キズオトが呼んだ『ケバタケ』と言つ名前は妖怪、というか埼玉県のある地方に伝わる超常現象の名称です。キズオトは自分の力を妖怪とかそんな名称に喩える癖があります。  
まあ、この名前も受け売りです。CROSSNET原作のアニメ『AYAKASHI』を見ていて思いつきました。勿論、由来は調べなおしましたけどね。

## 闇幕「忘風」

感覚は虚<sup>うつろ</sup>。そして意識は断片的。

両手首に縄が食い込む／ 露出した肌に浮かぶ汗／ 渴いて、  
声のない喉／ ぬめりを取ることのできない、両脚の間

生暖かい、湿った闇の中でのボクは犯され続けている。

閉じこめられて、両手を繋がれ、縛られ、身動きできないまま。  
もう、何日がこうして過ぎたのだろうか。

始まりはいつも同じ。

ネガイが小さな蠅燭を持つてきて、その小さな光の中でサキがボクを犯す。

サキは田<sup>た</sup>が不自由なのだから光など意味がない。その光はボクに羞恥を与えるため。彼は、来る口も来る口もボクを凌辱し続ける。徹底的に。

ほら、襖が開いたよ。

ボクの両脚は彼が潜り込むことを当然のこととして受け入れ、疲れ切った心と裏腹に、身体は股の間から与えられる快楽に反応していく。

そして、身体の快樂は心を蝕んでいく。

ほら、意識が薄れていいく。

\*

夢。これは夢。

深い水底に見える景色のよう、手の届かない現実味の薄い景色。ボクは猫。小さな、四つ足で歩くありふれた猫。ひげの先からしつぽの末端まで、昔のボクの身体と何一つ同じだ。

学校。左手に校舎。足下から視界の彼方までグラウンドが広がり、少し離れた場所に秋桜や菊の咲き誇る花壇がある。

誰もいない。ここにいるのは、ボクと、制服を着た一人の女の子。

ねえ、なにしてるの？

いやお、と耳に聞こえる。人の言葉は口にできない。でも、彼女の注意を引くには充分だった。

「あれ？ 猫だ。どこからきたの？」

彼女はしゃがんでボクを呼ぶ。ボクはそれに応え彼女の足下に寄る。

「触らせてくれるの？」

わあ、ふわふわだねキミ。あたし、

相川・千風。キミは？」

チヨだよ。

あははと彼女は明るく笑う。

「返事したあ、かわいい。誰かに飼われてるんだね」

うん、昔ね。

「ちよつと話聞いてくれるかな？」 おいで

手招かれるまま、ボクは彼女の腕に抱き上げられる。やわらかい身体がボクを包んだ。

「『不意に駆け抜けた風。お前は私を何処に連れて行ってくれるのだ?』

誰の物か知らない詩。いつ聞いたかも、わからないの。

あたしね、子供の頃の思い出がないの。今はそんなの何でもなくて、ちゃんと友達もいるんだけど、ときどき思うの、あたしはここにいいといいんだろうかつて。時々、自分が本当はみんなと一緒にちゃいけない存在のような気がしてきて、不安になる。

今はね、風を待っていたの。どうしようもなく不安になつたとき風を浴びると、あたしには風が何か教えてくれるように感じるから」

見て、と千風はグラウンドの一点を指をした。

風が動く。枯れ葉が集まり……

「 お願い」

彼女の咳きに応え、集められた枯れ葉が塵となる。

「すゞいでしょう？ あたしが考えると風が吹くの。吹くだけじゃなく、あんなこともできるの。

でも、風があたしの考えていることをわかつても、あたしは風の考えていることがわからない。昔はわかつていた気がするの。今ある思いの出の、一番昔より更に昔

「あたしは、いま間違つた物語の中じてゐる『かぜ』がする」

空色の瞳は、じつじよつもなく深い『惑い』を浮かべていた。

キズオト。

思いもせぬ口をつけた名前は、やつぱり猫の鳴き声としか空氣を震わさせなかつた。

土をかむ音がして、新たな人間が現れた。

「相川……授業はじまってるよ。何かあつたの？」

黒い髪に青みがかつた黒い瞳の男の子。気遣わしげな優しい目は、ボクの『ご主人様に似ている、そう直感的に思つた。

「あ、うん……少し風が浴びたかったの。ありがとう、透。迎えに来てくれて」

透は少し困ったように笑つて、それを千風の感謝への返答とした。そして二人は肩を並べて行つてしまつ。ボクは、彼女たちにとつてはただの迷い猫に過ぎない。

消える二つの背中と共に、夢が覚めた。

\*

サキの寝物語は、まだ天戸の宅<sup>あまどのやね</sup>が廃墟になるところまで進んでいない。なぜ『ご主人様をはじめとした四人の住人』が姿を消してしまつたのか。そしてどこへ行つてしまつたのか。ボクには知るよしもない。

でも、夢<sup>ゆめ</sup>から去る人間は現<sup>げんじつ</sup>に行くしかないとと思う。

キズオトは、昔を忘れて普通の高校生として生きている。  
そんな夢を見た。

## 間幕 「忘風」（後書き）

現実ではないもう一つの世界、『my moon』の舞台であるこの世界を、夢、と書き、まぼろし、としたことに深い意味はなかつたりします。しかし、そうしたことで今回のよつな話もできるんだなあ、と一人感心しました。

そんなわけで、束縛プレイで調教中のチヨでした。次の間幕もこのままの気がします。

次はササヤキさんのヒンズーです。これも一話ですね。

#### 4・1 「白世界に消える一丘」

乳白色の全体に赤い一点を持つ果実。

それは常に一つ揃つて生り、特に乳飲み子にその恵をもたらす。皮の中は脂肪。握る感触はあたたかく、やわらかく、触れた者に包み込むような安心感を与える。

「ふふ、何を緊張しているの？ それとも焦らしているのかしら？」

僕を誘う艶っぽい女性の声。低くも高くもないその声は、密のよう心地よく耳朵をくすぐり脳に染み入つてくれる。

「ああ、早く。さもないと、ここで一人とも凍えてしまつわよ。

それとも、やつぱりここは私に、年上の女に先導してもらいたいのかしら？」

ためらいを捨て、僕は目の前の乳首を口に含んだ。突起して下で押しても引っ込まない乳首を何度も舐め、また同時にもう一方の突起にも手を掛け、優しさを込めて揉む。

甘い。

馥郁たる香り、糖のような味。意識せず貪るように吸いつてしまつ。すると乳房の主の呻く声が聞こえた。

慈しむように頭を撫でられる。

「本当に可愛らしいわよ、シミ。私のこと、お姉さんにみたいに、お母さんみたいに思つてたんでしょう？ いいわよ、いっぱい甘えて。可愛いあなたのしたいことなら、何でもさせてあげちゃうのだから」

細く冷たい手が耳たぶをくすぐる。その富能に、僕の理性が埋められていぐを感じた。

「今年は私じゃなくて、ツリを連れて行くですってー?」

憤慨したアカの声が今に響く。暖かな囲炉裏端から発せられたその声は、冬の寒氣のしみこんだ壁に当たつて消えた。

「なんで? シミは私みたいに火も使えないし、キズオトみたいに寒風も退けられないのよ? そうよ、キズオト、あんたが行きなさい」

「えー、寒いのやだ」

即答だった。

いきり立つたアカが床を鳴らして立ち上がる。しかし

「う、痛!」

「ほり……言わんこっちゃない

あきれ顔のササヤキさん。

アカは一・二日前家の前に張つた氷に滑つて足首を痛めていた。火を性とする彼女は、それでなくとも寒さのせいか冬になつてからずっと調子を悪くしていて、言動に切れがなかつた。

何の話しをしているのかと云つと、ササヤキさんが天戸の宅の南西にある閻山に昇らなくてはならないので、その付き添いを誰がするのかというものである。

閻山には白雪綿なる真冬の間だけ実を結ぶ木綿が生えていた。い。つまり服を作るために必要なのだ。

僕らの着ている服はすべてササヤキさんが作ったものなのだが、この服にはそれぞれ特殊な呪いが掛けられている。例えばアカの朱

い狩衣は炎に焼けず熱を遮断する。キズオトの唐草の袴には、彼女が必要以上に力行使しないための制御の呪いが掛けられている。力を持つ服には、それなりに特別な材料がいる。その一つが白雪綿であり、この寒風吹き荒ぶ真冬に雪山登山をする必要さえあるのだ。しかしアカは足を捻挫しており、キズオトは同行を拒否している。そう言つたわけで、僕がササヤキさんの同行と相成つたわけだが、アカはそれをよしとしなかつた。

うれしいなあ。

もちろん、アカは反対の理由をそのような事とは言つていらない。しかし、彼女の真意がどこにあるのかは、それこそ火を見るより明らかだつた。

「アカ、約束するよ。ササヤキさんと一人になつたからつて、キミを裏切るようなことはしないって」

「そ、そんな心配してんじやない！」

ほら、顔が朱くなつた。

ササヤキさんが言つ。

「アカ、私を信用して頂戴。いままでも、アカのものを壊したことも盗つたこともなかつたでしょ？ ツツモ、アカにちゃんと返すから」

嘘、とアカの珊瑚色の目が三角になる。

「ササヤキ、私のものを盗つたことないって、本当かしら？ 私見たのよね。この前の明け方、私が取つておいたリンゴ酒、あんたがこつそり飲んでいたの」

「だ、だつてあの日は寒くて！ ちょっとお酒が飲みたいなつて

」

「言い訳しないつ！」

アカはお酒が好きだ。甘いもの辛いもの、軽いものきついもの、

気分に合わせて色々飲むので、この家のそこそこにはアカのお酒が置いてある。しかし、自分以外の人間が無断でそれに手を付けることを彼女は絶対に許さない。

「あら、アカ。おのお酒はササヤキさんも作る時に手伝つていましたわね？ でしたら、あなたがあれを独占する謂われはありますよ。」

サキ登場。

これは長くなるな。

僕は焙じ茶を啜り長期戦に備えた。

\*

結果的にアカの意見は棄却され、僕はササヤキさんと共に、かんじき 檻と蓑笠という少々心許ない装備で闇山を登りはじめた。しかしさすがと言つべきか、ササヤキさんの用意した蓑笠はしつかり寒さを防いでくれた。

だが、そうとわかると代わりに、別の一つの不安が僕の頭に生じた。

- 一、空が俄にかき曇り雪がちらほら舞い始めたこと。
- 二、せつから妙にササヤキさんの口数が少ないこと。

周りが薄暗かつたのは雲のせいではない。もともと、闇山は夏に来ても冬に来ても薄暗い場所だ。くらやま 闇山、といつぞのせいなのだろうか。ここでは夕闇はすでに夜闇となり、夜闇など深淵である。そこに雪が舞う。すると風景は一変する。一点の穢れのない雪花

が、白く妖しげな光を放つて風に舞い始めるのだ。

こういったことは夏の終わりに皆で蛍を見に来た時もあった。夜になれば一寸先も見えなくなる闇の中、蒼い金剛石の光を放ち飛び回る蛍が無数に飛び交っていた。それは、僕にとっては、幻想的、の一言に及ぶきる光景であった。

ただ、このような日の前の雪景色の美しさに感嘆し、ササヤキさんに同意を求めて返事がないのだ。すこし様子が変だと思つたと、彼女の背中が止まつた。間近により、何事かと問う。

返ってきたのは言葉による答えではなく、接吻だった。

「サ、ササヤキさん！　なにを　」指で口を封じられる。

笠で半分が隠れた彼女の顔、唇が紅玉のよくなつやを放つていた。

「ツミ。愛くるしい私の坊や。少し待つててくれるかしら。野暮な邪魔者達を片付けてあげるから」

突然のことに首をかしげつつ、ふと周りを見ると僕らは狼に似た白い異形に囲まれていた。

「ササヤキさん、これ　」「ふふ、まかせてくれるわね？」

とりあえず彼女の言つことを聞き入れ一步退く。あめのといたち天乃常立はいつも抜けるように構えておく。

彼女は蓑笠を身から剥ぐ。青い髪、雪華文様の蒼い着物が白い吹雪景色にうかびあがる。

『地から天へ、そびえよ氷の柱』

傍にいる僕でさえ聞き落としてしまいそうな微かな声。

何体かの異形を氷のとげが下から貫いた。

死んだ異形は勿論、残存二十の異形も何があつたかわかつていな  
いようだつた。不意を突かれ、唸ることさえやめてしまつた異形に、  
次の攻撃が行われる。

### 『氷雪、其は風に舞う銀の剣』

異形達は何も聞こえていない。本来なら、彼らはこひらの詠唱を  
耳にして対処するように動くこともある。少なくとも、それを合図  
に回避運動くらいはする。だが、今の彼らはそれはできない。何故  
なら、これが、囁き、だからだ。ササヤキさんは、術の詠唱を空気  
の振動とすることなく、届けるべき神靈の類だけに送ることができ  
るのだ。

降り注ぐ銀の剣に六体が倒される。見事な物だが、同時に一つ思  
う。おかしい、と。

### 『思い知れ、白き女神の拳は岩をも碎く』

白い輝きを放ち流星の如く降り注いだ大粒の電に、七匹の異形が  
挽肉の塊と化す。

むじい。

普段、彼女は後衛担当で敵と交戦しない。しかし、戦う時の彼女  
はそれこそ、囁き、の能力で一瞬にして戦闘を終わらせる。だが、  
今彼女はわざと敵を少しずつ倒して戦いを長引かせている。

さらに気がかりなことができる。彼女は水だけではなく、火や  
光の術も使うことができるのだが、これまで避けるように氷の術だ  
けは使わなかつた。  
何か変なのだ。

『非情なる裁き。凍れ、そして碎ける』

ようやく動き出した七体の異形が、身を躍らせたその形のまま七つの氷の像となつた。そして、風が吹くと像は粉みじんとなり雪原に埋もれた。

己の所業を満足しつゝ、残忍な笑顔で見渡す彼女。背筋の凍てつくものを感じつつ、しかし僕は彼女に劳りを述べる。

藍色の瞳に冷たい光を宿した彼女は、僕に奇妙な質問をした。

「ねえ、ツミ。私は誰だと思う？」

「誰つて……ササヤキさんじゃないですか」

そう言つた途端、弾かれたよつに笑い出した彼女。よつよつ激しくなりだした吹雪の中、その声は高らかに響き渡る。

「そう、無理もないわね。はじめまして、ツミ。私はナゲキ。

ササヤキの鏡像にして、主である女よ」

鏡像？ 主？ 何を言つてゐるのだろう？

「私達は水の使い手、流れる水、冷たい氷、見えない水蒸氣。私達は本来そのすべてを使える。

水は鏡になる、水鏡に映る一人の私。それがナゲキとササヤキ。でもね、水鏡に映つて現れるのはササヤキの方。本当の‘私’はナゲキ。ササヤキは、私から生まれた下位存在よ」

形容しがたい不安が僕を襲う。

「それじゃあ、今ササヤキさんは何処にいるんですか？」

「もちろん私の中よ。安心しなさい。別に消したりしないから。だって、ササヤキがいなければ、誰が天戸の宅の家事をやるの？ 私は嫌よ、そんなこと」

そこまで言い終えた彼女は、ついと天を見やり宙に手をかざして言つ。

「ちよつと吹雪いてきたわね。どこかに隠れましょ、う？」

\* \*

彼女は、ナゲキは悪意に満ちた存在だった。

かつて、現から夢（うつ）に来てしまった時、力に目覚めた彼女はササヤキさんを生み出し自らは眠りに就くことを選んだ。退屈（まどろ）だから。ササヤキさんが窮地に陥った時のみ、彼女は表に出て残虐の限りを尽くしてきた。

「ササヤキが表に出ている間、私は完全に眠っているわけじゃないわよ。でもね、私が表に出ている間は、ササヤキは眞（ふか）い眠りに就いている。わかるかしら？ 私は彼女を邪魔（ひき）することができるけれど、私は私の思つままに振る舞えるのよ」

隠れた洞穴は当然寒い。一応、用心して火種を持つて来てはいるが、そう沢山は使えない。だから、ナゲキは人肌で暖めあおうと言つた。

凍える身体にナゲキの蠱惑的な誘い。決してアカとの約束を忘れたわけじゃないが、この状況下でそれを守り通すことはできなかつた。

冷えゆく身体を温めるため、丹念に前戯をしてから交わることにする。はじめは何の趣向もない正常位。ナゲキは僕を熱心に先導しようとするが、僕はこのまま彼女に優位を取られたくはなかつた。微かに湯気を上げている彼女の陰門。脚をひろげ、恥ずかし気もなく露出されたそこからいよいよ彼女の中に入らうとした時、腰より少し高い箇所の皮膚に焼けつくような痛みを覚えた。

ああ、そうだつたね、アカ。

「これは用心深いアカからの戒めの火傷。僕が間違いを犯そつものなら、痛みを発して僕を抑止する火傷だつた。

理性を取り戻した僕は、直ちに着物を直して洞穴の入り口に立つた。

「あら、どこへ行くのかしら？」

そう言うナゲキは、Mの字に脚を開いたままの姿。悩ましげな居住まいに男の部分がいきりたつのを感じるが、意志の力で抑え込む。

「帰りましょう。今宵はまだ下弦。山を下りるまでの間、結界を張る力は充分ありますから」

「嫌だといつたら？」

こちらに向き直った彼女は、これ見よがしに豊満な乳房を見せつけてくる。その感触、におい、味が記憶に甦る。

しかし

「引きずつても帰ります」僕はきつぱりと答えることができた。すると彼女はやれやれと首を振り、着物を整えながら立ち上がつた。

「そう。ま、初めてあつたばかりだものね。そういう、あなたの真面目なところが好きよ。それでこそ、可愛がり甲斐というものがあるわ」

背筋にぞくりと冷たいものを感じつつ、僕は下弦を隠す吹雪の下へ足を踏み入れた。

#### 4・1 「白世界に消える一歩」（後書き）

ナゲキの登場。今回は少し色氣のある場面が多いです。

説明というのは、書くことより、入れることが難しいと思います。

ツミ達の服の設定はずっと入れたかったのですが、入れてみると長くなるなあ的にそこそこで終わらせました。あと、囁き、もそうですね。

というか、今回はツミ君が好き勝手に話してくれて、文章のつながりが滅茶苦茶です。「めんなさい。後書きもそういうですね。

#### 4・2 「戦跡に響く歌」

雪山から帰った後、ナゲキは誰とも言葉を交わすことなく早々に床に入った。夕食はネガイさんが作った。

その次の日、ササヤキさんは物静かに朝食を作りそして片付けた後、また部屋にこもってしまった。僕は、自分から彼女の部屋を訪ねることにする。

彼女の部屋はやや広い。反物の類は別の場所にあるのだが、ここには織機が置いてあるのだ。色とりどりの湯野や扇など、趣を持つて配置された風雅な部屋の中、彼女はかたんかこんと静かに機織りをしていた。

部屋に入つて無言で示された座布団の上に座つても、しばらくは会話のない時が続いた。彼女は機織りを続け、こちらに視線もよこさない。僕の方も、来てみたものの何を話したいのやら、会話の切掛けを掴めずに口を開けないでいた。

フトフトと雪の降る日だった。しそ 閑かだった。

長い静寂の後、ついに彼女が口を開いた。

「ナゲキに会つたのね？」

「はい」

彼女はこちらに向き直る。物寂しそうな頬笑みを伴つて。

「一年ぶりよ。彼女はね、冬になると一度は出てくるの」  
だが、昨日のナゲキは冬だから出てきたのではないだろう。ナゲ

キは

「昨日のことはね、憶えて、いるわけじゃないけど、知つて  
はいるわ」

ナゲキは僕に興味を持つて、そのために現れた。

「夢の中であらましを聞いたの。シミ……きっとあなたは気分を  
悪くしてしまつたでしちうね」

「……いいえ、悪いのはササヤキさんではありますんから」「

悪いのはナゲキだ。それだけは言い切ることができる。

ありがとう、と彼女。だが、その目はこちらを見てはいない。

一つ、大きく息を吸い、ササヤキさんは話し始めた

「私はね、ナゲキの仮面なの。仮面がその人格を演じている間、  
その下の顔は世界を見ている。けれど、仮面は、外されてしまつた  
ら何も見ることができなくなつてしまつ。仮面は、物、ササヤキ  
は道具なの。

私は持ち主であるナゲキに逆らえない。ナゲキは好きな時に私を  
外してその顔を顯す。今、こうしてシミと話している間もね」

もしそうなつたら逃げてね、と告げられた。

彼女はあまりに痛ましい微笑でこちらに向き合つてゐる。僕は、  
そんな彼女に堪えきれず、彼女の姿を視界の外にやつてしまつた。  
しばし会話が途切れ、それからまつすぐな問いがあつた。

「シミ、私のこと、好き?」

問い合わせし、心底の想いを瞳に込めて彼女の目を見た。

「ササヤキさんのこととは、とても頼れる人だと思います。初めて  
あつた時から好きでした。でも、ナゲキさんは」

「シミ」それは鞭でびしゃりと打つような、咎めの響がある言い  
方だつた。

一つ息を吸い、ササヤキさんはやわらかな口調で言つた。

「ナゲキは私なのよ。むしろ、<sup>ササヤキ</sup>私こそ私の一部。ナゲキを否定して、ササヤキを肯定することはできない」

まるで諭すように。だが、僕はそれを理不尽だと判断する。

「そんなこと……。では、ササヤキさんは何だと言つんです？ ササヤキさんだって、ちゃんとした一人の人間でしょう！？」

ふ、と哀しげな失笑。落涙<sup>こ</sup>そないが、僕は彼女の涙を目にした気がした。

言つてはいけないことを言つてしまつた。

そう氣付くや、僕の思考は白くなり始め、やがて僕は何も考えられなくなつた。

からり、と固まつた場を壊すように襖障子が開かれた。

「お二方、突然で申し訳ありませんが戦支度をお願い致しますわ。八街川の向こう側に、門、が開かれます」

\*

その夜、僕はアカと愛の讃みをしていた。

昼間の戦いは実にあつさりと終わつた。ナゲキが出てきたのだ。ナゲキは力ではキズオトに及ばないものの、頭を使つた効率の良い戦いをすることで、並はずれた戦闘力と残虐性を見せつけてくれた。

そして、ネガイさんが用意した夕食を食べた後はさつと部屋に入つてしまつた。おそらく今はこの壁の向こうで寝ているのだろう。

そんなことをあたまの片隅で考えつつ、僕はアカの中に入った。

部屋全体に防音の結界を張つてある。僕らの声は外には漏れない。

交わりの中、アカは炎そのものになると僕は思つ。そして、彼女の膣内はまるで炉のようである。

彼女の中にはいると、焼けつくよつて熱い肉壁が僕を締め付ける。その度に、僕は熔かされて彼女と一つになる。行為の最中、アカと僕は一体の熱として融和するのだ。

限界まで彼女の炉の中を動き続け、最後に入れるだけ奥に入つて自分の精を解き放つ。‘成長’という概念がない夢まぼろしでは避妊をする必要はない。

彼女の動きが止まり、彼女の生殖器が最大の収縮をする。自分の精液が出了ったのを確認し、荒い息をしながら力を抜きはじめた彼女の中から生殖器を抜き取る。

彼女から一步下がり、一時的に鎮まつた陰茎を意識しつつ、僕はぐつたりと横たわる彼女の肉体を見下ろす。そして、思つ。

一つにはやはりなれない。

いくら言葉で形容しようと、本当に一つになることなどあり得ない。それは空しい事実、しかし、一瞬の合一感は確かにわかるわけで、その魂と魂の一瞬の邂逅こそが性交の愉しみなのかも知れない。まもなくして、アカがその身を起こす。熱情のこもつた珊瑚の双眸。そう、僕らの欲望はまだ満たされてはいない。勃起はじめた陰茎に彼女の手を導くと、彼女は身を屈めてそれを口に含もうとする。

だが、そこで予想外の出来事が起きた。月光を蒼白く透かす明かり障子が開かれたのだ。

障子の向こうには縁側がある。そこに金の半円を背にササヤキさんが、否

「お楽しみの最中、邪魔をせてもうつわよ」  
ナゲキが傲然と立っていた。

彼女は縁側から僕の部屋に入つてくる。半分身を起こした全裸の

アカの前で止まる。

アカを見下して、ナゲキは言つ。

「とんでもなく幼稚な交わりね。子供じゃないんだから、もう少し  
しまともにできないの？」

あまりの発言にあっけにとられてしまった、僕は。  
対するアカはと言うと、闇の中ではっきりわかるほど、顔に朱  
を昇らせて立ち上がった。

「な、なによなによそのいい草！ ナゲキ、いきなり出てきて私  
とツミの時間にけち付けるんじゃないわよ！ 焼くわよ！」  
唾を飛ばして怒鳴り散らすアカ。しかし、ナゲキはそれを聞かず、

無関心そうに視線をそらしてこちらを見た。

科をつくつてナゲキは言つ。

「ねえ、ツミ。こんな小娘より私としない？ 昨日の続きよ。  
たっぷり愉しませてあげられるわよ」

服が脱ぎ捨てられる。生ぬるい闇房の空氣に、彼女の素肌のにお  
いがむんと漂いはじめる。

僕はその申し出を断る。

「できません。今夜はアカと過ごすと決めていますから。そして、  
これは次の夜も、その次の夜も、ずっと先までそうです。僕は、ア  
カしか抱かない」

先程とは別の意味の朱みに顔を染めて、アカが顔を背ける。  
ナゲキが一瞬だけ眉を顰める。しかし、次の瞬間には妖艶な笑み  
を見せていた。

「大した物ね。これだけ女から誘っているのに拒むなんて。でも

彼女の表情が哀しみに変わる。思わず、胸が締め付けられるほど  
切ない表情。

「ササヤキもね、あなたが好きなのよ。あなたに抱いて欲しいと  
思っている。時々、特に、月の昇る夜なんかに、あなたを想つて自  
分を慰めているのよ」

ナゲキはもちろん演技で顔を曇らせたのだろうが、その実そこにはつたのは彼女の偽りの表情でもなく、ササヤキさんの表情だった。だからこそ、見ていてこうも胸が痛くなつたのだろう。

その事実に気付いた時、僕の心に一つの感情が生まれた。

「ナゲキさん。それ以上僕の家族を侮辱することは許しませんよ！」

怒り、それが声にこもる。ナゲキの顔が虚を突かれたそれになる。けれど、それで引き下がる彼女ではない。

「初めて見たわ、あなたの怒ったところ。私は、ササヤキを通してではなくて、生の私としてあなたの怒りを見ることができたのよ！」

喜びに、ややうわずつた声のナゲキ。だが、僕は喜ぶどころではない。

「謝つて下さい。ササヤキさんとアカに」

少しの驚愕。しばしの後、彼女からの答えは、

「嫌よ。私は誰にも頭を下げないの。私は、誰よりも貴いのよ」そして彼女は、「囁く」。氷の風が、明かり障子を切り裂いて僕に飛んでくる。

月光の結界、それが彼女の威嚇を退けた。

「なに……？　はじめから、私が攻撃するのを予測してたの……！」

愕然とした色の濃いナゲキの声に、僕は怒号で答える。

「そうだ、ナゲキ、あなたは僕の家族ではない。　月の化身として命じる。眠れ、己が仮面と蔑みしその下で！」

一足でナゲキに肉薄し、月光の照らす縁側まで突き飛ばす。

ナゲキの全身を包んだ月の光が、鎖となつて彼女の四肢に絡まりつく。

「意識が重く…………。ふふ、これで私を封印できると思つてゐるの？」

縁側の氷に滑つて横倒れになるナゲキ。床面から、狂つた光を瞳に宿して彼女は僕を見た。

「いいわ……今夜はここまでにしましょ。」で、いつか私達は会う。そして今度こそお互いの手を取り合つことになるわ。だって、あなたは希望に諱つ者ではなく、絶望に嘆く者だもの！」

狂気を孕んだ高笑い。甲高い声で肺を空にしてから、彼女は瞼を降ろし眠つた。

数日が、何事もなく過ぎていった。

\*

\*

季節が一巡することを一年と言ひ、その一年の区切つとされる終わりの月齢、最後の晦をとくに大晦日といつ。

僕の性欲は月齢に左右されるので、晦の日はとても穏やかな気持ちでいられる。年越しのこの瞬間、天戸の宅の皆は祭りのような賑やかな祝いはしないので、僕はひとり静かな雪の原を歩いていた。ある程度のところまで来て、一つの事柄が僕の目の前に現れた。一、足下にこの間の名残である骸が転がっていること。  
二、目の前にササヤキさんが真っ白な振袖姿で立っていること。

「ササヤキさん……、どうしたんですか、こんな所で

僕がそっと呼びかけるとササヤキさんが振り返った。彼女の顔にあるのは悲しみ。けれど、同時に彼女は微笑んでいた。

「「んばんは、ツミ。あなたこれ、ここで何をしているの?」

「あ……、いえ、なんとなく……」

雪は白い綾帳のように降る。僕はササヤキさんまでぐに触れられる近さに歩み寄つた。

僕らの立ち位置は、骸散らばる戦跡の中心だつた。

「沢山、殺めてしまつたのね……」

ササヤキさんの言葉は、涙のようになに雪の中に落ちる。

「あればナゲキのやつたことです。ササヤキさんがやつたことであります」

僕の言葉は、彼女の悲しい微笑を更に濃くしてしまつ。

僕は、自分がとても愚かで無力に感じられた。

彼女のために何をすることができるのだろう。少なくとも、今言ったことも、ナゲキを眠らせたことも、ササヤキさんのためになつてない。静寂に凍つてついく白い夜空の下、僕は口がきけなくなつたように押し黙つてしまつ。

「ツミ、私のこと、好き?」

頷いて答える。すると、見上げていた彼女の顔がゆづくつと下がつてきた。

唇が重なる。僕は、手を伸ばして彼女の頬を包み舌を伸ばして彼女の口内に入ろうとした。しかし、それはやんわりと拒まれた。

「ツミ、約束して」

口づけをやめた彼女が、表情を殺した顔で言った。

「私を抱いては駄目。あなたはアカを選んだのだから。私はアカ

に對して誠実でいたい。わかってくれるわよね?」

……それは、僕の気持ちがどうと言つことに関係なく

「女と女の約束だから」彼女は断言した。

躊躇いつつも、僕はそれを承諾した。すると、彼女は「ほまれるよ

うな笑みを見せ、それから後ろを向いた。

『新しき年の始めの初雪の 今日降る雪のこや重け古事記』

囁かれた歌は、空の高みから真っ白な六花を招いてた。降りしきる雪は、戦跡の屍を弔うように積もっていく。

「あけましておめでとう。ササヤキとナゲキから、これからもよろしくね」

「 はい、いらっしゃ。ササヤキさん、ナゲキさん」

#### 4・2 「戦跡に響く歌」（後書き）

少し詰め込みすぎたかな、と思います。やりたいことはやれましたけど、予告に逆らつて三話にすれば良かつたかもしません。

ササヤキさんの七宝は瑠璃です。選んだのはただ単に、青いから、が理由。しかし、数あるパワーストーンでも屈指の力を持つらしいところは、術力の強いササヤキさんにあつていると思うのです。

最後の歌は万葉集にある大伴家持の歌らしいです。年始にあつて今年も良いことがありますように、みたいなことを願う歌です。年賀状にどうぞ。

## 闇幕 「炎恨」

身体を貫く熱い痛みに意識を奪われ、ボクはまた夢を見る。

猫の身体で降り立つた場所は、薄暗い路地裏。

ボクの視界の中、路地が交差する点を右から左へ炎の風が吹き抜けた。

続く絶叫。猫の鋭い嗅覚が、肉のただれるにおいを感受する。

「我らが月の御方……、力になれず、申し訳ありません……」

事切れる間際の呟き。

月陰の路地から顔を覗かせると、月影の中赫い長い髪の女人人が燃えさしとなつた人間を見下ろしていた。

「また一つ、あなたの手足をもいでやつたわよ、ツハリ……」

本当なら嘲りを込めて言つべきその言葉を、まるでことおしむようにはぐく女人の人。

彼女は、アカだ。話しに聞くより歳をとつてこむよつて見える。凛とした、大人の女性っぽい雰囲気がある。

と、ボクがアカを見る反対の方角、路地の交差点の右から、別の黒く長い髪を三つ編みにした女人人が歩いてきた。

「紅鳥、片付いたよつじやな」

「オウ、と呼ばれたアカは、驚いたよつじびくつと反応してその女人の方に振り向いた。

三つ編みの女人人はボクの前で立ち止まり、肩をすくめて言つ。「何じやその田つきは。 もしゃ、考え事をしようとしていた

といひを邪魔してしまつたのかや？」

険のある田つきでしばらく女人を見つめた後、アカは気まずそうに田を背けた。

「……何でもないわ、糸鶴<sup>じづる</sup>」

シヅルと呼ばれた三つ編みの人は、軽く唇をすぼめ、そして自らの足元を見た。

「おや、こんな所に猫かいや。可愛いの、お主、こちらへ」招かれるままにシヅルの腕の中へ。彼女の身体は、戦う者らしく少し剛い感じがした。

ほれ、とシヅルはアカに呼びかけた。

「紅鳥、そう難しい顔しとりやんて、少し妾と一緒に猫と和まんかや？ ほれほれ」

そう言つて、シヅルはボクの前足を取つてアカに向かつて振る。アカはそれを興味なさげに一瞥する

彼女の目が煌と金色に光った。

アカはシヅルの腕からボクをひつたくり、肋骨を圧迫してボクの身体を壁に貼り付けた。

「魔物じやつたか？」一拍おいてシヅルが問う。

「ああ、どうでしょうね。悪意はないみたいだけど、こいつからはあいつのにおいがする」

憎々しげな口調。シヅルはやれやれと言わんばかりに首を振り、

言った。

「つまり、お主と同じにおいじやな？ アカや」

激昂したアカが、ボクを投げ捨て、その動作の延長でシヅルに向

かつて火を投げつけた。

「 また焼かれたいわけ？」

火を避けたシヅルが答えた。

「いや、妾が悪かった。許しておくれりや、紅鳥」

それを聞き、満足そうに鼻を鳴らしてから、アカはボクの傍に立つ。ボクは叩き付けられた衝撃で朦朧としていた。

彼女の瞳は今はもう金色ではない。珊瑚色の双眸をぼんやりと見上げ、ボクは動物的な感で悟った。

この人は、「ご主人様を恨んでいる。  
そして、愛している。

「私はあいつを許さない。私はあいつの世界を許さない。私はあいつの思いを許さない。私はあいつの痕跡すらも許さない」

ふと、思う。ボクは、今どこかの世界にいる「ご主人様の、何なのだろう、と。

「見てなさい。私は、世界を変えさせやしないから」

言葉と共に、ボクの小さな身体にめり込むアカの足。全身がバラバラになるような痛みの中、ボクは夢から覚めた。

\*

瞼を上げると、そこにサキの顔があつた。

サキが男の人だと照明する薄い胸板。それが、両手・左足・右足と三本の杭につながれたボクの身体の上に覆い被さっている。

「ねえ、ボクって」主人様のにおい シミのにおいがする？」

ボクからの突然の質問に、サキは眉をつり上げる。  
そして、女人の声で答える。

「そう……かもしませんね。もともとあなたの身体にはシミさんにおいが染みついているでしょうし、そのにおいの消えきらない私があなたを犯していますものね」

その答えに、ボクは安心感に似た感覚を抱く。  
でも、サキはボクとは別のことと思つたらしい。  
「まだまだですわね。もっと頑張りませんと」  
「え、どういっ…………あつ……」

サキはボクを汚したいんだと思う。でも、それはどうしてなのだ  
る？？

目的があるみたいだけど、ボクにはわからない。  
もしかしたら……そつ……、

みんな、『主人様の影を振り払おう』としているのかもしれない



## 闇幕 「炎恨」（後書き）

現に出ると身体の成長がはじまるのですよ。アカも、キズオトも、普通に歳をとるようになります。  
糸鶴についてはそのうち明らかになることでしょう。今は、待つていて下さい。

この後はいよいよ新展開となります。気合を入れて書いていきますので、どうか最後までお聞かれてください。

## 5・1 「常なる一日」

僕、ツミと自称する少年がここに来て、二回目の夏が来ようとしている。

「こと僕が言つのは 天戸の宅 と名の付いた一軒の家のことである。純正の日本家屋であるこの家は、壁は土、柱は木、屋根は萱葺きといった天然仕様。コンクリートなどで作られる無機質な家とは違う、「生物」なこの家は住んでいるだけで管理等に手間かかる。しかし、それにさえ慣れてしまえば住み心地は抜群だ。

この家は、一边の長さが徒步にして一日半という正方形の世界の中心にある。小さな世界だ。僕らはこのような世界を夢と呼んでいる。夢はここ以外にも無数にあるのだが、僕ら人間は原則的に他の夢に行くことはできない。向こうから來ることもない。來るとしたら、それは戦争の始まりである。多くの場合防衛戦となるその戦争で、僕らは来訪者を片端から殺戮し、こちらの夢に埋葬する。彼らの家には返さない、返せない。

夢と夢の戦争は、取りらかが滅ぶことで決着する。僕はこれまで五つの夢の滅亡に立ち会つてきた。殺した人の数は空しいから数えていないが、三桁になるだろう。

このような戦争は、何も考えていなければ人間を殺めているという感覚が薄くなりがちだ。何故なら、夢を越えてこちらに来る人間は、人間の姿と心を一時的に失う ネガイさんはこれを『妖化』と言つ のでそうすると人間はただの化け物だし、化け物を殺しても何の感情も動かされないからだ。

しかし、僕はこういった夢の条理に不満を持つてはいない。まったく無いと言う訳でもないが。

その理由は、偏に僕が夢での生活に満足しているからである。幸福感を抱いているとすら言える。今、僕が送っている生活を守るために、涙もこぼせない戦争でもじく自然に受け入れられてしまう。

それ程までに、現<sup>うつ</sup>での生活は無味乾燥としていた。

というわけで、これより以下は僕が何よりも大切としている生活の一部を、今日一日の僕の過ごし方を通して述べてみようと思つ。

\*

まずは起床。

時間は日<sup>の</sup>出より少し後でよい。炊事担当のササヤキさんとネガイさんはもつと早くから起きている。

縁側とは反対側の襖障子から廊下に出る。この廊下は、僕、アカ、ササヤキさん、キズオト、の四人の部屋の前を通っている。

廊下を挟んで、僕の部屋の向かいには大間がある。中には反物や薬草一式、調理器具やその他時々使うけど外にはおけない物が置いてある。

大間の襖を開こうとすると、背後、僕の部屋の隣の襖が開かれる。中から現れるは渋柿色の衣を着た、僕と同じくらいの背丈の因みに僕の身長は百六十五センチメートルくらい 赫い長髪の女性。彼女こそ、我が愛しのアカである。

「おはよう、アカ。今日も良い天気になりそうだね」

「……そうね。おはよう、ツミ」

憮然とした面持ちで答えるアカ。彼女は寝起きが悪い。いくらこちらが笑つていようと、朝一番から彼女が笑顔でいることは太陽が西から昇るに等しい事態だ。まあ、それはそれで可愛いところであるが。

よしよし。

知らず識らずにやけていた僕を横目に、アカが先に大間を通り

居間に行つてしまつ。

居間に出て、顔を洗うために台所に行く。

台所では二人の女性が朝食の準備をしている。一人は短く青い髪に、目端が少したれた藍色の瞳の、僕より少し背の高いすらつとした全身に振袖をまとう女性。もう一人は、少し長い黒髪を首の後ろで束ねた、灰色の瞳と特徴的な褐色の肌の、黒い割烹着を着た女性。先に言つた人がササヤキさんで、後の人にはネガイさんという。ネガイさんはササヤキさんほど背は高くないが、僕よりちょっと背が高い。

「おはよつゝざこます。ササヤキさん、ネガイさん」

「おはよう、ツミ」やわらかい包容力のある声でササヤキさんが返す。

「お早う御座います、ツミ殿」低めの声のネガイさん。

「ご飯はもうできているからね。アカとツミが準備できたら出してあげるから」

母親のようなササヤキさんの言葉に、はいと僕は答える。台所の隅の水瓶で顔を洗い、次いで居間を通つて廊に向かつ。

廊は物置部屋の前を通る廊下の突き当たりにある。居間から廊下に入つて、右手に物置部屋だ。

廊の管理は僕とアカの仕事だ。田畠の管理を受け持つアカが、肥料類の精製をかねて汲み取りを行う。僕は掃除。嫌いではないが、もちろん好きでもない。

そしてそこから出るや、右手になる物置部屋ではない部屋の襖障子が開かれる。中からは、また新たな女性が一人現れる。

僕の視線くらいにある彼女のうなじ。雪のような白い髪が流れる首筋は、驚くほど白くきめ細やかだ。

「おはよう、サキ。 手を貸そうか？」

「おはよう、サキの双眸。どこか虚ろなその天色の目は、

物体の像を鮮明に捕らえることができず漠然とした光の明暗しか捉えられない。それでも、彼女は自由に動き回ることができるが、今のように「ひこひから」が黙つて立つていれば「気付く」ことができなかつたりする。

「まあ……おはよひじさいます、シミさん。そして、お気遣いありがとうございます。できましたら、そのお優しさを夜の方にも恵んで下せこませ」

小鳥のさえずりのような、澄んだ高い声で、彼女はそのような意味深な提案をする。

「はは……駄目だね」

僕がそう言つて断ると、サキは、もつ、と小さく頬を膨らませつつ同時に笑つた。僕が手を差し出すと、彼女はこの手を強く引いて腕全体に自分の身体を巻き付けた。

これはまずい。

振り払うわけにはいかないが、振り払うべきなのである。何故ならば

「一人とも、お互いすみやかに十歩以上離れなさい。そもそもなれば、まとめて焼くわよ」

居間では独占欲を赫赫と燃え上がらせたアカが待ちうけているからだ。

「おはよう、アカ。今日も朝からけちけちしていらっしゃるのですね」

僕なら恐ろしくて口にできないような挑発を、涼しげに言つてしまつサキ。

「誰もけちけちしてないわよ！ 当然の権利よ！」

「シミさんを独占することがですか？」

「そ……そよー シミは私の物なのっ！」

サキ、ありがとつ。

あつたばかりの頃はなかなか恥ずかしがつていっててくれなかつた言葉を、アカは今大声で叫んでくれた。朝からこれを聞くことができた僕は、胸の中で密かに滂沱した。

サキも妙に楽しそうに僕から離れていく。僕は空いた手を、顔を真つ赤に染めたアカに差し出す。すると、彼女はさらに恥じらいながらこの手を取ろうとする。

だが、それは果たされない。

「ツミ、おはよー、ね、一緒に朝ごはん食べよ?」

飛び出してきたのは、本日最後の起床者となつたキズオトである。外見は十歳ほどとこの家の住人では一番若く、生きている時間はネガイさんとサキに次いで長く、六十年とか七十年と言つ。

蜂蜜色の長い髪、身にまとつた大きな袴。空色の瞳をくりくりと輝かせているところなど見ていると、彼女が六十年以上生きているとは俄に信じがたい。

そう思つてゐる間にもキズオトはぐいぐいと僕の手を引っ張る。アカの視線が背中を痛く突き刺している。

「キ、キズオト。引っ張らないで。そのね、僕はいつもどおりアカと

「だめ、ツミはあたしと食べるのー!」

こちらの言い分は一切無視。最後まで言わせても貰えない。

そして、この状況をアカが黙つてみているわけがなかつた。

「キズオト、悪ふざけは終わりにしてツミをこひらに寄越しなさい

い

声を冷たくして勧告するアカ。キズオトはそれに舌を出して応じた。

「べえー、だ。いいじやん、ちょっとくらこ貸してくれたつて

「……この!」

## 爆発寸前のアカ。

みんな、そりいも揃つてどうして朝食前からそんなに元気なんだろう。

自分の空腹を感じ始めたその時、ササヤキさんとネガイさんが朝食を載せた膳を運んできた。

「はいはい、みんな。三秒以内に座らないと朝ご飯はないと思いいなさいね」

ササヤキさんの警告に、みんながいそいそと団炉裏を中心に車座になつて座る。

僕は結局キズオトを右腕に付けたまま座つた。左側に、不機嫌顔のアカが座る。

献立は、麦飯・油揚げのみそ汁・山菜の漬け物・川魚の天ぷら。まだ春の終わりで山野によく食べ物が出てきたばかりだとうにこれだけの献立ができるのも、日々みんなで頑張っているからだ。そう思いつつ、いただきますと箸を取る。

食事を終えると、僕らはそれぞれの仕事に就くために準備を始める。起きた時に着ていた白い衣を脱ぎ、農作業用の七竈の文様が染め抜きされた枯葉色の作務衣を着る。

普段はこのようにアカと共に畠仕事を行うことにしている。はじめこの家に来た時は何でもできるようにあれこれ教わったけれど、今は誰かに呼ばれない限りアカと同じ仕事をする。

玄関でアカを待つ。しばしして、赤錆色の狩衣を着たアカが出てきた。狩衣はあまり畠仕事には向いていない気がするが、彼女はいつも狩衣かそれに似たを着ている。

本日の作業は種まき、苗植え、それと灌漑整備。

種まきと苗植はほとんど終わっている。畠の乱れや水路の決壊を直すのが主となる。

農作業の極意は歩くことにある。

これはまったく僕個人の考え。しかし、田畠のすみずみを歩いて回り作業するのだから、おのずとこの様になるのではないだろうか。鋤や鍬を荷車に積んで、僕が運ぶ。アカがあちこちを見て、指さして僕に指示をする。

植える、直す、雑草を抜く。

加えて、僕らは農作に術を使う。土に適度な温度を与えたり、感想から退ける呪具をそこここに設置するのだ。

それらはサキやササヤキさんが作ってくれる時もあるが、たいていはアカが作る。しかし、アカが作る物はどこか雑なので、それを見付けて直すのも僕の仕事。

まあ、昼間の仕事はこんな物だ。当然の事ながら、季節ごとに仕事の内容は変わる。

それにしても、毎日太陽が沈むまで仕事をしているのに、どうしてこんなに仕事があるのだろう。

帰宅する。夕食の日玉料理は兎の香味野菜焼きだった。朝のよくなおふざけを少しあつた後、キズオトの語る兎を追いつめるという少々笑いづらい話を聞きながら食べる。

夕食の後は入浴。台所の奥、家の外に突き出た年季の入った浴槽を使う。水は昼間の内にササヤキさんが運んでくる。沸かすのはアカ。入浴順はくじ引きで、今日は僕は三番目。ほどよくぬるくなつてくるはずだが、異様に熱い。いつもの事だけ。これもアカの気持ちだと思いつつ、さっさと上がる。残り湯は洗濯に使うか、翌日ササヤキさんが捨ててくる。日照りの時は田に持つて行って撒くこともある。

就寝までの一時、みんなで団欒する。今日はアカの新しいお酒が完成したのでそれを味見する。度数の高めな米酒だった。僕は今年ようやく二十歳なはずなので飲酒法に引っかかるない。とは言つても身体は十七歳のままだ。

キズオトなど見た目で言つ限り完全に飲酒法を無視している。しかし、さすが六十年以上生きたという彼女、この家ではネガイさんに次いで一番目に強い。因みにアカは三番、その下に、サキ、僕と続いて、ササヤキさんが一番弱いと言つことになつてゐる。

そして就寝。新しく満ち始めた四日月を眺めつつ、眠る前に物置から発掘した『桐一葉』を読む。何度読んでも内容が掴めない。

これが僕の一日、最後にアカが来ることが不定期であるのだが、まあこれは改めて述べる必要もないだろう。

## 5・1 「常なる一皿」（後書き）

ちょっと新展開の前の準備運動として人物紹介をし直してみました。

あと、ツミ君の一冊を書いてみたかったので。  
アカの畑にも名前があるのですが、由来が思い出せなくなつたので  
秘密にしておくことにしました。

第五幕は五話ぐらゐになると思ひます。

少し緊張します。ちゃんとできるかなあ、と。  
応援お願いします。

## 5・2 「霧立つ場所での邂逅」

霧は神秘そのものであると思つ。

否、神秘なのは霧自体ではなく、霧に包まれた、もの、であるかもしれない。それらは霧に包まれることで同時に何らかの神秘性をおびるようになる、そう僕は思うのだ。

ぼんやりと霞む世界の中、輪郭を妖しくしたものは得体の知れない何かに変異し、僕らには計り知れない何かをする。

霧の向こうから、未知なる物がやってくる。

吉兆か、凶兆か。

僕は拒むことを知らなかつた。

\*

夢には異形と呼ばれる存在がいる。

それは他の夢から侵入してきて変質した（妖化した）人間とは違う。戦争の際に討ちもらした人間が変質をさらに強くして異形化することもあるが、多くの異形は人間でもその他の生き物でもない。現に比べて不完全な世界である夢の、その不完全な部分から滲み出でくる汚濁のようなもの、それが異形であるらしい。ネガイさんが言つていた。

異形は放置しておくと周囲の環境、つまり草木や水・土を汚染し、また動物たちを無為に殺戮する。よつて、見付けしだい排除するのがよい。

多くの場合、それらはキズオトによつて為される。しかし、僕らもキズオトに任せきることはなく、見付けたら適時排除することをしている。

そんな訳で、今、僕は一体の異形を追つて北の方角に走り続けている。

厄介な相手だった。足が速いのでこちらも追いかけるので精一杯。月が出ていれば月光を固着化して弓矢を作りそれで討つこともできるのだが、昼間では弓矢を出しても大した性能を出せない。

北へ北へと走るうちに、だんだん見通しが悪くなってきた。自分が霧に包まれはじめたことに気付く。

どうやら、まずい場所に近づいているみたいだ。

まもなくして八街川のほとりに着く。この向こうは 活<sup>いいく</sup>杖<sup>じ</sup>の霧処と呼ばれる場所になる。

天戸<sup>あまと</sup>の宅の西を流れる八街川は、北東で向きを変え、家の北に回り込むように流れる。川は向きを変える時分岐して、その中州は常に深い霧を蓄えているのだ。

川を挟んだ中州の向こうは全く眺めがきかない。

ネガイさんの説明では、この霧立ち籠める場所では常に違う夢への扉が開いたままの状態らしい。そのため異形や妖化した人間がうようよしているとか。さらに、キズオトの話では、この中の様子は意識して風で探らないとわからないらしい。

とにかく物騒な場所である。

ずいぶん家から離れてしまつたと気付いた。そんなに無理して異形を追う必要もないだろうと思い、僕は来た道を引き返しはじめた。

一・二歩歩いた時、背後から救命を求める叫びが聞こえた。

高い声、女の子の声っぽいが、直感的に男の子の物だと判断。

しかし、何故？

異形や妖化した人間の中にも声を出すものはいる。しかし、こち

らを欺くように発声能力を使うものはいなかつた。あれが欺くものではないとしたら、正常な人間が一人霧の向こうにいることになる。如何にすべきだらうか。

少しの逡巡の後、僕は心の思うままに動くことにした。

腰に差した一振りの刀、あめのといたち天乃常立あめのといたちがある限り何とかなるだろう。

活札の霧処に入ったのはこれで三度目。

前の二度はササヤキさんの付き添いだつた。僕らの医者にもなつてくれるササヤキさんが使う薬の原料となるまほんじ十力の金剛石こんごうせきを探集しに来た時。おおよそ、この夢むげの中で危険と言われる場所はササヤキさんと一緒に行つている気がする。

それにしても霧が深い。

足下も悪い。ちゃんと戦えるか不安だ。

視覚に頼るのは止め、それ以外の感覚で要救助者とそれを狙う異形を捜す。

聞こえた。

逃げ惑う人間の足音、それを追う人間のものではない足音。

ぬかるみを蹴つて走り出す。はきなれた‘運動靴’が泥を跳ね飛ばして身体を前に引つ張つてくれる。

着物を作れるササヤキさんも、靴を作ることはできない。雪駄や下駄は何とか作れるが、それでは僕が慣れないだらうと言つて、ササヤキさんは僕の現うつからもつてきた運動靴に恒久使用の術をかけて、いつまでも運動靴を使えるようにしてくれた。同じように、アカも

スニーカーを履き続いている。

白い紗の向こうへ、小さな人影とそれを追いつ異形の影絵芝居。

「月光よ、ここに！」

昼間、その上太陽も見えない空の下では僕の力など微々たるものだ。しかし、これでも注意を惹き寄せる事はできる。

手裏剣をイメージして異形へと月光を飛ばす。あれにとつては軽石ほどにも感じられないだろうが。

思惑通り、異形がこちらを向く。

距離はこちらにとつて十歩。向こうにとつては未知数。向こうの姿は大分はつきり目視できるが、細部までは見えない。どういった移動器官をもつているのかわからないので、迂闊には突つ込めない。天乃常立を鞘ごと腰から抜いて、胸の高さに構える。

異形が飛びかかって来る。

軌道は直線。しかし、その直線の向かう先は僕の身体の中心より僅かに左にずれている。

かかったな。

ほんの少しだけ光の軌道を曲げ、異形には僕がややずれた位置に立つておられるように見せたのだ。

ちょっと足を右に動かすだけで容易に異形の突進を避けることができた。

そして、身体を右回転させ、すれ違つ異形の背中に居合をたたき込む。

背後から切られた異形は、跳躍の勢いのまま霧の向こうに進みそのまま存在を停止した。

天乃常立を鞘に収める。そして周囲を見回し、ぬかるみに尻もちをついている小さな人影を見付ける。

その人影は、予想の通り十歳くらいの幼い少年。おびえた二つの目がこちらを見上げている。

新入りなのかな？

疑問があつたが、まず彼に話しかけてみることにする。

「大丈夫？ 安心して、ここにはもう君を狙う敵はない。僕は君の味方だ。どこか怪我はあるかい？」

着物の裾に泥が付くが、僕はかまわずしゃがみ込んで彼と田の高さを合わせた。

赤いパークーに、黒いジーパン。<sup>うつ</sup>現なら何処にでもいそうなありふれた服装の少年。

「怪我は足かい？」

「……手」

差し出された右手は、手首が赤く腫れ上がり、また切り裂かれたパークーの肩口から血を流していた。

「これじゃ戦えなくてよ……。逃げるしかなかつたんだ」

戦う？ この子は武器を持つて戦うのだろうか。

確かに、利き手をやられていては武器を持つことはできないだろうが。

しかし、まずは彼との友好関係を気付くことが先決だと判断し、疑問は黙殺した。

「清らなる月光。青き御手。この者が傷を浄めよ」

洗浄と殺菌の術。袖をまくつた彼の腕全体から、水で洗うよう汚れが落ちていく。

懐から包帯を取り出し傷に巻く。

「これでとりあえずは良し。…………えっと…………」

さて、何と切り出したものかな。

「僕の名前はツミ。ここから南西に少し歩いたところにある家に

暮らしてこる」まずは自己紹介。

「君の名前は？」何処から来たの？」なるべくそつと尋ねる。緑玉の双眸が、探るように僕の田をのぞきこむ。その視線は、受け止める。

「俺は、ミリ。俺は……俺のいた場所は……」

ミリ、と彼は名乗り、そして口を開じてしまつ。自らの居場所を答えられない様子に、僕はかつての自分の境遇を思つた。

でも、名前は現のものではないよな。

そう思いつつも、ミリの言葉を待つてみる。しかし、彼は瞳を泳がせて何も言わなくなつた。

まあ、とりあえず敵ではないのだひつじ。

僕は提案する。

「思い出せないんだよね？　いいよ、とりあえず僕と一緒に来て、ミリ。みんなに会わせてあげる」

立ち上がって手を差し出す。だがミリは僕の手を取りずて立ち上がり、その上、僕から三歩ほど距離を取つてこちらを向き合つた。

「俺……、あんたと一緒に行けない……」

まるで謝罪するかのように、ミリは言つ。

「俺は、他の夢から来た。俺は、この夢を滅ぼす者なんだ」

強い口調での告白に込められていたのは 別離。

## 5・2 「霧立つ場所での邂逅」（後書き）

さて、解説。  
活<sup>いく</sup>代<sup>くい</sup>は伊邪那岐<sup>イザナギ</sup>・伊邪那美<sup>イザナミ</sup>と同じくして生まれた神代七代の神様です。別天神の次にすごい神様ですね。それだけこの霧の場所がすごいと私は言いたいのです。

それと、『十力の金剛石』ですが、これは宮沢・賢治先生からちょっと拝借しました。私の宝石知識は大体あの童話から来ています。

### 5・3 「秘かな戯れ」

明かり障子越しの月光。

開かれる襖障子。

やわらかな金の半月。

そつと近づく足音。

「ツ!!。せつかく来てやつたのにそっぽ向いているなんて大した度胸じゃない」

「つ！」

囁く声での咎めは、僕の全身を戦慄させた。

「『』、『めんア力。……え、えっと、よく来てくれたね』<sup>わなな</sup>顔から一切の表情を消したア力。

だめだ、何て言つべきなのかさっぱりわからない。

ア力が膝をついて僕の横に座る。

僕は言葉を作ろうとする努力を放棄し、とりあえず彼女の頬に触れるために手を伸ばしてみる。

クロスカウンターで拳打が来た。

「苛つくわ」

殴られた左目の人下を押さえている僕にそう言い捨て、彼女は自分の部屋に帰ってしまった。

女性は鋭いな。

僕が心を虚ろにして考え方をしていたことを、一目で見破つてしまつたのだから。

サキなら、今の僕を見て何と思つただろ？

構わず僕に絡みついてきただろうか。否、サキにだつて矜持とい

う物はあるだろ？

あのあと、ヨリは頑として僕らの家に来るのを拒んだ。

理由は、自分が他の夢から来た者だからと言ひ。自分がいれば、この夢を危機的な状況に陥れる。ヨリは、僕に自身を殺害するようにも言った。

そんなこと、できるわけないだろ？

確かに、夢と夢が混じり合つていれば、それなりに干渉し合ひ歪んでいく。それはかつてサキから聞いた。

ヨリは言ひ。これは戦争なのだ、と。自分はこの夢にとつて侵入者以外の何者でもないと。

僕には合点がいかなかった。そんなことは、すべて彼の思いこみだと思った。

ヨリの言ひ通りなら、そのうち何らかの異常現象が起るだろ？  
保留、と言ひことで僕は彼を説き伏せ、とりあえず『活札の霧処』から連れ出し、天戸の宅の北に広がる『鹿屋の原』の丘の影に食料と薪を手渡して置いてきた。

しかし、これからどうしたものか。

誰かと相談できないものかと思う。サキあたりなら、こういった相談にも適切に答えてくれそうな気もするが、そうしたことによつて彼女に負い目を背負わせることにはなつて欲しくない。

とりあえずは、明日もう一度ヨリと話し合つ必要がある。  
そのために、何らかの理由を付けて僕一人で行動する。

また、アカを裏切つてしまふことになるな、と思う。すまないとは思うが、はつきり言つて彼女に「一番ヨリのことを知つてはいけない人間だ。

僕は彼女への謝罪を唱えながら眠りについた。

\*

翌朝、朝食の席で、討ちもらした異形がいるから、とみんなに告げた。無論、今日一日一人でいさせてもらうためだ。各々反応の差こそあれ、全員一致で怪しんでいるようだった。しかし、サキが「お気を付けてくださいまし」と言いつと、とりあえず表面上はみんな納得してくれた。

朝食が済むと、アカはさつさと畠に行ってしまった。起きて会つた時からアカは無表情を仮面のように顔に張り付けており、何を考えているのか全くわからなかつた。

ササヤキさんはいつも通りだった。アカが無表情なことに少し戸惑つていたようだったが。

サキとネガイさんも普段通り。この二人は、知つていた、と僕は判断した。きっと、予めより。

キズオトは確実に知つているだろう。いつもながら朗らかな彼女だったが、どこかその様子は空々しかつた。

ともあれ、僕は鹿屋の原を突つ切りヨミの下へ急ぎ足で向かう。

彼は、皮を剥いだ兎の一部を火で炙つていた。

「や、やあヨミ」

まだ低い太陽の下、少年の短い金髪が風に吹かる。

「……」

僕の呼びかけに応じこぢらを向いたものの、その口から言葉が出ることはなかつた。常磐色の双眸を丸くして僕を見上げている。

「昨日の夜はどうだった？ 寒くなかったかい？」

兎の肉片を炙る炎を挟んで、彼の前に座る。

赤いパーカーに灰色のジーパン。現代風の彼の衣装は、懐かしさよりも奇妙さを僕に憶えさせる。

「……寒かった」

微かな声での返答。渴いたその声は、やはり少女のもののように愛らしい。

「まあ、そうだろうね。本当は森に連れて行つてあげたかったんだけど、あそこには、その……主がいるから」

主、と彼は繰り返し首をかしげる。

「そう、主。もつとも、彼女にとつてこの夢まほろの大地すべてが庭みたいなものなんだろうけど」

「……うかうかしてらんねえ、てことか

すれつかれた口調での独り言。その姿を見て、僕は一つ思った。

「似ている……」

「…………？」 「誰に？」

「うん、その主、キズオトって子に…………て、うわー」

いつの間に来たのか、ヨミの背後にキズオトが立っていた。

やはり来たか。

彼女に書意はないようだつた。単に、様子を見に来たという感じだが……。

こちらからは何も言わず、田を見て彼女の真意を探りつとした。

キズオトは、笑いの表情で田を細めた。

「ねえ、ツミ。この子 マリみていいのよね？ マリとあたし、どこらへんが似ているの？」

何も含まれるところのない、ただの質問。

ヨミは首を曲げてキズオトを見上げている。彼の視線に込められ

ているのは、奇異。

「うん……ミミは大人っぽいけど子供らしくて、キズオトは子供っぽいけど大人らしい、と思った……」

「「子供じゃない！」」

ユニゾンだった。どうやらこの一人は気が合つよつだ。

二人の子供は、叫んでから唖然として互いの顔を見合せた。サキに口を開いたのはキズオトだった。

「ふ、……ふん！ あたしは今年で六十八歳なのよ。ミミ、あんたみたいな子供とは違うんだけど」

いや、そこで張り合わなくとも……。

当然、ミミは負けじと言い返す。

「そんなの、ただのババアってことじゃねえか。俺は三十一だ。ほどよく大人なんだぞ」

なんだね、その理屈は。

「ただのオヤジじゃないの」

「なんだと！」

そして子犬のように取つ組み合つ二人。

「ふ、二人とも止めなよ……」

こう言つ時どうすべきか、兄弟のいなかつた僕には見当も付かない。  
そう言つわけで、僕は一人の子供が戯れているのをただ見ているしかなかつた。

「じゃ、ミミはじこいで暮らしなさい」  
五百の森の一角。周囲の木々に比べひときわ大きい樹の根本を

指し示して、キズオトは言った。

「ここなら雨露は防げるし、木の枝は太いから眠りやすいし」

さらに、キズオトは虚う�から何かの獣の毛皮を取り出し、

「あたしのとつておき、貸してあげる。これをかぶつて寝なさい」

あつけにとられた表情のまま、言われるままに毛皮を受け取るミ

ミ。

親切にされたことがないんだろうな。

僕はヨミに先んじて謝辞を述べることにした。

「ありがとうございます、キズオト。ヨミのために、こんなに色々してくれ

て」

「そんな……大したことじゃないよ、シミ

しおらしくしてみせるキズオト。

下心あり、かな。

そう勘織つて僕が不謹慎に笑つていると、隣ではヨミが暗い顔を

していた。

彼が重苦しい声でキズオトに問う。

「お前は、俺のこと何にも思わないのか……？」

その深刻な問いに、キズオトはけろりとした顔で答える。

「うーん、何にも思わない訳じゃないけど、あたしだつてあんたみたいな人間にあつたのは初めてだもん。あんたの言いたいことはわからないでもないけど、あたしは早とちりして動きたくない、そういうことよ」

ただね、と彼女はヨミに詰め寄る。

「あたしとシミ以外の人間、特に赫い髪の人間には近づかない方が良いよ。あの子、変なの見付けたらとりあえず焚き火にしようとするから」

酷い言われ様だな。

しかし、それも真実だ。無言で刻々首を縦に振るヨミにならって、

僕もつい頷いてしまう。

自分の言いたいことが伝わって満足したのか、明るい表情を見せ  
るキズオト。だが、口ではああ言つても、やはり憂いに思つ心があ  
るようで、その面差しには未だ影が差している。

「いつ言つ時は……。

もじもじし始めたミリの肩を叩き、彼の言葉が口から出るのを促  
す。

おずおずと、顔を隠しながらミリは言つた。

「わ、悪かったな……。色々迷惑かけちゃって……」

「ミリ」

咎めるように、キズオトは彼の名を呼ぶ。う、と身を震わせたミ  
リ。キズオトが再び詰め寄った。

「いう言つ時はね、ただ『ありがとう』と言こなさい。あなたは  
確かに迷惑だけど、謝つてどうにかなるものじゃないでしょ？」

お姉さん口調のキズオト。

厳しいな。

彼女はミリに謝罪を許さなかつたのだ。それは、彼の存在が僕ら  
にとって、悪になつて欲しくないからで、万が一彼が、悪とな  
るのならその罪は謝つてどうにかなるものでもない、といつことを  
彼女が知つてゐるからだ。

ミリが言つ。

「……ありがと」

「……とキズオトが笑つた。

\*

その夜、僕はアカに隠し事の有無を訊かれた。

無い、と答えると、彼女は嘘だと言った。そして、彼女は顔が火照つて赤くなるまで酒を飲んで寝た。

自室で引かれはじめた『張り月を眺めていると、サキが尋ねてきた。

僕らは何も会話しなかった。彼女はしばらく僕の横顔を眺めた後、壁に寄りかかって長座していた僕の股間に潜り込んだ。陰茎を刺激し勃起させ、それを口と手で摩擦して口内で射精させた。

サキは僕の精液をこぼすことなく飲み干し、そしてその口でこう言つた。

「彼の言つことは真実ですよよ

いつになく冷淡なサキの顔。僕は今更ながら彼女のことが空恐ろしく感じた。しかし、その怖れを顔に出すことができないほど、僕の心もまた彼女の面差しと同様に冷えきっていた。……まるで、死んでしまつたかのように。

滅びの運命さだめをきかされたよつこ。

僕は問うた。

「止めはしないんだね」

ええ、と彼女。口を引いて微笑するが、目は相変わらず何の感情も映していない。

「未来というものは、変えられるものと変えられないものがありますの。そして、未来を変えられる人と変えられない人がいる。この未来は変えられない。加えて、あなたは未来を変えられる人ではありません」

それは静かな、静かな宣告。

サキは顔を袖で隠した。次に顔を見せた時、サキは、本当に、笑つていた。

「<sup>わたくし</sup>私を抱いて下さるおつもりはありますか？」

冷えた心で僕は答えた

「無い」

残念そうな顔を見せて立ち上がる彼女。その彼女は、いつもどおり、の彼女だった。

しかし、今の僕は、いつもどおり、にはなれそうにない。

去っていく彼女の背を見送った。

どうして僕は生きているのだろう。

運命に流されるままなら、他の誰かでも僕の代わりはできる。

僕が生きている必要などあるのだろうか？

### 5・3 「秘かな戯れ」（後書き）

当初の予定ではヨミは女の子だったのです。そんなわけで、いろいろの話はヨミが浮気をして云々という話になるはずでした。しかし、いざ書く段になつてヨミが本当は男の子な様な気がして、このような話になつたのです。ちょっとした裏話。

長期休暇中なのでさくさく書いています。しかしその分文章が適當臭いような気がします。お気つきの点がありましたらコメント下さ  
い。

## 5・4 「赫い瞳に見つかる」

アカとは三日おきに会つことにした。

彼のことは公には秘密ということになつていて、彼の世話はキズオトが受け持つている。とにかくアカには絶対に知られないようしている。

そのアカと言えば、僕がこれまでしてこることに疑問を持ち句とか突き止めようとしているらしい。

田をかくまつて一週間ほど経つたある日、夕食の席でアカが言った。

「最近、作物の生長が良くないわ」

「あつ！」

キズオトがお椀を取り落とし、中身を床に撒いていた。

「あら……キズオト。どうしたの？ いつもはこんなこと無いのに……」

にへらとキズオトが笑つて答える。

「う、うん、ちょっと失敗しちゃつた」

それは僕から見ても無理のある笑顔だった。……キズオトは隠しが得意な女の子ではなかつたのだ。

アカはキズオトのことを直視してはいなかつたが、横目でしつかりと観察していた。

アカの注意をそらすために、僕はアカに質問することにした。

「アカ、他には変わつたことはあつたかい？」

ぎらりと光る赫い瞳が僕を見る。あまりの視線の鋭さに心臓が縮み上がる思いだつたが、何とか田を反らさずに堪えた。

「雨が冷たい。まるで氷のように。……まあ、外にいる人ならこ

れぐらいは知つていいでしょうけどね

そのとおりだよ、アカ。

囲炉裏の周りから会話が無くなり、壁を通して雨垂れの囁きが聞こえた。

微かで軽いはずのその音が、やけに重々しく聞こえた。

＊＊

時は一昨日に戻る。

森の中の少し開けた場所、花々が春を謳う青い空の下で二人の子供が草相撲をして遊んでいた。

「より、今度こそ。　　む、くそお！」

「もう、あきらめなよ。あたしはこの森と六十年近く付き合つてるので。」この森にある草木についてなら、大体のことはわかっているんだから

そんな会話をしながら、三三とキズオトは、友達のように、姉弟のように遊んでいた。

無邪気だな。

キズオトもヨリモ、きっと互いに自分と似ている遊び相手を探していたのだろう。一人は何年生きても子供らしさを失わない人間だつた。しかし、自らの生きる環境故に彼らはその子供らしさを押さえて生きてきたのだ。はじめキズオトが現れた時にはどうなるものかと肝を冷やしたが、今この光景を見ていれば、万事良かつた事じやないのかと思う。

ぱつり、と木の葉を打つ音が聞こえた。

雨が降ってきた。僕ら三人は空の見えるこの場所を諦め、三三の

隠れ家である大樹の下へ行つた。

降る水は冷たかった。樹の根に座ると、そのぬくもりにほっとした。

ふと、三三を見る。彼はいつになく暗く沈んだ顔をしていた。

「どうしたの、三三？」

緑黤のような、陰鬱な瞳の色。

「なあ……俺の冒険譚、聞きたくなえか？」

‘冒険譚’。額面通りなら面白いものかもしぬないが、声を低くした彼が語るものなど、決して愉快なものではないだろう。

でも、聞くべきなんだろうな。

僕がこの話を伝えると、彼は静かに話し始めた。

「初めて俺が来た夢には、じいさんと、その人を長とする十数人の人達が住んでいた。その人達は、俺を見て新しい仲間だと喜び、同時にすごく申し訳なさそうな顔をした。

しばらくその人達と暮らして、その理由がわかつた。俺の来た時からその夢は、空が灰色で、山ははげ上がり、川の水は黒ずみ、草も薄い黄色をして地面に伏していた。あの夢は 終わりかけていた

「終わりかけていた？」

「あんた、もしかして夢に寿命があることを知らねえのか……？」

「そうか、なら憶えておきなよ。夢はな、戦争で勝ち続けていても、五十年くらいで終わるんだよ」

「え？ でも、この夢は七十年くらい続いているんじゃ。キズオト、そうだよね？」

「…………」

「俺の話を続けるぜ。」

それで、俺が初めて暮らした夢は、俺が着いて三週間くらいで壊れはじめた。

夢の崩壊は大地の果てから、空の彼方からはじまつた。地面は砂の板できていたみたいに沈んで落ちていって、灰色の空は見ていて目の痛くなる黒い闇に塗りつぶされていった。

夢に住んでいた人達は、それぞれ自分で死んだり、外に立つて夢と一緒に消えていくのを待つていたりしていた。俺は、みんなの長だつたじいさんと一緒にいた。

怖いとは思わなかつた。俺はじいさんの昔話を聞きながら、自分が夢ごと消えるのを待つていた。

でも、俺が消えることはなかつた。

気が付いたら、俺は地べたで寝ていた。ぼんやりしていると、見知らぬ誰かが来て俺を新しい仲間として受け入れてくれた。……そこは別の夢だつたんだ」

「一〇〇日の夢には色があつた。眩しい太陽の下、世界に色があるのはちよつと不思議だつた。空は青く、草木は緑で、残雪は白かつた。

でも、それは一・二日で見れなくなつた。空が灰色になつてから三日後に、降り続けた紫色の雨の下でその夢は泥のように溶けて消えた」

「それから、三〇〇日の夢にいた。そこは生まれたての夢だつたら

しく、暮らしていた三人の人もみんなそこに来たばかりだと言つて。俺はその人達と共に、武器の使い方や、外で獲物を捕まえる方法とかを学んだ。そうして、一年を過ごし、ある日を境に夜が終わらなくなつて、その夢は闇に沈んでいった。

そんなふうにして、俺は沢山の夢を渡り歩いた

我が耳を疑う話。ミミの話はそれそのものだつた。

彼が最後の言葉を発した後しばしの間、僕は何も言ひことができなくなつていた。

キズオトもその様だつた。喉を詰まらせたような表情のまま、ぴくつともしなかつた。

ミミを見る。彼は顔面を蒼くし、組んだ指は白くなつていた。緑の瞳には強い光があつたが、どう見てもそれは無理をしている子供の表情だつた。

だから、僕は彼を抱きしめた。

「……ミミ」

彼を腕に抱くという動作をしても、身体から声を発することはできなかつた。冷たい彼の身体を温めるよつて、腕を回すことしかできなかつた。

「……男に抱きしめられても、嬉しくない」

照れた彼の声。

男の子じやなかつたら、このまま情を通じていたかもしだい。

なあ、と彼が呼びかけてくる。発声は、触れあつた身体を振動として伝わってきた。

「兄ちゃんのこと、兄ちゃんつー！」

「……もつ、呼んでいるじやないか。

胸の中に暖かい気持ちが沸いてくるのを感じる。

「いいよ。僕のことば、好きに呼ぶと良い」

そして、僕は言つ。

「大丈夫。きっと何も起きない。起きても、僕が何とかするから

……」

なんの根拠もない言葉。それでも、彼は僕の腕の中で頷いてくれた。

「ありがとう……兄ちゃん」

「 するい」

はつとして振り返ると、キズオトが恨めしそうにこちらを見ていた。

「あたしも……あたしもシミのこと、お兄ちゃん、て呼ぶー！」

「はは……。キズオト、おいで」

片腕をひろげると、キズオトが躊躇わざ飛び込んできた。

「お兄ちゃん……。大好き」

そうして、雨が降り止んで斜陽が木々の間に差し込んでくるまで、僕らはそこにいた。

こんな時がいつまでも続けばよいと願いながら。

\*\*

そして三日が経ち、アカが現状を告げた次の朝。  
冷たい雨の降る中 千五百の森 まで赴き、ヨリの住処とする大樹を目指す。

ヨリは樹の根に腰掛け僕を待っていた。彼の頭上の枝に、心ここに在らずといった様子のキズオトがいた。

「きよ、今日も雨だね。まったく、嫌になつつけやつよね

そうあいさつしてヨリの前に座る。

彼は悲しげに笑つてた。今まで見たことのない彼の表情。

「兄ちゃん。俺、一つ考えたんだ」

少年の言葉に、頭上の少女が反応した。

一メートル程の高さから飛び降りたキズオトは、怯えたような頬笑みを僕に見せながら言った。

「あ、あたし、お昼ご飯探してくるね」

逃げ出すようにかけていく彼女。

ヨミはそんな彼女の様子に表情を変えることなく、やがて軽やかでどこか慌てたような足音が聞こえなくなつてから話し始めた。

「俺考えたんだ……。

自分の存在が誰かにとつて害悪となると思った時、その人に自分を殺してくれと言うのはずるいことなんじゃないかって。そう言うつて事は、自分とその人の絆を確かめたいからって事なんだよね。でも、俺はそう言つづるい人間は嫌いだから

そして一息。次の彼の言葉を、僕の聴覚は周囲のすべての音を聴こえなくして感受した。

「俺、死ぬ時は兄ちゃんの手を借りないで死ぬから」

彼は、時たま僕から話す能力を奪う。

また彼を抱きしめようと思つた。だが、彼の言葉に秘められた魔法の力は、僕に身じろぎすることすら禁止していた。

石になつた僕の背後で、声が聞こえた。

「あ、アカ。こんな所に来るなんて、め、珍しいね」

「ちょっと、探し物を、ね」

「探し物!? もしかしてシミのことかな? それだつたら向こ

「

「退きなさい……!」

何かを叩く湿つた音と、少女の短い悲鳴。

聴きまじう事のない愛しい女性の足音。それは、僕のすぐ後ろで止まる。

「面白い動物を飼つていたみたいね。てつきり私は、あなたの浮気相手は同じ年の女の子かと思っていたわ」

ミミが立ち上がった。

「あんたがアカか? 兄ちゃんとキズオトから、ずいぶんおつかない奴だつて聞いたぜ。……本当なのか?」

「……本当よ」

くく、とほくそ笑むアカ。まるで、罪人を裁くことを至福とする処刑人のように。恐怖を振りまく赫い女の前で、ミミは足を震わせながらも必死に彼女と向き合つていた。

アカが僕の方を向く。

「それで……シミ? この子供のおかげでこの夢は歪み始めているんだけど、あなたはどうしてくれるのかしら。この子供を殺す? それとも……私を殺す?」

そんな選択、一つしかないじゃないか。

「この夢と自身の存続のために、幾多の夢を滅ぼし続けた僕が、許

されることなど一つしかない。

腰の刀、天乃常立あめのとこたちを握り僕は立ち上がる。

「僕は！」

「だめだ兄ちゃん！」

ヨミの叫びが僕の言葉を遮つた。

彼を見下ろすと、涙に輝く緑玉エメラルドの双眸が僕を見上げていた。

「これまでありがとう、兄ちゃん。俺は、今まで死ぬのが怖くて沢山の人を殺して生きてきた。でも、もうそれは止めにしたいんだ」

それの何処が悪いんだ。

ヨミはアカをひたと見据える。

そして、宣戦した。

「アカ。俺の名前はヨミ、夜を導くもの。俺は、あんたに決闘を申し込む」

陰惨に口を歪ませた女が答える。

「良い度胸だわ。上等よ、その罪ごと焼きぬくしてあげる」

## 5・4 「赫<sup>ハ</sup>いで田<sup>ヒタ</sup>に見つかる」（後書き）

弟萌えです。

B<sup>レ</sup>は趣味ではないので裸になつてどりいひと言つシーンはあります  
せんが、それ抜きの関係だつたら大いに書いてみたいです。

それにしても、やはりツミつてへたれですよね……。

どうしてこうなりましたかね。話の流れ的に逆らえないものがあつ  
たんですね。

第五幕は次で終わりなはずです。間幕を挟んで、第六幕には言つた  
らそれでこの小説はお終いです。しかし、次回作があつたりするん  
ですけどね。

## 5・5 「太陽の決闘」

迦具土の漠<sup>かぐつち</sup>。

そこは水なき地、雨なき沙漠。

乾いた大地、熱い風、翳りない太陽。

砂塵に煙つて白く輝く空の下、僕らは立つ。

「ずいぶん歩かされたからどんな場所に連れて行かれるのかと思つたら、こんな殺風景な場所かよ。色気のねえあんたらしいぜ」不敵な笑みを浮かべたヨミが言う。焼けつく日差しの下、彼の金髪は一層の輝きを放つている。

「その強がり、いつまで持つかしらね。……この私をここまで苛つかせてくれた代償は高くつくわよ。じっくり焼き肉にしてあげる」怒りに染まつたアカの瞳は、真紅といえるほどの色彩となつていた。その瞳を見ただけで、僕は全身が強張るのを感じた。

今アカは、幾つかもつている狩衣の中でもとつておきの物を着用していた。血液と同じ色に染められた下地に、金糸で蓮を銀糸で彼岸花を密に刺繡した、絢爛たる狩衣だ。

力が入れられているのは服だけではない。耳には、紅玉髓を加工した耳飾りを。腰には、大粒の燃えるような紅玉を中心配した玉飾りを付けている。これらすべては、アカの炎の術力を高めるための装備だ。

そして、この場所。この夢<sup>まぼろし</sup>の中で最も火の気が集う迦具土の漠の中心部。

彼女は完膚無きまでにヨミを潰すつもりなのだ。そのために揃えられる条件はすべて揃えられている。

すべては、僕の咎か。

自分を裏切った僕を断罪するために、アカはヨリミを殺すのだ。そ  
うでなければ、彼女はここまでしないだろ？

だが、僕にもできることが一つあった。

「この決闘の見極め役は僕、それで良いんだよね？」

二人の闘士が僕を興味なさそうに見た。

「そうだ、兄ちゃん……いや、ツヨミ。手出しさないでくれよ

「わかつてていると思うけど、この決闘はどちらかの心臓が止まる  
まで続くのよ」

そう言つた後、瞬きしたアカの口元に歪んだ笑みが浮かんだ。

「ねえ、ツヨミ。あんたはどうちを応援しているの？」

底意地の悪い質問。しかし、僕にそんなことを思う権利はない。

「僕は……アカを応援している」

これは本心だ。

質問が重ねられることはなかつた。

二人は改めて向き合つた。

これで、僕は自分の口で決闘に手を出さないことを誓つた。しか  
し、見極め役となつたことで、僕にもある一つの行為が可能となる。

それは、戦闘不能となつた者を殺すこと。

アカはそんなこと認めはしないだろ？

また、ヨリミとの約束も反故としてしまつ。

けれど、だれに何と言われようと僕はヨリミの虐殺は阻止しよう。

これを、僕の償いとするために。

\*

「始め！」

\*

両者の距離は一十歩ほど。ミミが近接武器のみを使うのなら、何歩も近寄らなければ攻撃はできない。

アカは両手に火を灯して待ち受ける。白みを帯びた炎は、鉄すら熔かすだろう。

ゆつくりと、静かにミミが前進する。

「 紅蛇走<sup>コウダツウ</sup>」

叩き付けられた左の炎が、地面を這つてミミを下方から襲う。ミミは炎を紙一重でかわした。そして、その動作のまま強く踏み込んで矢のようにアカに飛びかかる。

向かい撃つアカの右手。

「火雷撃！」

砲弾のような火玉。

それは……切り裂かれる。

「 何！」

「 甘いよ」

疾風の如きミミの短剣が、アカの右の横腹を切りつける。

「ああ！」

赤い狩衣が重ねて赤く染まっていく。

傷を負つた右横腹を左手で押さえてアカはミミと向き合つ。驚きを隠せないアカの表情に、ミミは冷笑をもつて答える。

「 ここ<sup>まほろ</sup>の連中はみんな術を使えるみたいだけど、それは珍しいことなんだよ。普通は、夢に来たからって誰もが術を使えるようになるわけじゃない。だから、みんな武術を習得する。この俺みたいにな！」

やおらミミが駆け出す。アカは反射的に火の玉を撃つが、当たらない。

突き出されたアカの腕の下から、ミミの斬撃が放たれる。

「く！」

アカの右手首から血が噴き出す。止血しなければとおからず身体に異常を及ぼす出血量だ。

だがアカに手当をしている時間はない。狼のように俊敏に動くヨミは、アカを中心として円に走り次の攻撃を狙っている。

「要是近づけなきや良いんでしょう！ 蓮華紅陣！」  
レンカコウジン

剣印を結んだ右手が、血を撒き散らしながら天に振り上げられる。彼女の足下から爆発するように花開く炎の蓮花。

草木の類なら一瞬にして焼き尽くされる灼熱の中、ミミは駆け抜ける。

「勘違いするなよ！ 力は弱いけど、防御結界くらい張れるんだぜ！」

突き出された短剣の切っ先は、まっすぐアカの心臓を狙う。必死に身を捻つて回避するアカ。心臓は護つたが、かわりに斬られた脇の下から大量の血がこぼれ落ちた。多くの出血故か、アカが地に膝をついた。

「意外にあつけないもんだな。俺は、あんたが綺麗さっぱり俺を殺してくれるもんだと期待してたんだがな」

彼女の血を吸つた飾り気のない鉄の短剣をヨミが舐める。それを見たアカは、荒い息をしながら、ぎり、と歯を食いしばった。

「殺してやるわよ。」この私の最強の火炎で！」

そうか、とヨミは言い、短剣の血を服で拭つて鞘に収めた。

「なら、次で終わりにしようか」

豪と風が動きだす。乾いて熱い風がアカの下に集い始める。まるで、ふいごで炎を煽ぐように。

アカは両手の平をあわせてヨミに突き出す。右手首から流れる血は、渴いた砂地に次々と吸われていく。

「紅帝爆裁掌！！」  
コウテイバクサイショウ

放たれる火炎の奔流。幅一メートル近くある火炎流はヨミを直線的に狙う。

ヨミはその射線から横方向に逃げた。

「逃がさないわよ！」

合わされた両手が左右に振り切られる。

それは切り離すための動作。火炎の流れは、龍となつてヨミを追尾し始める。

沙漠の砂を半熔解させるほどの熱。即席結界くらいではあれを防ぐことはできない。

ヨミの選ぶべき道は一つ。龍に追いつかれる前に、アカの喉笛を搔き斬ること。

はたして彼はその通りにした。背後に龍をつかせたまま、電光の如く勢いでアカの横側から襲いかかる。

術に集中して無防備なアカ。

龍が身を躍らせヨミを捕らえようとした瞬間、彼は地面を蹴り飛び上がった。

がら空きの彼女の喉笛と、鉄の軌道が交差した。

たん、という軽い着地の音。

赤い飛沫がアカの喉元から噴き出した。

膝をつく彼女。その、去サリという音と同じくして火炎の龍が霧散した。

上半身を棒のように伸ばし、光をなくした瞳で太陽を仰ぎ見ている。伸ばされた喉は、壊れた蛇口のように血液を流していた。

三月がこちらを向いた。翳りのない、穏やかな微笑すら浮かべて。

「悪いな……兄ちゃん。この人のこと、好きだつたんだろう？」

そして、血まみれの短剣の切つ先を己の首筋に当てる。

「じゃあ、さよならだ兄ちゃん。兄ちゃんは生き残つたんだから、最後まで生きるんだぜ」

く、と短剣を握る手に力が込められる。

砂塵が吹かれる音が聞こえる静かな一瞬。

咆吼が響き渡つた。

## 5・5 「太陽の決闘」（後書き）

太陽の決闘と言つと、テイルズシリーズの術『デュエル・ザ・サン』を連想します。

久しぶりに真面目に戦闘シーンを書いたので、どうやったもんかなと考え考えやりました。

予告を裏切つて一話に分けました。ちょっと次が大切なシーンだと勝手に思つたので……。

と言つわけで、次回最終ラウンドです。

## 5・6 「金色火刑」

太陽は空の中心に坐していた。

アカは、膝下を地面につけ全身を「の字に伸ばし、その顔は天上に向けられていた。

光のない瞳。燐然たる日<sup>ヒ</sup>の光が、眼球の表面で反射している。ぱつかりと開かれた口。

「おおおおおおああああおおおおお！」

氣管を切られた彼女が叫ぶことはできない。その叫びは、彼女の全身から発せられていた。

叫びと言つよりはあまりに本能的な、咆吼とも言つべき物。怒り、憤り、そんなものが咆吼の意味。

それから、呼びかけ。

我に力を与えよ。

我にすべてを焼き尽くす肅正の炎を与えよ。

応えるように、天空から一條の光が落ちてくる。

アカの身体を飲み込む光の柱。観察者の視界は白く塗りつぶされる。

そして、大地から燈<sup>トウ</sup>と静かに炎がわき上がった。

広域に渡り出現する炎の海。

その色は 金色。

赫い長い髪が、昇る気流にはためいていた。

『な、何だよこれ……。俺の身体、崩れていぐぞ……』

金色の炎に包まれたミミが呆然と独りごちた。

炎は彼を包んだ瞬間、彼の全身を一瞬で灰の柱としていた。よつて、彼は肉声を発することはなく、この言葉は彼の遺思の囁きだ。

『桁違いじやねえか。どうしてこんな人間がいるんだよ?』

彼ははたして自らの死を理解しているのだろうか? ……もちろん、彼は自身が死んだことを識っていた。

『あばよ……兄ちゃん。元気でやつていつてくれよ

これを最期に、彼の意識は炎に消えていった。

髪の主は成人を迎えたばかりの女。衣は炎に焼かれ、若々しい裸体を包むのはその炎そのものだった。

金色の炎は彼女を焼かない。それどころか、傷ついた彼女の肉体を癒し、失われた血液を補填さえする。火炎は、乳白の彼女の肌を優しく包む羽毛だった。

女の名は、アカ。普段の彼女の知る者が目にする赤<sup>ファイイヤオ</sup>蛋白<sup>オパール</sup>石の瞳は、今は黄金の輝きを放っていた。

\* \*

僕<sup>ヨミ</sup>が我に返ったとき、時刻は太陽が西に傾きはじめた頃だった。どうやら、時間の認識が一時間ほどずれている気がする。

この目に映るのは、白い空に眩しい太陽。流刑の小さい砂粒で覆われた地上には、一糸纏わぬ姿で立ちつくすアカ。

珊瑚色の双眸を虚空に据え、彼女は何も見ていない。

僕が足音を立てて近寄ると、ゆっくりとこちらに向き直った。

「帰ろつか」

「ええ……疲れたわ」

そう言つて彼女は目を閉じた。力をなくし寄りかかつてくる程良い重さを持つ身体を背に負い、僕は家路についた。

僕らが去れば、ここにはもう誰もいない。ヨミという少年の姿をした、僕より年上だった男性は、その存在を痕跡も残さず消していった。

これも戦争か。

家に帰れば、またいつもの日々に戻る。

戻れるのだろう。ヨリを失った今、日常まで僕は失いたくなかつ

た。

戻れるはずだ。それを妨げる理由もない。

戻れるはずだった。

## 5・6 「金色火刑」（後書き）

短かったので一日で投稿です。

ヨミは、大人だったのでしょうか子供だったのでしょうか。私は子供だったと思っていますが。

架空のこととはいえ、子供の命が奪われてしまうのは悲しいことです。『これも戦争か』というツミの言つことは尤もですが、現実私達の世界からはそういうことが一日でも早く無くなればいいと思います。

と、脈絡もなく平和主義な話を一つ。

## 間幕 「水鏡」

ここに来てから幾つの夜が過ぎていったのだろう。長い間の戒めから解放たれて、とても久しぶりにボクは自分の意志で歩くことを許された。

鈍色の空の下、川に行つて身体を洗う。川の水は、命のにおいが全くしなかった。ただガラスのように澄んだ水。真つ黒な水底。何も映さない。

何も ……

…… あれ？ 何か映つてる。

『嘘でしょ？ そんな話』

『嘘じゃないわ、ササヤキ。私の話した通り、ツミとキズオトはこの夢まほうを滅ぼしかけたのよ。今からだつて、水鏡を使えば確かめられることだわ』

声が聞こえて、水面に一人の女の人の顔がうかびあがる。青い髪に、藍の瞳。ちょっと長い顔。水が揺れるたびに、その印象が、妖艶、と、柔和、の相容れない二つの間で入れ替わる。

『……わかつたわ、ネガイを信じる。それで、二人は今何をしているの？』

『ツミはアカと一緒にその侵入者の少年を連れて 遷具土の漠に向かっているわ。キズオトは泣きながら前後不覚に走つて 八十禍の沼やそまに引き寄せられてる』

『八十禍に……？ なら迎えに行つてあげないと』

『ねえ、ササヤキ。あなたはこのまま一人の過ちを許して良

いの?』

同じ声同士の会話に間があつた。

『許して……何が悪いの? 仕方がないことじやないの。私だつて、妖化していない少年を見て、敵と判断できないかもしけないんだから』

『今問題なのは、この夢を滅ぼしかけた者に罰を下<sup>まほろこし</sup>えるか否かといつこと。あなただけて、過ちを犯した者には罰を下<sup>まほろこし</sup>えるべきだと思つでしょ? 自分の身に置き換えて考える必要はないのよ』

『それは間違つて<sup>まちがつて</sup>いるわ!』

『いいえ、間違つていな<sup>まほらう</sup>いわ。どうしてかつて言つなら、罪と罰は人の感情とは無縁の場所から下<sup>まほろこし</sup>される物だからよ』

ナゲキの言葉に、ササヤキはとっさに言い返すことができなかつた。そうしてササヤキが口をつぐんで<sup>まほらう</sup>いる間に、ナゲキが言った。

『ササヤキ、あなたはこの夢が滅んでしまつても良いと言つの?』

水面が大きく揺れて、見えていた顔が消えた。声も聞こえなくなつた。

気がつくと、いつからいたのかボクの傍にサキが立つていた。

「ツミさんがナゲキさんを戒めて以来、ササヤキさんは自力でナゲキさんを抑え込められるようになつていました。しかしこの時、心に迷いを抱いてしまったササヤキさんはその隙を突かれ、ナゲキさんに身体の主導権を奪われてしましましたの。ナゲキさんは、悲しみに我を失つたキズオトちゃんを殺すために動き出しました

(あたし……何か間違つっていたのかな? ただ、ツミと仲良くなつたかつただけなのに、どうしてこんなことになつちゃつたの? あたしは、風を操つて人を殺すことしかできない。誰とも仲良くない。誰の思いも得ることができない………)

風に乗って届いた、問い合わせと悲しみの嘆き。もひとつ、キズオトの遺した物なんだろう。

サキはボクを見て、にっこりした。

「私の昔話わたくしも、もうすぐ終わりです。さあ、帰つて続きを話はなせ

て下ささいまし」

すべてを聞いたら、ボクは何をさせられるのだろう。

ちらりと浮かんだ疑問を心に留めつつ、誘われるままにボクはサキの後に続いて廃墟へと戻り始めた。

## 闇幕 「水鏡」（後書き）

サキの言つ通り、この小説もそろそろ終わりですね。  
次回はキズオトとナゲキの戦鬪。まあ、なるべく派手にやりたいと  
ころで。

その後はまとめのために地味に話をして終わりですかね。盛り上が  
り、て何だらうと考える昨今です。

## 6・0 「風の舞／氷の囁き」

現の広き世界の中で最も穢れている場は何処、と問われて聽者諸君は何と答えるだろうか。

答えは「何処も此処も穢れきつている」ではないだろうか。

その真意はここで語らないことにして、シミと名乗る男と五人の女が暮らす夢には、『穢れ』と呼ぶにふさわしい場がある。

彼らはそこを『八十禍の沼』と呼ぶ。

何故、その様な場があるのか。

それは、夢は狭き世界だからだ。去ぬべき穢れどもは、集まるべき場を容易く見付けられる故に。

そして、穢れはさらなる穢れを呼ぶ。

今、キズオトと名乗る半世紀以上の時を生きた少女の姿をした女が、その場へと引き寄せられている。

一方、この女を追う二つの名と二つの心を持つ女も一人。

腐臭漂う中、立ちつくすキズオト。自分の住む夢の北東の果てにある、忌まわしき沼に踏入りその中心に来てようやく彼女は自分がいる場を悟った。

「あ、あたしがしてこんなところ……」

言つてから、彼女は自嘲した。

「そうだよね……。自分の気持ちだけに走つてみんなを殺しかけたわたしには、ここがお似合いよね」

黒灰の天に胆汁色の沼地。足場となるのは枯れた草と何かの骨。キズオトもまた、ぶよぶよとした腑のような膜の上に立っていた。

「あたし……これからどうしたらいいのかな……」

「死ねばいいのよ」

彼女が普段聞き慣れた声が、審判を下す。キズオトは声の方に振り返りながら言つ。

「ササヤキ ううん、ナゲキ？」

沼を凍らせ、その上に傲然と立つ女。ナゲキは、泥染めを蒼く染め抜いた奇妙な色彩の振袖を身に着けていた。氷をひろげながら、キズオトに歩み寄る。

「死んで償いなさいよ、キズオト。あんたがいなくても、ツミと私がいればこの夢まほろしは守れるのよ」

薄笑いして放たれる、冷たい言葉。キズオトは顔を蒼くして後退りした。

「そんな……死ねなんて、あたし……」

「自分の過ちを償う気もないってわけ？ ふざけないでよ」

ナゲキの口が小さく動く。

‘囁き’に応え、キズオトの足下で小さな黒い氷が作られる。氷は矢となつて彼女を狙う。

「いや！」

キズオトを護るように風が動き、小さな矢が吹き散らされる。身体を抱いて震えるキズオト。

そんな彼女の様子を、冷然と見つめるナゲキ。

「死ぬのが怖いの？ どうしてか、教えて頂戴」

ナゲキはさも愉快そうに尋ねる。

「だつて……死んだらツミに会えなくなるもの…」 身を切るような叫び。

けれども、ナゲキはそれを笑い飛ばした。その笑い声は、ぬかるんだ空氣にも朗々と響いた。禍々しいほどに。

「キズオト。ツミは私の物よ」

え、と田を見開くキズオトを前にして、ナゲキは彼女を殺すための術を起動させ始めた。

『不淨の地に潜む呪われた神。私が操る水を肉とし、土を脆い骨として、今ここに立ち上がりなさい』

キズオトにはナゲキが何を唱えているのか聞き取れない。ただ、己に従う清浄な風を呼び集め、不気味に蠢く沼に目を凝らしている。そして、ナゲキがすっと掌を上に挙げた。

『ああ、私に従いなさい、八十禍津日神』  
やそまがつひのかみ

ナゲキとキズオトの間に、身の丈六メートルほどの泥の巨人が立ち上がる。

『ほら、こ挨拶なさい』

巨人がキズオトに向かい拳を打つ。

「天狗！」

風を操りキズオトが飛翔し、拳をかわす。  
だが、拳は一つではなかった。

「うあ！」

左斜め後ろから、大質量の鈍い衝撃が、少女の身体を軽々と吹つ飛ばす。

巨人は三体いた。それを、飛ばされながらも身を翻し、背中から泥に落ちた彼女は見た。

「う、うう……身體が重い。臭いよ」

泥は肉の爛れるにおいがした。その泥を身に付着させたまま、ふらふらと飛ぶキズオト。その動きは、至極きいちない。

「ふふ……。どうやら、うまく風を操れないようね」ほくそ笑むナゲキ。

彼女の言葉の意味は、この「八十禍の沼」に吹く濁んだ風はキズオトには操ることができない、ということである。キズオトは澄んだ綺麗な風のみ手足のよつに操ることができるのだ。

『もつとあの娘をいたぶりなさい』

三体の巨人がキズオトに肉薄する。

振り上げられる拳。

「そんなの！」

キズオトは乱暴に加速して巨人達から距離を取る。充分に距離を取つてから強引に旋回し、叫ぶ。

「入道、こいつらをぶつとばして！」

招かれる暴風。

巨人達の身体が大きく削がれる。

しかし、それを見たナゲキが笑みを崩すことはなかつた。

「……愚かね」

キズオトの背後に泥の砲弾が撃ち込まれた。

「か…………」

声も出せず、受け身を取ることもできずキズオトは泥にめり込んだ。

だ。

「八十禍津日神はこの沼そのものよ。この巨人は形に過ぎない。どれだけ壊そと、意味はないの」

新たに巨人が立ち上がり、起き上がろうと泥の中で足搔くキズオトを踏みつけた。

「ふふふ……溺れてしまいなさい」

風がキズオトを救おうと泥をえぐり始める。ナゲキは、そこに追い打ちを掛けることにする。

『八十禍津日神。子供の肉が欲しいのなら、もつと頑張りなさい』

沼に無数の人型が立ち上がった。それらはキズオトに向かって一斉に走り、次から次へと倒れ込んで少女を埋めていった。

「喜劇」<sup>コメディ</sup>のような光景。ナゲキは腹を抱えて笑い出した。

だが次の瞬間、ナゲキは激しい頭痛を憶え頭を抱えた。

「ぐ……ササヤキ。邪魔するんじゃないわよ！ 私の下位存在のくせに！」

意識を覆そうとするササヤキにナゲキは抵抗する。その間ナゲキの使っている術は乱れ、キズオトは徐々に泥の中から脱出し始めた。

さらなる頭痛が彼女を襲い、同時にキズオトが顔を泥から出したとき、ナゲキの意識が途絶えた。

「キズオト……！ 私の声が聞こえる？」

疲弊しきつた顔のキズオトが呼ばれた方向に顔を向ける。その顔面は黒く染まり、目には狂氣にも似た獸じみた光が宿っていた。

「サ、サ、サ、ヤキ……？」

ササヤキもまた顔面蒼白の様相。しかし、意志の込められた強い口調でキズオトに呼びかける。

「キズオト、あなたの封じたものを解き放ちなさい」

キズオトの目が驚愕に見開かれる。

「だめ……あれ、はだめ。だつてあれを使つたら、あたし、抑えられなくなる……！」

彼女の声から滲み出る強い恐怖。もしシミがこの場にいたとしたら、何故彼女がここまで怯えてしまうのか想像もできずに狼狽えているところだろう。

そんなキズオトに、ササヤキは重ねて呼びかける。

「お願ひ。本當なら私が自分で命を絶つべきなのだろうけど、ナ

ゲキがそつはさせてくれないでしょうから。だからお願ひ、私を殺して

‘あれ、と使うこと。キズオトとササヤキ、そしてナゲキの共通認識では、それは誰かの死と同義であった。

「キズオト……、わたしはあなたを殺したくない。もちろん、あなたに私を殺させたくない。でも、他に方法がないの。どちらかしか選べないのなら、身勝手かもしれないけど、私は後者を選ぶ。」

「めんなさい、キズオト。私の……可愛い妹」

『不淨の場に身を潜める、清廉なる水達。私の大切な家族を助けて』  
八十禍津日神を従えるのはナゲキ。ササヤキの指揮下にはないの  
で、彼女は別の術でキズオトを救出しなければならない。  
さらにササヤキは大気に囁きキズオトの助けとなる風を呼ぶ。

「ああ、キズオト。私が<sub>ササヤキ</sub>私である間に……」

泥ヤソマガシはこの瞬間にもキズオトを飲み込もうとしていた。足下に這い寄る感触が、キズオトの心を舐める恐怖の舌となる。加えて、あれを呼ぶ事への恐怖。二つの恐怖が、キズオトの精神を搔き乱していた。

「ふふふ……あつはははは！ キズオト、死になさい！」  
この声を引き金にキズオトの恐怖が弾けた。

ついに、叫ばれる。

「すべてを毀して……ダイダラボッチ！！」

槌を振り下ろす音。目に見えない巨人が地面を殴りついているかのように、沼に次々と無差別に大穴が空き始める。

まるで一面に爆撃を受けているかのようだった。槌を振り下ろす音が響くたびに、沼に直径四・五メートルの空きが開き大量の泥が飛び散った。

八十禍津日神の意志がナゲキを護ろつと、山のよつな防壁を作り出す。

この防壁に反応して、今まで無差別だった不可視の打撃がそこに集中し始めた。

その光景は、まさしく巨人が山を手で掘っているかのよつなものだつた。巨人の手は見えざるものだが、確実に山は抉られていく。

キズオトはそのありさまを呆然と眺めていた。自らの意志を失い、壊れた人形のように、ただ呆然と。

やがて、泥の山の中から女性の姿が見えた。

天を見上げる、優しげな瑠璃石の瞳。ラビス・ラズリ彼女はササヤキだった。

風の巨人の一撃が加わったとき、彼女の身体は風船のように割れて潰れた。

\*

猛り狂う風の中で、泣きじゃくる少女が一人。

風と言つよりは、それは不可視なる暴力であつた。泥は幾度も抉られ空に散り、周囲を黒く塗りつぶそうとしていた。けれど、どれほど暴威を振るおうと風は収まることを知らなかつた。

キズオトの体力を蝕んでいようとも。

彼女の普段着ていた袴も、この様な事態を防ぐためのものだつた。

「——（荷）式封印術。意志を継ぎ、我、汝を慰撫せん」

キズオトの影の中から声が聞こえた。声と共に、影から美しい鼈甲の簪が現れ、彼女の髪に挿された。

「ネ、ガ、イ……？」

むせび泣く声で呼ばれた名の主は、影からわき出るように現れた。漆黒の振袖を着たネガイが、キズオトを背中から抱きしめ、囁く。

「これはササヤキ殿の願い。十年より前からサキ様より自らの終局、この日のことを告げられていた彼女は、この簪を貴方への別れの品として用意し、届けることを願われたのです」

告げられたことを噛みしめるように、キズオトは愛おしげに簪を握り締めた。

簪はキズオトの力を吸収し鎮め、淡く光を放つていた。

ネガイが問う。

「キズオト殿……貴方の、願い、はなんですか？」

零れる涙。悲しい声で答へは告げられる。

「あたし、もう家に帰れない。もう、ツミに……お兄ちゃんに、会えない。だから、あたしを現に送つて。力を失い、いつかしわがれて死ぬように」

「承りました」

引き留めはしない。それがネガイの本質であつたから。

黒き深淵が開く。現へと落ちるための、戻ることのできない扉だ。

「ばいばい、お兄ちゃん。元気でね……」

最後の力で風に別れの言葉を託し、キズオトは長き時を過ぎて世界を後にした。

## 6・0 「風の舞／氷の囁き」（後書き）

この小説は基本シミの主觀文なので、今日は第六幕の零話と書ひ「」とになります。

今日の解説：ダイダラボッチはあちこちで呼び方が変化する巨人の名前です。攻撃のイメージ的には、テイルズシリーズの魔法「ゴシトブレス」ですけど。

それと、八十禍津日神。黄泉の国から逃げてきた伊邪那岐が裸ぎを始めたときに出でてきた疫病神です。よく奉れば災厄から護ってくれるらしいですよ。

ササヤキさんが死んでしまいました。それにキズオトもいなくなりました。

しかし、キズオトはまた次回作で活躍してくれるでしょう。ササヤキさんとナゲキさんも復活させてみたいな、とか思っています。

## 6・1 「別天津神」

『ばいばい、お兄ちゃん。元気でね……』

その言葉を、確かに僕は受け取ることができた。

そして、彼女の思いとは裏腹に、僕はこの言葉が贈られた経緯を知っている。キズオトとナゲキさんと、そしてササヤキさんの戦い。それがいかなるものだったのか、僕は知っている。語り聞かされた。僅かなうたた寝の合間に。

『泣かないのか？ 悲しくないのか』

頭の中に直接響く声。彼女たちの戦いを語り聞かせた声は、僕の心を覗きながら話しかけてくる。

「悲しくないわけじゃないよ……。突然のことに何も考えられないくなっているだけだよ、あめのとこたちのかみ天之常立神」

どうか、と古い刀に宿る意識が答える。

家に帰り着き、アカを部屋に寝かせネガイさんに彼女を任せた後、僕は部屋でただ独り呆然としていた。壁によりかかり立ち膝の姿勢でうたた寝を始めると、天乃常立は僕に語りかけてきた。

まるでかねてからの友達のように、実に気安く僕に語りかける。

『わかった。吾は心を持たぬので良くわからぬが、御身も無理はするなよ』

「ありがとう、天之常立神」

『御身、その呼び方はやりづらくないか？ 吾のことなら、トロ

、と呼べ。吾もいちいち人のつけた長い名で呼ばれたくない』  
本当に友達みたいだな。

「わかつたよ、トロ」「

それから、しばしの沈黙。

話すことのできる相手と共にいて、何も話さないのは一般に居心地の悪いものだと僕は思う。

だから、僕は尋ねることにした。

「トロ……それで、どうして今になつて僕と会話を始めたの？」  
刀を膝に乗せ、僕は彼との会話を始める。

『その理由は一つではない。

まず、御身が始めて吾を手にしたときは、吾はまだ寝ぼけた状態であつたからだ。それに、御身の波長と合わせられるようになり、念波を授受できるようになるまで時間が必要であった。尤も、それは半年前には済んでいたが。

そうだな、一番の理由は、今がその時期だと感じたからだ。御身が大切な存在を一時に三つも失つた今だから』

彼は一拍作り、それから僕に問う。

『御身に問う。御身は、吾の目的は何だと思つ』

そんなこと、わかるはずがない。

率直に僕は答えた。

その答えを愉快に思つたのか、思わなかつたのか。とにかく彼は、ふむ、とだけ短く咳いて話を続けた。

『当然、だな。吾にも目的があるわけではない。目的など、想念を持つ人間やそれに似た存在が持つものだ。

だが、吾には存在理由というものがある。原始の時に現れ、神代の歴史にも僅かに名のみ残すだけの神と同じ名を持つ理由がな。御身、すべての世界の有り様、つまり現と幾多の夢<sup>まほろ</sup>が存在するこ

## の宇宙を如何に思つ『

一つ目の問い掛け。

だが、僕は直にそれに答えなかつた。

「君は、古事記や日本書紀に記された天之常立神とは違つ存在なのかい？」

質問を質問で返したことで機嫌を損ねた様子もなく、答えは淡々と返つてくる。

『そもそも、人間の神話など架空の物語に過ぎん。現状の宇宙と照らし合わせて、その成り立ちを想像しただけのものだ。吾の名を考えればわかるづ。‘天之常立神’など、吾の眞の名ではない。吾に名はない。人間が今の名を付けるまで、吾は別の存在であつた。

しかし、名を与えられ、存在を定義し直され、吾は役目を、存在理由を得た。故に、吾は問うのだ』

そして彼は沈黙した。後は、僕が答えるべき時だ。

この宇宙の有り様、か。

そう問うからには、彼は現状をよしとしていい、もしくは彼の性に乗つ取つて言い直せば、彼は現状に何らかの変化をもたらすために存在している。彼は世界を変えるための器物である。

「僕はトコの主人、と言うことになるのかな？」

『そうだ』彼は短く、はつきりと答えた。

『御身おんみは月読命シクナミノミコトだ。支配する天照大神あまてらすのみおおかみと同列であり、しかし現での権限を持たない御身こそ、夢まほろしを王城とし吾を振るうにふさわしい』

話がだんだん大きくなってきたな、と思つた。

僕は彼によつて新世界の王に祭り上げられようとしているのだ。が、そう心に思つや、頭の中でそれを否定する声が響いた。

『吾に目的はない。御身を促すのは、それが定められた吾の性だからだ。それ以上の理由がないことを忘れてもらいたくない』

確かに、語りかける彼の声に「こちらを強制するような調子はない。

では、彼の言つ通り、僕個人にとつてこの宇宙がどうこつたもののか考えてみよう。

今、僕の心にある大きな出来事と言えば、ミミを死なせ、キズオトがササヤキさんとナゲキさんを殺し、そのキズオトも心に傷を負つたまま僕らの下から去つていつてしまつたことだ。

彼女たちの殺し合いが起きたきっかけは、ミミが現れたこと。ミミが死なせなければならなかつたのは、夢同士が戦争をしなければならないという節理があるからだ。

夢の統一を行えれば良い……？

『夢の統一というのは難しい話だ。夢が一団となれば、それはもう一つの現となる。そうなれば、現と夢がつぶし合つことになる』

戦争が起きる。それも、接頭語に‘大’が付くほど。

『吾が御身に与えられる力には、御身の陣営を勝利に導くほどの可能性はある。だが、一度大戦争を起こせば、宇宙は大きく破壊されることは不可避だ』

『しかし、夢を統一する方法は一つではない。御身が許すのなら、

吾はその方法を語りつ』

とりあえず話は聞いておいつゝ、そう思つて僕は彼を促した。

『夢を統一するもう一つの方法。それは夢だけを一つにするのではなく、現を巻き込んで夢を統一すること。形としては、現を夢で浸食し、夢を現に染み込ませることになる。

だが、これを行うことは大罪を犯すことと同義だ。』

夢とは単に現の失敗作として存在するわけではない。現を循環する無数の魂が零す負の想念、それを拡散させ宇宙の彼方に消し去るために夢がある。

現と夢を統合してしまえば、魂の撒き散らす負の想念は、その統合された世界の中で処理されることになる。それは、膨大な量の異形として顯在化する。異形を徘徊する世界の理は、弱肉強食だ。御身は力のみが理となる世界を創ることになるのだ』

暴力の支配する世界を創ること、それが大罪の意味か。

「僕らの力で何とかならないの？」

『もちろん、御身が王となり統べることで宇宙に調和をもたらすことはできよう。しかし、それは人のみのままで不可能だ。広き宇宙を統べることができるのは神。　だが、神代が有限なのは既に実証済みだ』

彼の言つ通り、完全である世界である現からも神々は姿を消していき、末裔である皇族も第一次世界大戦に降伏したときに現人神を止めた。神の時代とて有限なのだろう。

一つ思いついた。

「トコ、君の主は、僕の前にもいたのかい？」

珍しく少し間があつた。答えづらいことだつたらしい。

『そうそう吾の主人になれる者はいない。‘天之常立神’と呼ばれるようになつてからは、御身が三人目の主だ。先の二人の主は、吾を使い何かを為すことはなかつた。　ただ、それはこの名である頃の話。それより昔、別の名で呼ばれていた頃は働きをすることもあつた。しかし、今それを御身に語ることはできない』

今の話は、日本神話よりも前の神代があつたことを示唆して

いる。

神は変わる。彼の言つままに僕が神となつたとしたら、僕も変化しながら永劫の時を過ごすことになるのだろうか。時代の変わり目に犯される大罪を背負つて、人として生きることを永遠に取り戻せないまま。

途方もない話だ。

僕だつて、ちつぱけな一人の人間ではなかつたのか？ 何処をどう間違つたら新世界の王だの神だのという話になるのか。

『御身は特別なわけではない。平凡でもないが。他の魂よりも持ち得た可能性が少し多かつた。それだけだ』

すべては僕の選択か。

「今、選ばないといけないのかい？」

『否。御身が滅びるまでで良い。御身が滅びる、その刹那まで吾は答えを待つことができる』

そこまで聞いて、僕は会話を打ち切つた。

少し、家族とも話したくなつた。

\*

居間とサキの部屋を隔てる襖障子の前に立ち、入つて良いかと尋ねる。どうぞ、と返答があつたので僕は襖を開けて部屋に入つた。薄暗い部屋。中央に正座してサキは僕を待ち受けていたが、

「あら……シミさんには暗いですわよね」

彼女は立ち上がり灯りを点けようとした。

「いいよ、そんなに楽しい話をしに来たわけじゃないんだし」

「ですか……、ネガイがいればお茶でもお出しできるのです

が

ネガイさんはまだアカについていてくれているようだ。  
サキと僕は薄闇の中で向かい合つて座つた。

「それで、何からお話し致しましょうか」

気負いなく彼女は聞いてくる。その声の調子に、僕は少しだけ肩の力を抜くことができた。

「そうだね…………まず、天乃常立と話したよ」

この話題で良いのだろうか。

しかし僕は思う、悲しいことを話してもきりがないだけだろうと。

「もう、決められたのですか？」

サキは、僕と天乃常立が何を話したかを訊かない。

「まだ、だよ。それで、サキに一つ訊きたいことがあるんだ

「何でしょう？」

「この夢まゆみはあとどのくらい保つの？」

「それを聞いてどうなされるのですか

サキの言つ通りだ。

しかし、他に尋ねることは思いつかないし、この質問を撤回する氣も起きない。そうして、僕が黙してしまったが、サキは質問には答えてくれた。

「この夢はシミさんがご健在な限りは、天乃常立によつて当分維持されるでしょう。シミさんが何らかの形でこの夢を去られたとしても、最期のお一人がここに来られるまでこの夢は存続します。しかし、いつかはこの夢も終わりを迎えることには変わりはありません

ん

「最期の一人？」

サキはぴたりと口を開いたし、それ以上何も言わなかつた。

僕がこの夢を去るとか。

それは世界を改変しに行くときだらう。だが、誰のために、何のために、僕はそれをするのだろう。

世界を変えるとしたら、僕には理由が必要だ。

ふと、問い合わせが生まれた。

「君は、夢同士が戦争することをどう思つているんだい？」  
「…」とサキは僕を探るよつに見た。

「…その質問には答えることはできません。答えれば、シミちゃんの選択に干渉してしまつことになりますから」  
そう言つてから、彼女は卒然と咳き込んだ。

「 サキ？」

白衣の袖で口を押さえながらサキは答える。

「すみません。実はこのところ体調が優れないのです」  
僕がヨミをこの夢に置いたせいか。

そう思つや、彼女は僕の心を読んだかのように首を横に振つた。  
「お気になさらないでください。もう、終わったことではありますか？」  
せんか？」

居住まいを正して彼女は言つた。

「それより、シミさんこそお疲れではありませんの？」  
そうかもしけない。

では、と彼女はここに来て始めて優しげにほほえんだ。

「少しの間、<sup>わたくし</sup>私と同じ床でお休みになりませんか？」

一瞬、頭の中が白くされた。  
イーリヤライズ

「サ、サキ……今はそつ言つ氣分じやないよ」

僕が言つと、サキは軽やかに笑つて答えた。

「私も同じですわ、さすがに。しかし、だからこそ、二人身体を並べて安らぎを得たいと思うのです。重ね合つのではなく」

僕はその時、家族というものを改めて認識した。

それは、広漠たる宇宙の中で、人々が結びつる最も強い絆の一つ。孤独を退け、安らぎを分かち合つことができる存在。

サキの敷いた布団は、やわらかに苺のにおいがした。

僕を包んだ二つの腕の中は、やわらかな花文目はなあやめのにおいがした。

ふいに、涙が落ちる。

「僕は、何のために生きているのだろう……」

大切な人を護るためにこれまで多くの人を殺し、でもその人も失つた。

僕のせいなのだろうか？ それとも、この宇宙のせい？

「ツミさん、私はここにいます。アカもネガイも、まだあなたの側にいます。でも、あなたが神になることを選んでしまえば、あなたはここにいられなくなります。

ツミちゃん、キズオトちゃん、ササヤキさんにナゲキさん。どの方もかけがえのない存在ではあります、それでこの宇宙全体を否定することができますの？」

彼女の言つことは尤もだと思った。この宇宙には、僕のものではない、悲喜こじもざ山の想いがある。

だけど

「僕は……悲しい」

あとは、ただ泣くことしかできない。

サキの胸に縋り付いて、僕はひたすら子供のように泣いた。

## 6・1 「別天津神」（後書き）

会話ばかりでしたね。トロの説明みたいな会話のおかげで文章の量も多めです。

それにしても、シミの冷静さにはちょっと難儀しました。本当に、家族を失ったことを悲しんでいないかのようなシミ。最後のシーンで、ようやく泣いてくれましたけど。

においの描写で用いた花は、実際のにおいよりも花言葉で選びました。だって、本物のにおいなんて良くわからないし……。

## 6・2 「みことのり」

天戸の宅に住む者が四人に減つてから三週間ほど経つた。  
月齢は朔を迎へ、また満ちて今は「張り月だ。

明るい月の夜、久方ぶりに戦争が起きた。

ぞろぞろとやつてくる敵の一陣。妖化した人間達の群れを、僕とアカは一人だけで迎え撃つ。

彼の戦力差は五十ほど。しかし、僕の傍らに立つアカにこれを恐れる様子はない。僕の腕を軽く抱き、くつろいでさえいるようにも見える。

が、そんな彼女を動搖させることを僕は言つてしまつ。

「アカ、ちょっと下がつてくれないかな？　はじめだけ、僕に任せて欲しいんだ」

何で、と当然の事ながら彼女が問う。

「私がやられると思つてるの？　馬鹿にしないでよ。戦闘力なら、火を使う私の方が上に決まつてるでしょ」

「僕は別に家に帰つてくれと言つている訳じゃないよ、アカ。僕の背中に隠れて、初撃だけ任せて欲しいんだ」

髪と同じ色の、赫い太めの眉を顰めて、しかし彼女は承諾してくれた。

「へまするんじゃないわよ。最初をしぐつたら、後が大変なんだから」

諭すように言つアカに、僕は、はは、と笑つて答えた。

「大丈夫。　まかせて」

渋々といった様子でアカが僕の背後に回る。

それを確認してから、僕は天乃常立を抜き放つ。蒼い月光の下、刀身は雪白の光を放つた。

「トド、僕の声が聞こえるかい？」

答えは即座に、僕の頭に届く。

『何用だ、我が主よ』

手の中の刀は、かつてのような暴走の気配を全く感じさせない。目覚めた彼方に宿る意識が、僕を主と認め己の力を自律しているからだ。

天乃常立を正眼に持ち、命令する。

「君の力を見せて。敵の首魁と他に一人だけ残して、他を殲滅するんだ。できるかい？」

『容易いことだ』

僕と敵との距離は最短でも三十メートル。

刀をまっすぐ振り上げ、力を込めず振り下ろす。

簡単な動作。しかし、發揮される威力は絶大。

敵陣が光に包まれ、収まったときには三つの影が残されるのみだった。

「ツミ、あんた今何をしたの……？」

背後から驚愕に震えるアカの声が聞こえる。

だが、僕は答えない。

『……瞬間移動する』

『では、空間を切り裂いて繋げればよい』

指示された通り、空を切ると光の裂傷が造られる。

そこに踏み入ると、次に立つ場所は敵の首魁 残された三体の中でも最も気配の大きい三本角の人間 の眼前だった。

咄嗟に身を退けようとする敵。僕はその胸に、ゆっくりと刀を突き刺した。

絶命すると妖化は解かれる。その敵の正体は、十四歳くらいの少女だった。

敗残兵となつた二人は、僕を追つてきたアカによつて塵も残さず焼き尽くされた。

「ツミ、今日はすごかつたわね。 て、何見ているのよ?」

僕は少女の骸を見ていた。

アカに問いかける。

「ねえ、この世界は間違つてないと考えたことはない?」

はあ? とアカは返事した。

「こんなこと、いつもの事じゃない。今更何を言つていいのよ?」

そうだ、これが僕らの日常だつた。

しかし、僕は思つよになつた。変えられる日常は、変えてしまおうと。

白い刀、僕を好いてくれる珊瑚色の瞳、天上の金色の月。

それらすべてを見て、僕は呟いた。

「現への侵攻を開始する」

これを宣言とした。

\*

家に帰ると、玄関でネガイさんが待つっていた。

「ついに決められたのですね」

低い声に一切の感情を込めずに、単に事実を確認するための口調で彼女は言った。

「うん、もう決めた。僕は、月神としてこの宇宙を創り変える」

そう言って、靴を脱いで三和土から上ると、黙つて彼女は中に通してくれた。

お吸い物のにおいがする。

戦いを済ませた僕とアカのための夜食。

背後で、アカがネガイさんに問いかける声が聞こえた。

「ねえ、ネガイ。ツミの様子が変だと思わない？　あいつ、何を言つているの？」

「ツミ殿は自らの運命を選ばれたのです。　新たな世界を創るために、人を捨て神となれることを」

困惑に満ちたアカの問いに、ネガイさんは極めて無感動に答えた。そして、ネガイさんは僕を追つてアカをうち捨てて居間に入ろうとする。

制止の声が響く。

「そんなんじゃ わかんないわよ！　どういうことか、いい加減私もわかるように説明しなさいよ！」

いらだつたアカの叫び。けれども、僕の心は何百年と生きた大樹の幹よりも揺らめかなかつた。

居間の敷居をまたぐとき、サキが僕と入れ替わった。

「ああがりなさい、アカ。あなたの疑問には、私がお答えしますから」

僕は黙々と切り身魚のお吸い物を食べ、アカは何も食べずサキとの問答に没頭していた。

囲炉裏端から二人の家族が消えて以来、僕らの食事も団欒もすっかり静かなものになってしまった。今日、久しぶりに会話が盛んになつたと思いきや、その話題は一人の若い男が全宇宙を変革しようとしているという物。目の前の光景は、僕の頭の中では、滑稽の一言で表現されるのみだった。

サキは話し、アカは聞いた。僕が夢同士の戦争を無くすために、現を含んだ全宇宙を変えようとしていること。そのための力、天乃常立のこと。僕が目的のために神となること。そして、そのためこの家を去ること。

僕が夜食を済ませたとき、彼女たちの会話の終了した。

アカがまず口から発した声は、深い戸惑いに満ちたものだった。

「何で……？ 莫迦じやないの、あんた……？」

誰も何も言わない。

「ササヤキも、あのミミツテ子供も、生きていたんだから死んだのも当然じゃない。キズオトがいなくなつたのも、戦う意志がなくなつた奴が戦場からいなくなるのと同じ。そんなことも、わからなくなつたの？」

僕に投げ掛けられる、張りつめた弓弦のような真剣な視線。

僕はそれをただ静かに受け止めた。

「この夢がいつか終わることも当然のこと。ただ、できる限り生きられるように私達は戦い続ける。あんただけ、それを受け入れてたんじゃないの？」

かつての僕はそうだった、と胸の中で思つた。

けれども、それは他に選択肢がなかつたからだ。僕自身と、なによりみんなの命を守るために戦うしか道がなかつたから、僕は戦い殺し続けた。決して、僕が望んだ生活ではなかつた。

僕は誰も殺したくなかった。

「仲間や家族を失つて悲しむのは僕らだけじゃない。他の夢の人達、そして完全な世界である現の人達でさえ、日々心のどこかで悲しみを覚えながら生きている。そんな世界は歪んでいると僕は思う。

そして、僕には歪んだ世界を直すことができるんだ」

アカの瞳に激怒の紅が宿つた。

「莫迦じやないの！？ 世界を直す？ あんた何様のつもりよ！ 私にだつて、他の夢の人達が悲しみを知つてゐることぐらいわかるわよ。 ツミ、あんたの罪はヨミを見殺しにしたことでも、サヤキやキズオトを救えなかつたことでもない。ましてや、何百の人間を殺したことでもない。あんたの罪は、傲慢 よ！」

傲慢<sup>ルシファー</sup>。 七つの大罪の一いつが僕の罪か。

「望むところだよ、アカ。これから僕は、人に生まれた身でありますから神の領域に乗り込むという大逆を犯すんだ。傲慢なんて、何でもないことだよ」

右頬に衝撃を覚えた。

アカが僕を殴つた。そして、僕を押し倒し被さるようにして口づけをした。

仰ぎ見た彼女の顔から、落ちてくる涙。

「あんたは大莫迦よ、ツミ。世界が何だつていうのよ。私には、全宇宙の苦しみより、今の生活が無くなつてしまふ方が苦しい。キズオトもササヤキも、私達の生活を守るために犠牲になつてくれたんじゃないの？ なのに、あんたは

ちらりとサキの方を見ると、彼女も同じ思いであるようだった。

憤りに歪んだ、アカの口元。

「もし、僕が

訊ねる前に、胸を叩かれて制止された。

「もし……もし、あんたに止める気がないなら、私が殺してあげるわ。髪一本も残らないように燃やしてやるんだから

僕を見つめる本気の瞳。

疲れたな。

この重い心は、彼女の炎に焼かれれば、軽やかな空気になつて空に昇つていけるのだろうか。決意といい悲しみといい、僕の心は様々なことで石のように重くされてしまった。石の心は動かない。この心を胸にしまったまま、肺を動かして呼吸するのは苦痛だった。いつそのこと、死んでしまいたいと思うほどに。

けれど、僅かに残つた人らしい心が、この想いを表に出すことを抑止した。そのかわり、僕はアカの身体を抱き寄せた。

「僕は君のことを

愛している？

僕はアカへの愛故に宇宙を変えようとしているのか？

一つだけ言えることは、僕は、アカ、それにサキにネガイさん、彼女たちの存在無しでは生きていく事ができないということだ。例え離れていても、例えいつか彼女が死んでしまうとしても、僕は彼女たちを護りたい。夢同士の戦争という理由で彼女たちを失うことは、断じて許さない。

僕はアカに問う。

「君は僕のことを愛しているの？」

さつと彼女の顔に朱が昇る。しかし、彼女の答えは、

「……ええ、愛しているわ。どうということか、言葉にはできないけど……。私は、あんたを無くして生きる気がしないの」

ひたむきな彼女の告白。

僕はアカに問う。

「僕は君のことを愛してはいけない」

彼女の表情に衝撃が走つた。

「僕は君のことの大切に思つてゐる。でも、この想いが愛なのかはわからない。

だから、僕は君を置いて現に下ろしつ。もし、君が僕を失うことができないのなら、僕を追つてくるといい。世界を変える僕の計画を邪魔して、この身を君の手で捕らえて欲しい。

これは僕らの愛を確かめるための遊戯だ。

僕が勝てば、愛ではなく欲望でもつて君を所有し奴隸としよう。君が勝つたときには、愛をもつてこの身を君に捧げよ！」

いつ言えれば、君とは戦場で共にいられる。

アカの唇を奪う。舌を侵入させ、眠りの力を送り込んだ。

彼女の瞼が降ろされ、身体から力が抜かれる。その身体を自分のかからそつと降ろし、床に寝かせた。

そして、僕はサキと向かい合つた。

「サキ、君のその、最期の一人、を迎えたら僕を追つて欲しい。これは、僕の頼みだ」

僕の言に、彼女は頬笑みをもつて答えた。

「わかりました。それがあなたのお望みでしたら、私はあなたを貫く槍ともなりましよう。その代わり、私が勝利を得た暁には、私と共に小さな家庭をもつことをお約束下さい」

悲壮感を全く感じさせない、明るい返答。思わず、僕も頬笑んでしまつた。

そこに、しかし、と異議を挟んだのはネガイさんだ。

「サキ様はお体が強くありません。この家から出てシミツ殿を追つことも、まして戦うことなど無理なことで御座います」

「いいのです、ネガイ。愛とは命を捧ぐもの。私もこの身の一つや二つ、何とでも致しましょう」

ネガイさんは本当にサキのことを大切にしているんだな、と思つた。

彼女のいう通り、サキの身体のことは心配だ。何とかならないものだろうか？

『その娘が女を捨てればよい』

卒然と、脇に置いていた天乃常立が提案した。

確かに、男になれば多少は身体も丈夫になるかもしぬないが

「ツミさん、どうかしましたの？」

僕が考え込みだしたのを、サキが鋭く見抜いた。

咄嗟にサキではなくネガイさんを見ると、彼女は天乃常立の言葉を聞いていたらしく、その瞳に微かながら迷いを浮かべていた。しかし、僕はその際だと思つて言つた。

「サキ……君、男になる気はない？」

一瞬、サキの顔から表情が無くなつた。だが、次の時には  
「良い案ですね。男性になつてしまえば先視の力は弱まるでしょ  
うけど、もうこの家を守らないのであれば必要のない能力でしょ  
うから」

そして彼女は立ち上がつた。

「では、アカが起きる前に済ませますか？ 私の闇やねで」

これをやれば、僕はもう引き返せなくなる。

だが、僕はサキの手を取つた。決めたから、宣言もしたから。僕  
は迷わない。

別れの刻がはじまつた。

## 6・2 「みじかのじ」（後書き）

何だか今回も話しの流れが変だつた気がします。今少し文章の流れをきちんと創つてから書くことを努力したいです。

執筆者である私は、温度の低いツミに振り回されています。それに起伏を何とかつけてみよつとしているからこんなことになるのかもしません。

新藤・千尋の言葉を借りるのなら

「それは、神様が弄つて いるからです」

みたいなものです。

「うん、ちやんと固くなるみたいだね」

「あ、あの、ツミさん？ 別にそこまでしていただきなくとも」

「ふふ……サキが恥ずかしがるなんて珍しいね。ほら、ちょっと  
こすつてみるよ」

「あ、ふつ 男の方でも、こんなに感じるものなんですね？」

「いいや……。元々が女の子だからかな？ そのうち慣れるかも  
ね」

「あ、あ……！ わ、わたくし、もつ ！」

「出したいの？ いいよ、僕の手にかけて」

「あの、でも……、つ！」

「力を抜いて、ちょっとだけ力を入れて解放する感じ」

く、と彼女 いや、彼の身体が震え、掴んだ生殖器の先から粘性の高い熱いものが迸る。変わらない高い声が、絶頂の叫びを放ち、やがて途絶えた。

気絶したサキを寝かせると、闇の薄い闇の中を、黒い着物を着たネガイさんが歩いてきた。

「もしかして、これが欲しいのですか？」

「 はい」

白い液体のついた手を差し出すと、ネガイさんはそれを熱心に舐め始める。

手のひらを舐める生暖かい感触を覚えつつ、頭の片隅で僕は思つた。

この戯れももう終わりだと。

夜が終わらなかつた。

一眠りしても、夜闇は変わらず外にあつた。満ちる手前だつた月は、時間を早めて満月となつて空の中心に坐していた。

星々も盛大に輝きを放ち、まるで昼間のような明るさだつた。

僕を待つてゐる。

しかし、僕は夜色の天球に命じる。

「この旅立ちは我のみのものに非ず。我を愛する者、赫き焰と太陽を従える者の旅立ちもある。天よ、我に仕えるのならば我が意を汲め」

言つや、空が変わり出す。月は東に、日は西に、対極の方位に対極である一つの輝きが向かい合つた。僕はこの様を当然のように見つめ、しかし心の中では微かに懼れた。

そんな誰そ彼の空の下、僕らは家の北にある活柵の霧処に訪れた。この夢から扉を開き、アカは現へ、僕は

「淡島　へと向かう

『心得た、我が主よ』

かつてキズオトから聞いた、純正の力が形を為したという伝説の地を目指す。

抜刀した天乃常立が強く輝き出す。それに応えて、八衢川を挟んだ対岸の霧の中で、何かが開く気配が伝わってきた。

大きな扉だ。

おそらく、活柵の霧処 全域が扉と化したのだろう。霧の中に足を踏み入れれば即、この夢から旅立つことになる。

だから僕らは、穏やかにたゆたう川の辺で別れを告げ合つことに

した。

まずはサキ。

いつもと変わらない鮮やかな巫女装束。性別を変えても、ゆつたりとした服の上からはその変化はわからない。かんばせもまた同じ。あどけない、愛らしい顔のままだ。

「サキ、少しの間寂しくなると思うけど、ネガイさんと一緒にで頑張つてね。現に来たら、まず一度だけは会いに行くから」

サキは慎ましやかに頬笑んで応える。

「ええ、いたしました。その時までは、あなたの征戦に武運がありますように祈つていましょう」

失望に心を奪われてしまつた僕と違い、彼女の微笑に何と希望が充ち満ちていることか。本当に、未来<sup>さき</sup>、という名は彼女にこそふさわしい。

次にネガイさんを見る。

喪服のような黒い着物に身を包み、静かな面持ちで僕を見ている彼女。搖りぎのない彼女の雰囲気は、頼もしいの一言に及ぶ。

「言つまでもないことがもれませんが、サキをお願いします。ネガイさん。サキの剣となり盾となり、彼女と共に戦つてあげて下さい」「こくり、とネガイさんは肯いた。

「承知しております、ツミ殿。刻が来れば、この身を貴方を討つための矢へと変じる覚悟をしております。ですから、一切の憂いは捨て、戦いに赴き下さい」

僕のすぐ傍にアカが立っている。

僕はまだ今すぐに彼女に別れを告げる気はない。しかし、彼女はサキとネガイさんに別れを告げなければならないはずである。

だが、彼女の口から言葉が出る兆はない。

僕はそつと自分と同じ背丈の女性の手を取って、川を渡り始めた。

「 アカ！」

呼び止める声。

アカは俯いたまま、振り向こうとしない。

「 see you again です、アカ。私達は、これらも友達ですわ」

顔を背けた、アカの瞳に何が浮かんでいるのかはわからない。

僕は誰にも何かを言つことはせず、ただサキに一度頷いてからアカの手を引いて霧の中へと向かつた。

科学では知ることのできない神秘的な力。あらゆる世界と通じるための扉を開くために多量の神祕靈力<sup>エナジイ</sup>が活性化された。活沢の霧処は、極彩色の光が舞う幻想的な美しさに満たされた場所となつていた。

今、左手はアカの右手を握っている。

この手を離せば、僕らはそれぞれの目指す場所へ、半ば流されるようにして運ばれるだろう。

別れを告げるために、手を離してしまわないように注意深く彼女の左手首を握り直して向かい合つた。

田を合わせたとき、彼女の双眸は後悔の色に染まっていた。

「私……莫迦ね。あんたに劣らぎす」

彼女が零した。

「私、自分の気持ちしか、あんたのことしか見てなかつた。私が‘私達’と言つとき、私は自分とあんたのことしか考えていなかつた。でも、私以外の人は違つた。サキもネガイも、あんたでさえも、自分以外の三人の家族のことを見ていた」

手を握り替えて、彼女は身体の横側を僕に見せて遠くを見やつた。  
「もう、サキに別れを言つことはできない。うん、できるかもしれないけど、それは反則だから。……次に会うときは、きっとあの子とは敵同士になつてゐる。だから、もう友達としてさよならすることができない」

そして、彼女は僕に向き直つた。

あたたかな熾火のような、慈愛に満ちた瞳。ゆつくりと瞼を降ろして、僕らは口づけをかわした。互いの唇を味わい、舌を絡め合つた。唇を離すと、名残惜しむよう<sup>アハハ</sup>寝が橋ねがはしをつくつて、壊れた。

再び見つめ合つ。ファイアオパールの瞳には、毅然とした光が宿り、口元にはいつものような強気な頬笑みがあつた。

「これであんたともお別れ。次に会うときは、本気であんたと殺し合つ。この胸の愛を焚き代にして、憎しみの炎でその罪ごと焼き尽くしてあげる」

僕は笑つて答える。

「今日の君は、とても素直だね」

「……最後だから、ね。ここで別れた後は、あんたを憎悪でもつて想い続けることになるから」

彼女がそう言つと、赫い瞳が一瞬だけちらりと金色になつた。笑みをかわし、横に並ぶ。

しばらく一緒に歩いてから、互いにそつと結んだ手をほどいた。わずかに歩く方向を左右にずらせば、相手の姿は瞬く間に見えなくなつた。

「さよなら、私の用」

『御身はまだ引き返すことができるのだぞ』  
ふいに、天乃常立が言った。

「トコ、気遣ってくれているのかい」

『主となつた人間に宇宙を変えさせるのが吾の存在理由だが、これは責務ではない。御身が辞するのなら、吾はまた次の時を待つ。それだけのことだ』

「 僕は君のために宇宙を変えるわけじゃない。僕は……  
みんなのために、宇宙を変えるんだ」

そう、「みんな」のために。

何と漠然とした存在だろう、「みんな」とは。僕は、<sup>ヒューリスティック</sup>利己的な理由で犯すだろう大罪の呵責に早くも悩み出しているらしい。そして今、僕はその言い訳のために、「みんな」という妖しい存在にこの行為を捧げることを決めたのだ。

罪を犯す者を悪党と呼ぶのなら、僕は小悪党だ。

それでも、僕は戦争を、侵略を、征服をするだろう。絶対的な力を手に、利己的な想いを胸に。いつか誰かに倒されることを望みながら。

迷わない。

行こう、力を得て、心を捨てに。倒されるべき化け物となつて、失望を爪牙に宇宙を搔き乱そう。

これが、ツミという存在の終わりでありはじまりだった。

はじまりのおわり

この机にやりとりまで来てしました。

結局私は、この小説において執筆者にはなれなかつたです。ただ、シニの言葉をつなぐ聴者、つまりこれを読んでいる皆様と大差なく終わつてしまひます。

努力を、血らに命じます。続編もあることですし、なんとか発展していきたいものです。  
では、終幕で会いましょ~♪

## 終幕「月二捧グ追走曲ト短調・導入部

サキが物語りを終えた。

その夜、いつも灰色だった月が綺麗な青になつていた。

その夜、吹かないはずの風がごうごうと吹いていた。

その夜、星さえも明るく光っていた。

味のしない魚の干物を囁りながら、ボクはサキに質問した。

「じゃあ……サキとネガイは、ご主人様 ツミを追いかけに行くの？」

サキは、ええ、とやんわり笑つて答える。

「そして、あなたもです、チヨ。あなたも、ご主人様、にお会いしたいでしょ？」

まあ、サキの言うとおりかもしれない。

そもそも一体どういうわけで猫だつたボクが人間になつたのかな。そして、どうしてご主人様のいた夢まぼろしへ来ることになつたのかな。

運命、という言葉がボクの頭をよぎった。

そうだ、ボクはもしかしたら運命みたいな何かの決まりで、ご主人様に関わる必要があるのかもしれない。

ボクはご主人様のことをどう思つてゐるのかな？

会いたい、と思う。側にいたいと感じる。ボクのご主人様だから、あのちょっと寂しそうな所が好きだから。

でも、ボクの中のさめた部分が、ご主人様は悪いことをやつて、側にいてはいけないと思わせる。

誰かが止めてあげなくてはいけないと感じる。

ボクは「ご主人様に同情しない。」ご主人様に起こつたことはかわい  
そういうことだつたと思うけど、それから今のご主人様のあり方を選  
んだのは、彼自身の意志だ。ボクが同情する必要はないし、する権  
利だつてないのかもしれない。

だけど、会いには行きたい。「ご主人様のやつていること、本当は  
良いことかもしれないし、何でだつたとしてもご主人様に関わりの  
あるボクは知るべきなのだろうから。

「行くよ、ご主人様に会いに」

「そうですか。では、早速出立することにいたしましょう」

「早速つて、今すぐ出るつてこと?」

「実を申しますと、この夢も今日でお終いなのです。あと一時間  
も経てば、星が落ちてきて大変なことになりますわ」

そう言つサキには、なんていうかせつぱつまつた感じが全然なか  
つた。

さらに、ボクがあつけにとられて何も言えないうちに、彼は呑氣  
そうに言葉を続けた。

「現に<sup>ひつ</sup>降り立つ際、<sup>わたくし</sup>私達は同じ場所にはいなでしよう。しかし  
チヨ、あなたの身体には無数の呪印を仕込んでおきました。それは、  
現にいても人の姿を維持するためのものや、術力と体力を向上させ  
るものがあるのですけど、半年以内に私が更新しないと消えてしま  
うのです。ですから、それまでに私を捜して合流してくださいまし」

「……サキつて、強引だよね」

ボクがやつと言えたのはそんなことだつた。

サキは満面の笑みで答える。

「嬉しい褒め言葉ですね。でも、<sup>わたくし</sup>私の強引さもシミさんには通用  
しませんでしたわ」

ちよつと寂しそうになつたサキ。

何となく、ボクはこんな質問をする。

「サキは、ボクのこと好き？」

とたんに彼は、あはは、と笑い始めた。

「 そうですね、浅い意味では好きですわよ。あなたの身体も、もっと遊んでみたいと思いますわ」

彼の細い指先がボクの首筋に触れる。調教されたこの身体が、過敏に反応してしまう。

「ほら、かわいい。 でも、もっと深い意味ではどうでしょ？ 私は、貴方がどういう人かほとんど知りませんわ。身体のことをいくら知っていても、心の中ではわからない。そつではありますこと？」

サキの言つとおりだと思った。

ボクもサキのことを大して知らない。昔の話を聞いたけど、今のサキが何を考えているのかはわからない。

「サキはどうするの？ ツミに会いに行くんだよね」

彼はゆるゆると首を横に振った。

「いいえ、私はまずキズオトちゃんに会いに行きます。 彼女の力を貸してくださいために」

「 キズオトは戦ってくれるのかな？」

彼女は現での生活に疑問を持ちながらも幸せと思つてゐるみたいだつた。その彼女の生活を乱しても良いのかな？

「 現は既にどこであろうと戦火の燻つてゐる状況のはずです。あの子は元より戦士。跋扈する異形に抗しようとしているはず。そして、戦いの起こりに自分が関わつてゐることを思い出せば、きっと何かをしようとするでしょう。

その時、彼女が誰と共にしようと決めるにしても、誰かが導いてあげる必要があります。その役目は、きっと私の物ですわ」

サキは自分の立場を、しなくちゃいけないことを、良く考えているんだとボクは感じた。

ボクは

「貴方の行く先は、サキ私ではなく大地が示すでしょ。焦ることはありません。心の耳を澄ませておきなさいまし」

……大地。

サキとネガイが立ち上がり、部屋にある裏口の前に立った。

戸板をネガイが手のひらで撫でる。すると、撫でられた跡は漆で描いたように黒くなり、やがて跡が広がつて扉は黒く塗りつぶされた。

さあ、とサキがボクは誘つた。

「まずあなたからお行きなさい、チヨ地代。私の居場所は身体に刻まれた呪印が、あなたの行く先は母なる大地が教えるでしょう。怖れていけません。さあ、踏み出しなさい」

ボクは促されるままに、黒い深淵の扉の前に立つた。

左には静かに頬笑むサキ、右には無表情なネガイ。サキはボクより少し背が高く、ネガイさんはボクと同じくらいだ。

ボクはサキに口づけした。

彼は少し驚いたみたいだつたけど、すぐ歯を開いて、ボクの舌を招き入れたりした。

「ボク……何もわかんないよ。自分が何をしたらいいのかも、サ

キのことをどう思つてるかも」

サキは黙つて聞いていた。

「サキにされたことは、嫌だつたよ。でも、サキのことは悪い人だとは思えない。……それで……えつと……」

そつとボクの頬に唇が触れた。

「お行きなさい、すべての想いを知るために。――これからはじまるのです」

闇の中に踏みいることは大して勇気が必要なわけじゃなかつた。身体の感覚がなくなり、ただ流されるような感じがしていく。

流れの中で、ボクは月の神となつたゞ主人様を追つことを考えた。

想いを知るための旅

## 終幕「月一一挿グ追走曲ト短調・導入部」（後書き）

旅立ち、と言つひとでこの小説はお終いです。近いうちに次回作を書き始めますが。

本当に、私はこの小説について何も理解することができませんでした。そのためには次回作を書く、チヨ達の旅についていく。読者の方々には迷惑な話でしようけど。

しかし、小説を書くことは良いことです。小説以外の創作活動もすべてそうです。何かを創るということは人間にしかできないこと。私は何も知りませんが、だからこそ何かを知るために小説を書くのです。

皆様も、何かを為されていますか？ 失望せず、失望しても、歩き続けていますか？

感想・評価お待ちしております。もしありましたら、次回作に反映させていきます。

ありがとうございました。また会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5019d/>

---

my moon

2010年10月8日13時50分発行